県道大久保犀川線改築事業関係埋蔵文化財調査報告２

大久保向原遺跡
大 藪 遺 跡

－福岡県京都郡みやこ町所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第233集

２０１２

九州歴史資料館

県道大久保犀川線改築事業関係埋蔵文化財調査報告２

大久保向原遺跡
大 藪 遺 跡

－福岡県京都郡みやこ町所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第233集

1．大久保向原遺跡第２次調査区遠景

2．大藪遺跡遠景

序

福岡県教育委員会では、県道大久保犀川線改築事業に係り、京都郡みやこ町勝山に所在する大久保向原遺跡と大藪遺跡の発掘調査を実施いたしました。これらの遺跡の周辺には、国指定史跡である綾塚古墳や橘塚古墳、御所ヶ谷神籠石など、数多くの遺跡が分布しており、古代史上たいへん重要な地域として知られております。今回の発掘調査では、弥生時代や古墳時代の墳墓と、中世の集落が確認されました。特に、中世の大溝は居館跡に伴うものと考えられ、興味深い成果であるといえます。周辺の数多くの遺跡とあわせて検討することにより、具体的な地域史の復元に役立てることができるものと期待されますが、そうした成果が文化財愛護思想の啓発に繋がるものとなるよう努めていく所存であります。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成24年３月31日

九州歴史資料館長　西谷　　正

例 言

1　本書は、県道大久保犀川線改築事業に伴い平成16年度及び平成20～22年度に福岡県教育委員会が実施した、福岡県京都郡みやこ町所在の大久保向原（OOKUBO － MUKAIBARU）遺跡および大藪（OOYABU）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、福岡県土木部（現 . 県土整備部）道路建設課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。報告書作成は福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。

3　本書に掲載した遺構図の作成は、現場作業員の協力を得て調査担当者が行った。遺構写真は調査担当者が撮影し、空中写真はラジコンヘリによるものは(株)熊本航空に委託し、気球によるものは(有)空中写真撮影企画に委託した。

4　出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館で実施した。遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。

5　出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館で保管する。

6　本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の１/25,000地形図「行橋」および勝山町発行の１/2,500基本図を改変したものである。本書で使用する方位は座標北である。

7　本書の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅲ－２とⅢ－３の一部を岸本圭、Ⅲ－１・３を吉田東明が行い、編集は岸本が行った。

本文目次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査に至る経過…… 1
　2　調査の経過…… 2
　3　調査・整理の体制…… 4
Ⅱ　位置と環境…… 5
　1　地理的環境…… 5
　2　歴史的環境…… 5
Ⅲ　調査の内容…… 9
　1　大久保向原遺跡　第１次調査…… 9
　2　大久保向原遺跡　第２次調査…… 27
　3　大藪遺跡…… 35

図版目次

巻頭図版　1.大久保向原遺跡第２次調査区遠景
　　2.大藪遺跡遠景
図版１　1.大久保向原遺跡第１次調査区遠景（北から）
　　2.大久保向原遺跡第１次調査区遠景（南から）
図版２　1.大久保向原遺跡第１次調査区全景（上空から）
　　2.試掘第１Tr（北から）　3.試掘第２Tr（北から）
図版３　1.１号竪穴建物（南東から）2.１号掘立柱建物（東から）
　　3.２号掘立柱建物（南上空から）
図版４　1.１号土坑（北から）　2.２号土坑（西から）　3.３号土坑（北から）
図版５　1.４号土坑（東から）　2.５号土坑（南から）　3.６号土坑（南西から）
図版６　1.７号土坑（南西から）　2.１号溝（南から）　3.２号溝中央付近（北から）
図版７　1.２号溝西側（北から）　2.２号溝南側落ち込み（西から）
　　3.３号溝（南から）
図版８　1.出土遺物①（掘立柱建物・土坑出土遺物）2.出土遺物②（溝出土遺物）
図版９　1.大久保向原遺跡第２次調査区遠景（北から）
　　2.大久保向原遺跡第２次調査区遠景（南東から）
図版10　1.大久保向原遺跡第２次調査区１区全景（上空から）
　　2.大久保向原遺跡第２次調査区２区全景（上空から）
図版11　1.１号土坑（南東から）　2.２号土坑（北から）　3.３号土坑（南から）
図版12　1.４号土坑堆積状況（北西から）　2.４号土坑（西から）
　　3.５号土坑堆積状況（北西から）
図版13　1.５号土坑（南西から）　2.６号土坑堆積状況（南西から）

３.６号土坑（南から）
図版14　１.１・３号溝（北西から）２.１号溝南半（北から）
図版15　１.２号溝（北から）　２.ピット瓦器椀出土状況
３.出土遺物
図版16　１.大藪遺跡第１次調査区遠景（北上空から）
２.大藪遺跡第１次調査区遠景（西上空から）
図版17　１.大藪遺跡第１次調査区遠景（東上空から）
２.大藪遺跡第１次調査区全景（上空から）
図版18　１.大藪遺跡第２次調査区遠景（北上空から）
２.大藪遺跡第２次調査区北半部遠景（南上空から）
図版19　１.大藪遺跡第２次調査区北半部遠景（東上空から）
２.大藪遺跡第２次調査区北半部全景（上空から）
図版20　１.大藪遺跡第２次調査区北半部中央付近（上空から）
２.大藪遺跡第２次調査区南半部全景（上空から）
図版21　１.１号土壙墓（南から）　２.２号土壙墓（南から）３.３号土壙墓（南から）
図版22　１.４号土壙墓（南から）　２.７号土壙墓（東から）３.10号土壙墓（北から）
図版23　１.11号土壙墓（南から）　２.12号土壙墓（南から）３.13号土壙墓（南から）
図版24　１.14号土壙墓（北から）　２.15号土壙墓（北から）３.20号土壙墓（北から）
図版25　１.22号土壙墓（北から）　２.８号土坑（東から）　３.16号土坑（東から）
図版26　１.17号土坑（東から）　２.６号溝（東から）　３.１号竪穴建物（南から）
図版27　１.６号土坑（南から）　２.５号土壙墓（南から）３.１号配石墓（南から）
図版28　１.９号土坑（東から）　２.18号土坑（西から）　３.19号土坑（南から）
図版29　１.21号土坑（東から）　２.23号土坑（北東から）３.24号土坑（南東から）
図版30　１.25号土坑（東から）　２.４号溝西端土層（東から）
３.４号溝Ｈ－Ｈ’断面土層（東から）
図版31　１.４号溝Ｉ－Ｉ’断面土層（北から）　２.４号溝Ｏ－Ｏ’断面土層(北東から)
３.５号溝西端土層（東から）
図版32　１.５号溝Ｋ－Ｋ’断面土層（北から）　２.３号溝Ｇ－Ｇ’断面土層（北から）
３.３号溝底面（南から）
図版33　１.１号土塁状遺構（東から）２.９号溝（東から）３.10号溝（東から）
図版34　出土遺物 ①
図版35　出土遺物 ②
図版36　出土遺物 ③
図版37　出土遺物 ④
図版38　出土遺物 ⑤

挿図目次

第１図　みやこ町の位置…… 5
第２図　周辺遺跡分布図（１/25,000）…… 6
第３図　遺跡周辺地形図（１/5,000）…… 8
第４図　大久保向原遺跡第1次調査区遺構配置図（1/300）…… 9
第５図　大久保向原遺跡第1次調査区周辺地形図（1/1,000）…… 10
第６図　１号竪穴建物実測図（１/60）…… 11
第７図　１号掘立柱建物実測図（１/60）…… 11
第８図　掘立柱建物出土遺物実測図（１/3）…… 12
第９図　２号掘立柱建物実測図（１/60）…… 12
第10図　１～４号土坑実測図（１/30）…… 14
第11図　土坑出土遺物実測図（１/3）…… 15
第12図　５～７号土坑実測図（５･７は１/30、６は１/60）…… 16
第13図　１・３号溝断面図（１/40）…… 18
第14図　２号溝実測図（１/60）…… 19
第15図　溝出土遺物実測図（１/３）…… 20
第16図　ピット出土遺物実測図（１/３）…… 22
第17図　試掘調査出土遺物実測図（１/３）…… 23
第18図　石製品実測図①（１/２）…… 23
第19図　石製品実測図②（１/２）…… 24
第20図　大久保向原遺跡第２次調査区周辺地形図（１/1,000）…… 26
第21図　大久保向原遺跡第２次調査区遺構配置図（１/300）…… 27
第22図　１・２号土坑実測図（１/30）…… 28
第23図　土坑出土遺物実測図（１/３）…… 29
第24図　３～６号土坑実測図（１/30）…… 30
第25図　１号溝土層図（１/60）…… 32
第26図　溝出土遺物実測図（１/３）…… 33
第27図　ピット出土遺物実測図（１/３）…… 34
第28図　大藪遺跡周辺地形図（１/1,000）…… 36
第29図　大藪遺跡遺構配置図（１/200）…… 37－38
第30図　大藪遺跡第２次調査区基本土層図（１/40）…… 39
第31図　１～４号土壙墓実測図（１/30）…… 41
第32図　３・10号土壙墓出土遺物実測図（１/４）…… 42
第33図　７・10～12号土壙墓実測図（１/30）…… 43
第34図　13～15・20号土壙墓実測図（１/30）…… 44
第35図　22号土壙墓実測図（１/30）…… 45
第36図　８・16号土坑実測図（１/40）…… 47
第37図　８・16号土坑出土遺物実測図（１/4）…… 48

第38図　17号土坑実測図（１/40）…… 49
第39図　17号土坑出土遺物実測図（１/4）…… 50
第40図　６号溝実測図（１/60）…… 51
第41図　６号溝出土遺物実測図（１/３、1･2は１/４）…… 52
第42図　１号竪穴建物実測図（1/60）…… 53
第43図　１号竪穴建物カマド実測図（１/30）…… 53
第44図　１号竪穴建物出土遺物実測図（１/3）…… 55
第45図　６号土坑実測図（１/30）…… 55
第46図　６号土坑出土遺物実測図（１/３）…… 56
第47図　１号掘立柱建物実測図（１/60）…… 57
第48図　５号土壙墓実測図（１/30）…… 57
第49図　５号土壙墓出土遺物実測図（１/３）…… 58
第50図　１号配石墓実測図（１/30）…… 59
第51図　１号配石墓出土遺物実測図（１/３）…… 59
第52図　９・18号土坑実測図（１/60）…… 60
第53図　18・21号土坑出土遺物実測図（１/３）…… 61
第54図　19・21号土坑実測図（１/60）…… 62
第55図　23～25号土坑実測図（１/60）…… 63
第56図　23号土坑出土遺物実測図（１/３）…… 64
第57図　25号土坑出土遺物実測図（１/３）…… 65
第58図　１・２・７・８号溝断面土層図（１/20）…… 66
第59図　２号溝出土遺物実測図（１/３）…… 67
第60図　３～５号溝断面土層図（１/40）…… 68
第61図　４号溝断面土層図（１/40）…… 69
第62図　４号溝出土遺物実測図①（１/３）…… 70
第63図　４号溝出土遺物実測図②（１/３、27～30は１/４）…… 71
第64図　４号溝出土遺物実測図③（１/３）…… 72
第65図　４・５号溝出土遺物実測図（１/３、１～５･19～21は１/４）…… 74
第66図　８号溝出土遺物実測図（１/３）…… 76
第67図　３号溝出土遺物実測図（１/３）…… 77
第68図　３号溝実測図（１/60）…… 78
第69図　４・５号溝、土塁状遺構断面土層図（１/60）…… 79
第70図　第１次調査ピット出土遺物実測図（１/３、12～29は１/１）…… 80
第71図　第２次調査ピット、包含層出土遺物実測図（１/３、16～19は１/４）…… 81
第72図　試掘調査出土遺物実測図（１/３）…… 82
第73図　土製品・石製品・金属製品実測図（1･5～8は1/2、2･3は1/3、4は1/4）… 83
第74図　弥生時代土壙墓の位置…… 85
第75図　方形区画想定図…… 87

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

県道242号大久保犀川線は福岡県京都郡みやこ町勝山大久保から犀川本庄を結ぶ県道である。北は県道椎田勝山線に接続し、南は県道下深野犀川線に接続する手前で県道行橋添田線と交差する。県道椎田勝山線及び県道行橋添田線は福岡県の中央部である筑豊地域と東部である京築地域を結ぶ交通量の多い幹線道路であり、県道大久保犀川線はこれらをつなぎ利便性を高める効果があると期待される。また、みやこ町から大分県境の上毛町までを１時間で結ぶ京築広域農道（京築アグリライン）の北端としての位置づけもなされるものである。しかし、北側起点に近い大久保集落内は道路幅が狭くカーブも多いことから改良が求められるところであった。今回の事業地は、京都郡みやこ町大久保地内における道路改築事業により新設される地点である。

平成16年度に年度当初の計画には挙がっていなかったものの、諸般の理由から11月に急遽、みやこ町勝山大久保2746－１、2747－２、2736－３番地の長さ114m の区間で道路改良工事が進められることとなり、福岡県土木部京築土木事務所（現県土整備部京築県土整備事務所）から福岡県教育庁京築教育事務所に協議が持ち込まれた。この地点については工事の進行上12月末日までに発掘調査を完了する必要があったことから、急ぎ確認調査を実施し、遺構が確認された2746－１、2747－２番地の二筆、約750㎡について直ちに本調査の準備に着手することとなった。なお2736－3番地は低木に覆われていたため、発掘調査と並行して人力で伐採を行い、確認調査を行うこととした。この大久保向原遺跡第1次調査は平成16年12月13日に重機による表土剥ぎに着手し、12月28日に完了した。

大久保向原遺跡１次調査地点より北側水田部は平成17年11月21日に試掘調査が実施され、昭和50年代の圃場整備事業により破壊は受けているものの、一部に文化財が確認され、本発掘調査の必要があるとされたが、改築事業はしばらく先で、かつ耕作を続ける点からも文化財調査は先延ばしされた。ところが、平成20年度の年度末近い段階になって、緊急雇用の関係もあり、平成21年度当初には改築工事着手との連絡があった。それには田植え前に、事業予定地の水路を完備する必要があり、そのためにも平成20年度内に発掘調査を完了させてほしいとのことであった。文化財側は急遽対応する必要があったため、町教育委員会では予算化の関係上対応ができず、県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。この地点も小字名は向原であり、大久保向原遺跡第２次調査として平成21年２月26日に重機による表土剥ぎに着手し、３月27日に作業を終了した。

大久保向原遺跡試掘調査

大久保向原遺跡の北側、谷を挟んだ対岸には周知の埋蔵文化財包蔵地である大藪遺跡が所在する。大藪遺跡の確認調査は平成21年10月19日に実施され、路線全面にわたり文化財が存在するものと想定された。発掘調査は早

期に終了してもらいたいとの要望であったが、用地取得の完了状況から、事業予定地のほぼ中央を取り急ぎ記録保存の措置を講じることとし、平成22年２月２日から重機による表土除去作業に着手した（大藪遺跡１次）。年度末に近い３月25日まで調査を実施し、平成22年度に引き続き調査に着手することとした。なお、大久保向原遺跡と大藪遺跡間の谷部の試掘調査は、水田から水が引かず調査が困難な状況であったが、大藪遺跡に近い水田に入れたトレンチにて文化財が確認されなかったことから、調査は不要であると判断した。

平成22年度は昨年度に引き続き発掘調査を行う旨、京築県土整備事務所と協議が整っていたが、諸般の理由により実際に発掘調査に着手できたのは８月に入ってからであった。道路建設工事着手は９月中旬を予定されていたため、調査開始当初から迅速な作業の遂行、期間内の調査完了を余儀なくされていた。予想以上に多彩な遺構が存在し驚かされたが、９月15日に全ての作業を完了した。

県道大久保犀川線の改良事業は、コーナーの多い山越えを解消するみやこトンネルが平成23年５月30日に開通したことにより完了し、県道大久保犀川線から京築広域農道に繋がる京築アグリラインが全線開通となった。

２　調査の経過

大久保向原遺跡第１次調査は、発掘調査に必要な執行委任の手続き等を終え、平成16年12月13日に調査に着手した。この日に重機を搬入し、調査区の北側から表土の掘削を進めていった。翌14日に機材搬入、作業員の事務手続きや安全衛生講習等を行い、午後から早速遺構確認作業を進めていった。限られた日数で調査を完了せざるをえないため、作業員は通常よりも多い人数で臨むこととした。またこの日から並行して2736－３番地の確認調査も行った。15日には確認調査を終え、この場所にまでは遺跡が広がっていないことを確認した。同日に測量のための10m メッシュ杭打設とレベル移動を行った。12月17日には北半部の２号溝以外の遺構掘削をほぼ終了し、南半部の遺構確認作業へと移ったが、２号溝はかなり深い遺構であることが判明し、湧水もあって予想以上に手間が取られることとなった。12月21日にはほぼ全ての遺構掘削を完了し、実測作業を鋭意進めながら翌日の空中写真撮影のための清掃作業を行った。22日午前に空中写真を撮影、午後に個別遺構写真の撮影を行い、その後図面作成と完掘作業を進めていった。12月28日にようやく遺構を完掘、作図作業も完了し、並行して調査道具の片付け等を行い、この日の午後に撤収作業を行って調査を完了した。

大久保向原遺跡遺構検出

大久保向原遺跡第２次調査は水田２面分を調査対象としたが、南側を１区、北側を２区とした。平成21年３月５日から作業員とともに作業を開始した。作業は１区から着手したが、１区は井戸である２号土坑を除き３月12日には作業をほぼ終了した。３月16日からは２区に着手。１区よりも遺構の残存は良く、

ピットも深いものが多いが、３月18には２区のピット・土坑の掘削がほぼ終了した。３月25日にバルーンを用いて空中写真撮影を予定するが、強風のため延期し、翌26日に無事に撮影を行った。３月27日に機材等を撤収し、現場作業を終了した。

大藪遺跡第１次調査は、平成22年２月２日より重機による表土剥ぎを行った。表土直下で遺構面に至る部分が多い一方、東側には落ち込み部があり上層にはゴミを多く含む状況が確認された。予想以上に排出される土量が多いことがわかったが、翌年度調査地内に排土を置く事ができた。２月５日より作業員とともに作業を開始したが、遺構面に竹根が酷くその除去から取り掛かることとなった。遺構掘削は２月12日から開始し、雨天に悩まされつつも作業は比較的順調に進行した。２月16日にピットからガラス玉が出土し、当ピット埋土については水洗を実施した。２月19日には降雪があるなど寒い日々が続いたが、大溝掘削のような重労働は順調に進んだ。ラジコンヘリを用いた空中写真撮影を３月15日に予定したが、雨天により延期。３月18日は強風のためさらに延期となり、翌19日に無事に撮影を終えた。第１次調査の作業は３月25日に終了した。

大藪遺跡第２次調査は、調査対象地のうち中央付近を既に第１次調査で完了していたため、北端から表土掘削を行い、北側調査区の表土掘削終了後、南側調査区の表土掘削へと進むように計画し、平成22年８月５日に重機を搬入して表土掘削作業を進めた。翌８月６日は発掘器材を搬入、午後から作業員を集めて事務手続きや諸説明、安全衛生講習等を行い、その後遺跡周辺の環境整備等を行った。８月10日には建機の搬入を行い、環境整備終了後、早速この日から遺構確認作業を進めていった。８月16日に10m メッシュの測量杭打設、17日にレベル移動を行い作図作業の準備を進めた。８月18日頃から、予想以上に数多く見つかった土壙墓の掘削と作図作業を進める一方で、L字状に屈折する複数の大溝の存在が判明したため、作業員の増員を急遽手配することとした。８月26日頃から北側調査区の南半部の遺構検出に着手した。９月６日からは北側の掘削作業もおおよそ完了し、写真撮影、図面作成へと進捗する一方で、南側調査区の遺構検出へと作業を進めた。９月13日には北側、南側の両調査区ともほぼ掘削作業が完了し、清掃作業の後、９月14日に気球による空中写真撮影を行った。その後、掘り残していたベルト部分の掘削や配石の除去作業等を行い、９月15日に作図作業を完了、同日に建機や発掘機材を撤収し、全ての作業を完了した。

大藪遺跡表土掘削

完成間近の大久保犀川線（大藪遺跡）

3　調査・整理の体制

平成16年度から平成23年度の発掘調査および整理作業の関係者は以下のとおりである。

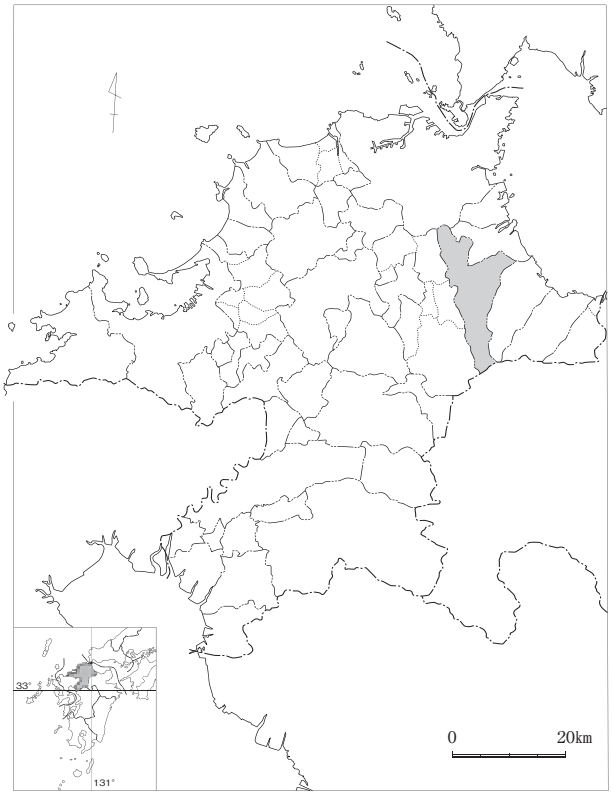
	平成16年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
総括				
福岡県教育委員会				
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	杉光　誠
教育次長	清水 圭輔	楢崎洋二郎	亀岡　靖	荒巻 俊彦
総務部長	中原 一憲	荒巻 俊彦	荒巻 俊彦	今田 義雄
文化財保護課長	井上 裕弘	磯村 幸男（本副理事）	平川 昌弘	平川 昌弘
副課長		池邉 元明	池邉 元明	伊﨑 俊秋
参事	新原 正典	新原 正典		
課長補佐	安川 正郷（本参事）	前原 俊史（本参事）	前原 俊史（本参事）	日高 公徳（本参事）
課長技術補佐	川述 昭人（本参事）	小池 史哲（本参事）	小池 史哲（本参事）	小池 史哲（本参事）
	木下　修（本参事）			伊﨑 俊秋（本参事）
庶務				
管理係長	稲尾　茂	富永 育夫	富永 育夫	富永 育夫
管理係	末竹　元	小宮 辰之	野田　雅	仲野 洋輔
調査				
調査第一係長	小池 史哲（本参事補佐）	小田 和利	吉村 靖徳	吉村 靖徳
調査第一係	吉田 東明（調査）	岸本　圭（調査）	岸本　圭（調査）	吉田 東明（調査）

	平成23年度
総括	
九州歴史資料館	
館長	西谷　正
副館長	南里 正美
総務室長	圓城寺紀子
文化財調査室長	飛野 博文
庶務	
総務室	近藤 一崇
整理報告	
保存管理班長	加藤 和歳
参事補佐	小池 史哲
福岡県教育庁総務部文化財保護課	
文化財保護係	吉田 東明（整理・報告）
企画係	岸本　圭（整理・報告）

なお、発掘調査および整理・報告書作成作業にあたり、みやこ町教育委員会をはじめとして御理解・御協力をいただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境



第１図　みやこ町の位置

今回報告する大久保向原遺跡と大藪遺跡は、福岡県の北東部、福岡県京都郡みやこ町に所在する。みやこ町は平成18年３月20日に、勝山町・豊津町・犀川町が合併して発足した町であり、遺跡は旧勝山町に所在する。東は行橋市と隣接し、その市域を中心に通称京都平野がひろがる。京都平野は周防灘に面するが、かつては入海を呈していた部分も多かったとみられ、それを望む低丘陵上には多数の遺跡が分布することが知られている。

勝山町の西には南北に標高400m を越える急峻な斜面の山地が繋がる。福岡県を大きく地理区分する地形のひとつとなっており、これより東側（みやこ町側）は京築、西側は筑豊と呼称される。テレビ塔等が林立する当地域のシンボル的な山である大坂山（573m）から東へは標高200m 級の山地がのび、旧勝山町と旧犀川町を分けるものとなる。本遺跡はこの山地から北へ派生する地形上に位置する。

大久保向原遺跡は独立丘陵状の地形から続く台地状の緩斜地に位置する。２次調査地はその地形の先端部にあたり、遺跡の西及び北側は比高差約３m の谷となり、水田が広がる。なお、字名である「大久保字向原」の範囲は広く、町教育委員会が平成20・21年に調査した大久保向原古墳群は１次調査地の南約500m に位置する。

大藪遺跡は大久保向原遺跡の西側に南北にのびる広い緩斜地の先端部に位置する。大久保向原遺跡と大藪遺跡は立地する尾根は異なるものの、山塊から延びる台地状丘陵の末端に近く、京都平野を望む位置にあることは共通する。

2　歴史的環境

地理的環境でも触れたとおり、本遺跡は京都平野奥部、山塊から延びる丘陵の先端部に位置する。福岡県を東西に貫く国道201号線と豊前市・大分方面へ続く主要地方道椎田勝山線の分岐地であることが示すように交通の要衝である。この点は古代においても当てはまるものであり、現在の幹線道路に沿う形で古代官道が通ることが想定されている。すなわち、大宰府から来る官道が、この地を分岐点として苅田方面に向かうルートと豊前国府を経て豊後方面に向かうルートに分かれるのである。官道推定線は大藪遺跡のすぐ北側を東西に走るものであり、東方の行橋市天生田大池遺跡等において側溝を伴う道路状遺構が検出されている。こうした特色

第２図　周辺遺跡分布図（１/25,000）

を背景に、数多くの重要な遺跡が分布する。特に重要なものは、大藪遺跡の南東約1.5㎞に位置する古代山城の御所ヶ谷神籠石であり、山中に約2,900m もの列石線を有するものと想定されている。また西方山麓には奈良末～平安時代初期に創建されたという菩提廃寺があり、塔の礎石が残る。

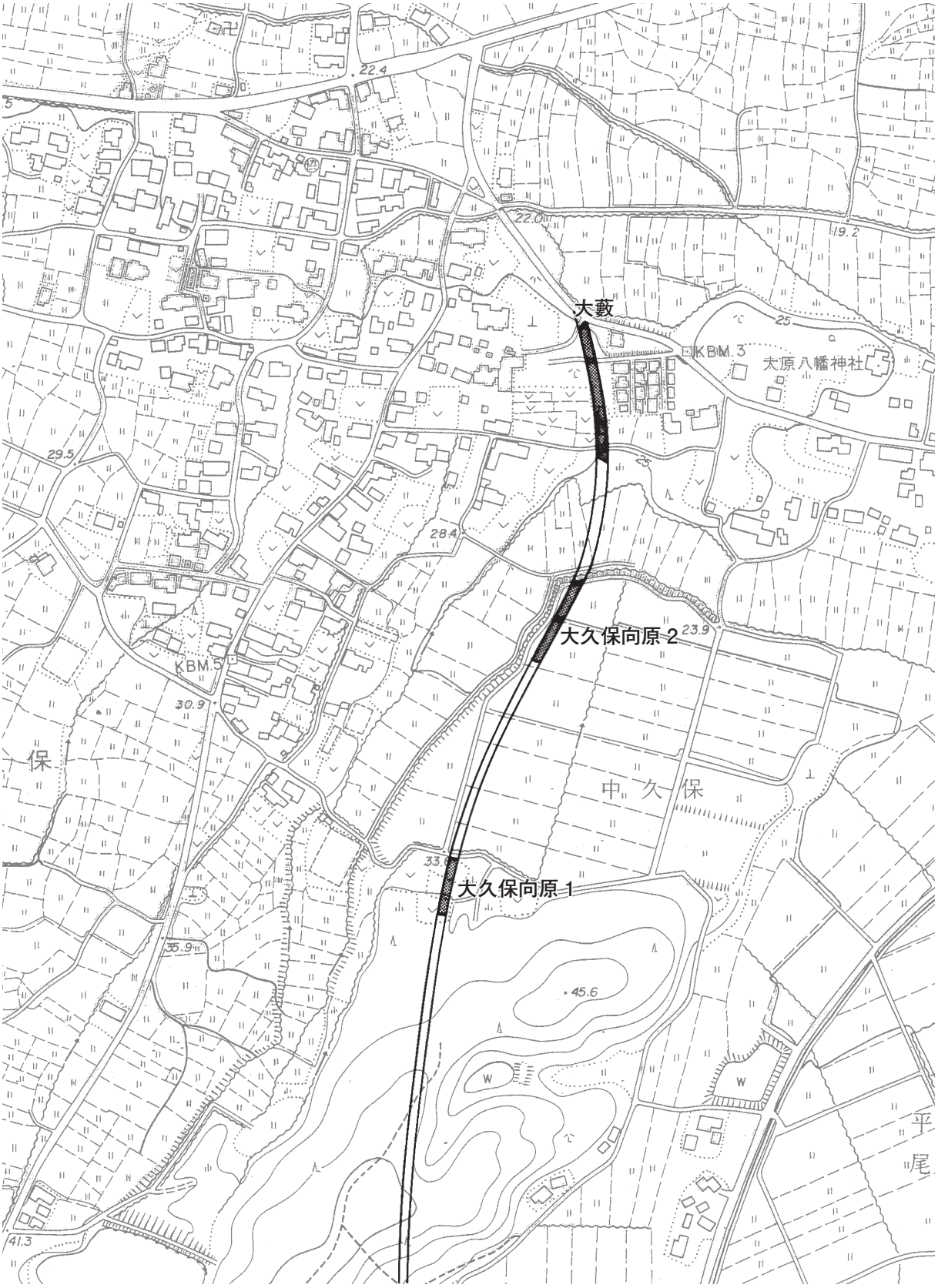
また古墳時代では、蓑田丸山古墳や庄屋塚古墳・扇八幡古墳・八雷古墳・寺田川古墳といった前方後円墳が所在しており、横穴式石室や出土埴輪から首長墓系譜をなすものと想定され、さらに橘塚古墳・綾塚古墳といった巨石を用いた横穴式石室を内部主体とする大形円墳・方墳に続くものと考えられる。このように、古墳時代後期を中心とする大型古墳が集中しており、奈良時代以降の繁栄の下地がすでにつくられていたことを示すものである。

大久保小森古墳石棺

本遺跡近辺の遺跡に目を向けると、平成６年度からはじまった農業基盤整備事業等による発掘調査の成果により状況をつかむことができる。大久保今地遺跡は大藪遺跡と同一尾根上に位置するもので、今回の調査区に隣接するものである。弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡が検出されている。この西側尾根上においても大久保小田遺跡・大久保原田遺跡・大久保明神遺跡・大久保五反畑遺跡で弥生時代・古墳時代・中世における集落跡が検出されている。本遺跡周辺の緩やかな尾根上には、弥生時代・中世を中心とした集落が広い範囲にわたって存在することを示すものである。

大久保向原遺跡の石材

大久保向原遺跡の南側丘陵上には古墳が点在するが、野添遺跡では前期の古墳群が検出され、また大久保向原古墳群では中期に位置づけられる竪穴式小石室や石棺系石室等多様な主体部を有する古墳群が調査された。大久保向原遺跡の西側に位置する上大久保古墳群は横穴式石室を主体部に持つ後期古墳であった。また大藪遺跡の西側では、大久保小森古墳が存在し、大型の板石を用いた石棺が庭先に露出している。周辺には弥生土器や須恵器の散布がみられることから、多くの文化財が地中にあるものと想定される。また大久保向原遺跡周辺は昭和50年台に農業基盤整備事業が実施されているが、地元の方々によると、大久保向原遺跡１次調査区より東側に古墳のような塚があり、短期間で調査が行われたという話が聞かれた。この調査を追跡することはかなわなかったが、本来はより多くの古墳をはじめとして遺跡が存在したことを示す話題である。また１次調査区の北西の路肩に、板石をまつっている場所がある。これも本来は古墳の石材で、それを顕彰して祭ってあるのではないかと思われる。このように、本遺跡周辺には首長墓とはいえない規模ではあるが、古墳時代前期から後期にわたる古墳が多数分布しており、多彩で特色ある主体部を有するといった特徴を挙げることができる。



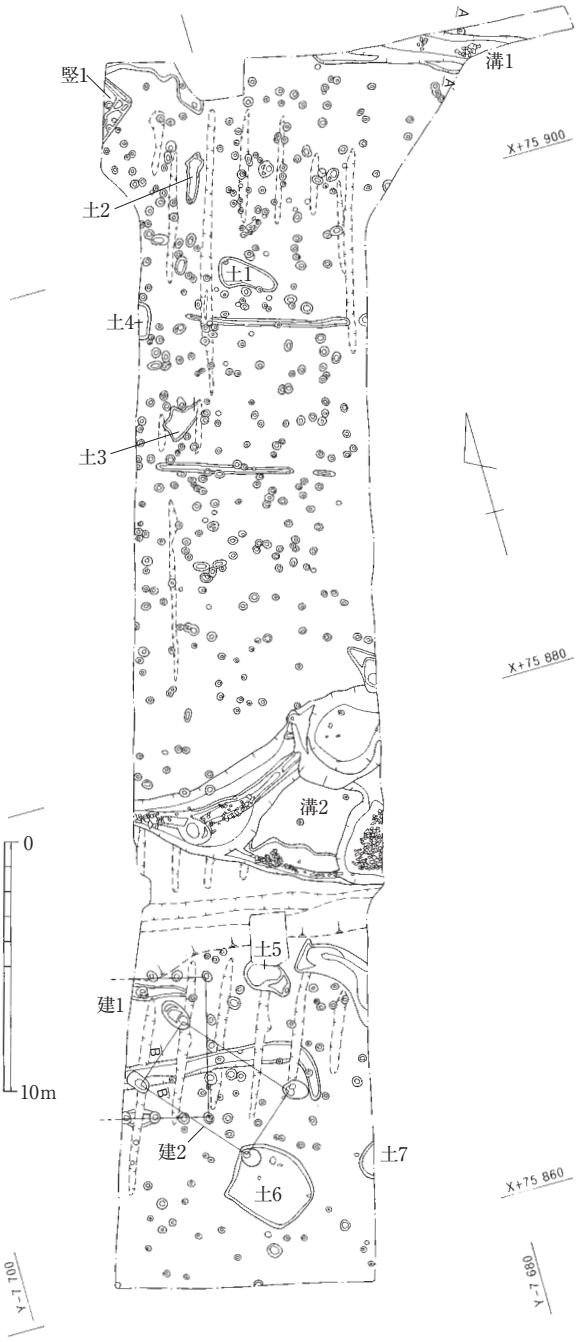
第３図　遺跡周辺地形図（１/5,000）

Ⅲ　調査の内容

1　大久保向原遺跡　第１次調査

１）調査の概要

大久保向原遺跡は、京都郡みやこ町（調査当時は勝山町）勝山大久保に所在する遺跡である。この一帯は従来から周知の埋蔵文化財包蔵地「大久保向原遺跡」として遺跡の存在が把握されていたところである。大久保向原遺跡第１次調査区は、2746－１、2747－２番地に所在する。遺跡の立地は低丘陵の裾部にあたり、緩やかな斜面が続く地形である。調査直前は畑地として利用されていた。調査地は県道の路線幅に従って幅12m、長さ63m の南北に細長い形状であり、面積は約750㎡。遺構は全面で確認されたが特に中世の遺構が最も数が多い。検出した主な遺構は、竪穴建物１棟、掘立柱建物２棟、土坑７基、溝３条である。遺物量はパンケースで３箱である。



第４図　大久保向原遺跡第１次調査区
遺構配置図（１/300）

２）基本層序

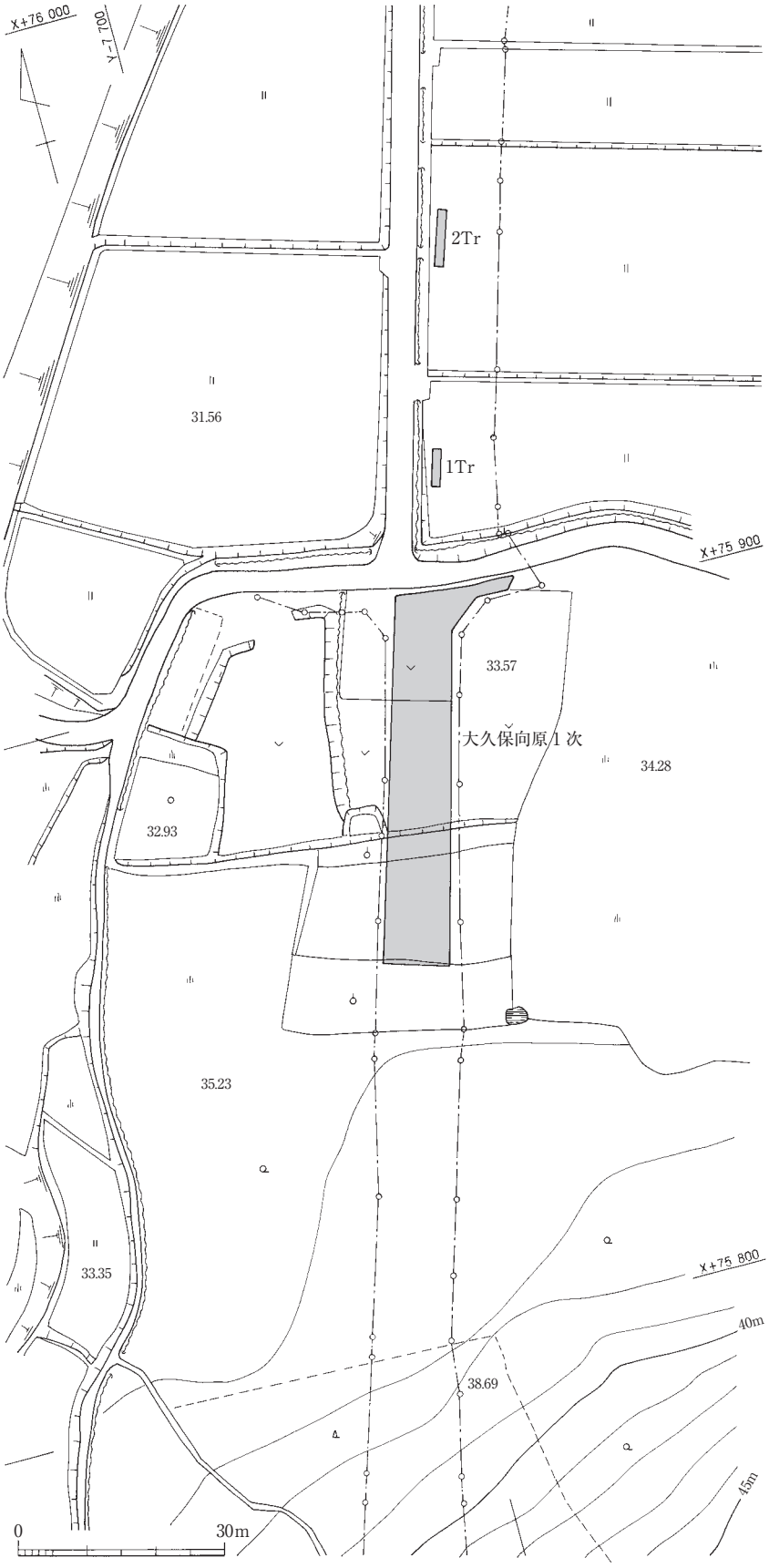
この付近は丘陵裾部の緩斜面にあたり、包含層の形成が未発達であった上に耕作時に削平されたものと思われ、耕作土の下はすぐに遺構面が確認された。遺跡の北側の様相は、第10図４号土坑の土層を見ると、厚さ10cm の耕作土の下層がすぐに遺構面となる。基盤層はよく締まった黄褐色土で形成される。遺構覆土は灰色味を帯びた色調のものが多く基盤層とは明瞭に区別できたものが多い。遺跡の南側の様相は、第12図７号土坑の土層を見ると、15cm 程度の厚さで耕作土があり、その直下がやはり黄褐色土の基盤層である。この付近も遺構覆土は灰色味を帯びたものが多く遺構と地山との区別は比較的明瞭であった。

３）遺構と遺物

竪穴建物

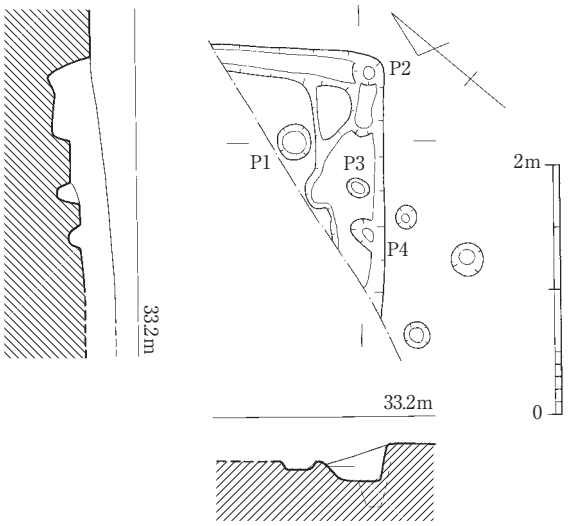
１号竪穴建物（図版３－１、第６図）

本調査区では唯一の竪穴建物である。調査区



第５図　大久保向原遺跡第１次調査区周辺地形図（１/1,000）

北西端で検出した遺構である。大半が調査区外にあり全容を知ることはできないが、方形または長方形プランの竪穴建物になると思われる。検出できた範囲で、北東壁長1.4m、南東壁長2.1m、深さは25cm を測る。方位は北東壁でＮ－50°－Ｅを測る。床面では壁際沿って20～50cm、深さ10cm 前後の溝が検出された。またＰ１～Ｐ４の４つのピットを検出した。Ｐ１は径30cm、深さ10cm、Ｐ２は東側コーナー部で検出したもので径25cm、深さ35cm、Ｐ３は径15cm、深さ15cm、Ｐ４は径25cm、深さ15cm。主柱穴ではないと思われる。遺物は全く出土しなかったため時期は不明である。

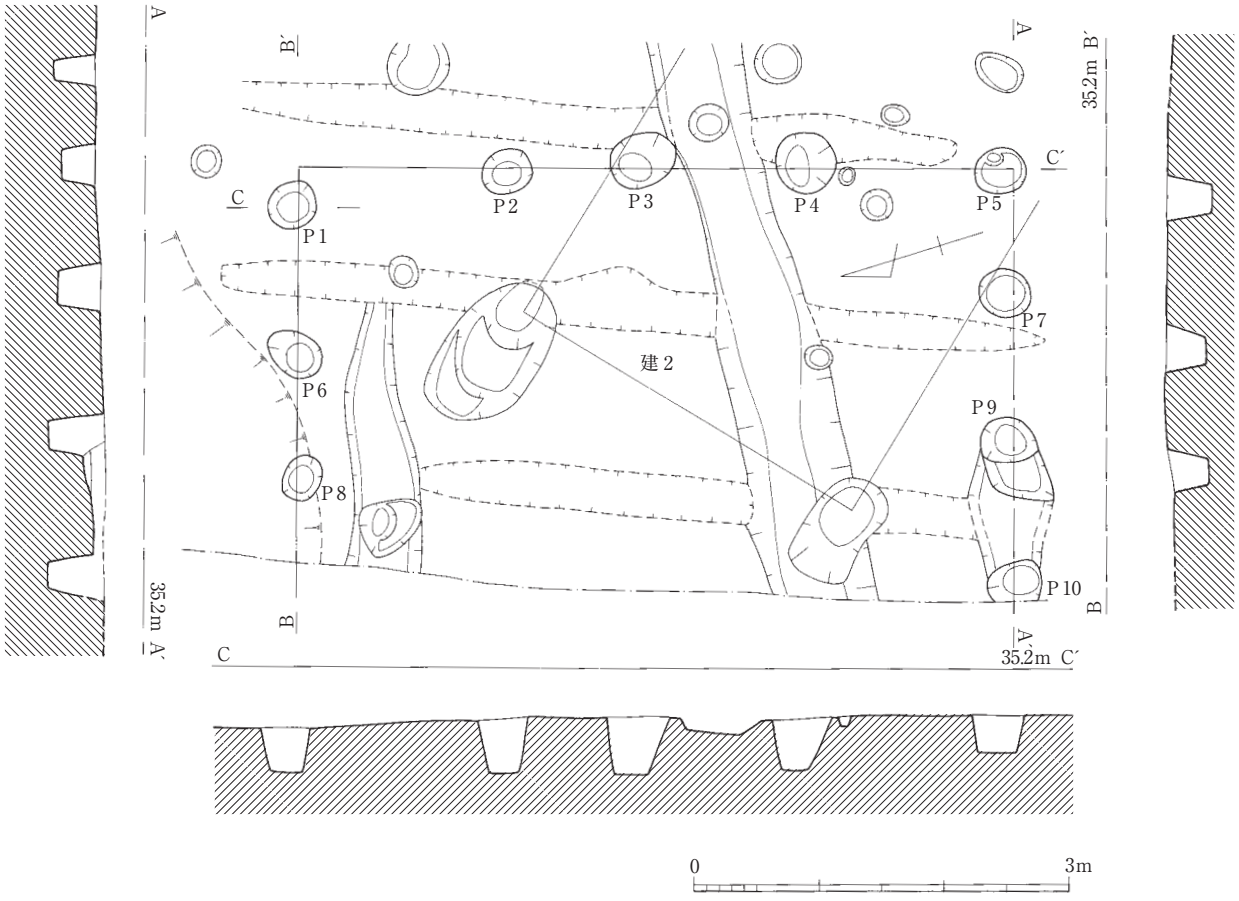


第６図　１号竪穴建物実測図（１/60）

掘立柱建物

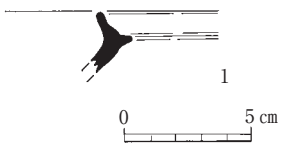
１号掘立柱建物（図版３－２、第７図）

調査区南側で検出した遺構である。２号掘立柱建物と重複した位置にある。西側が調査区

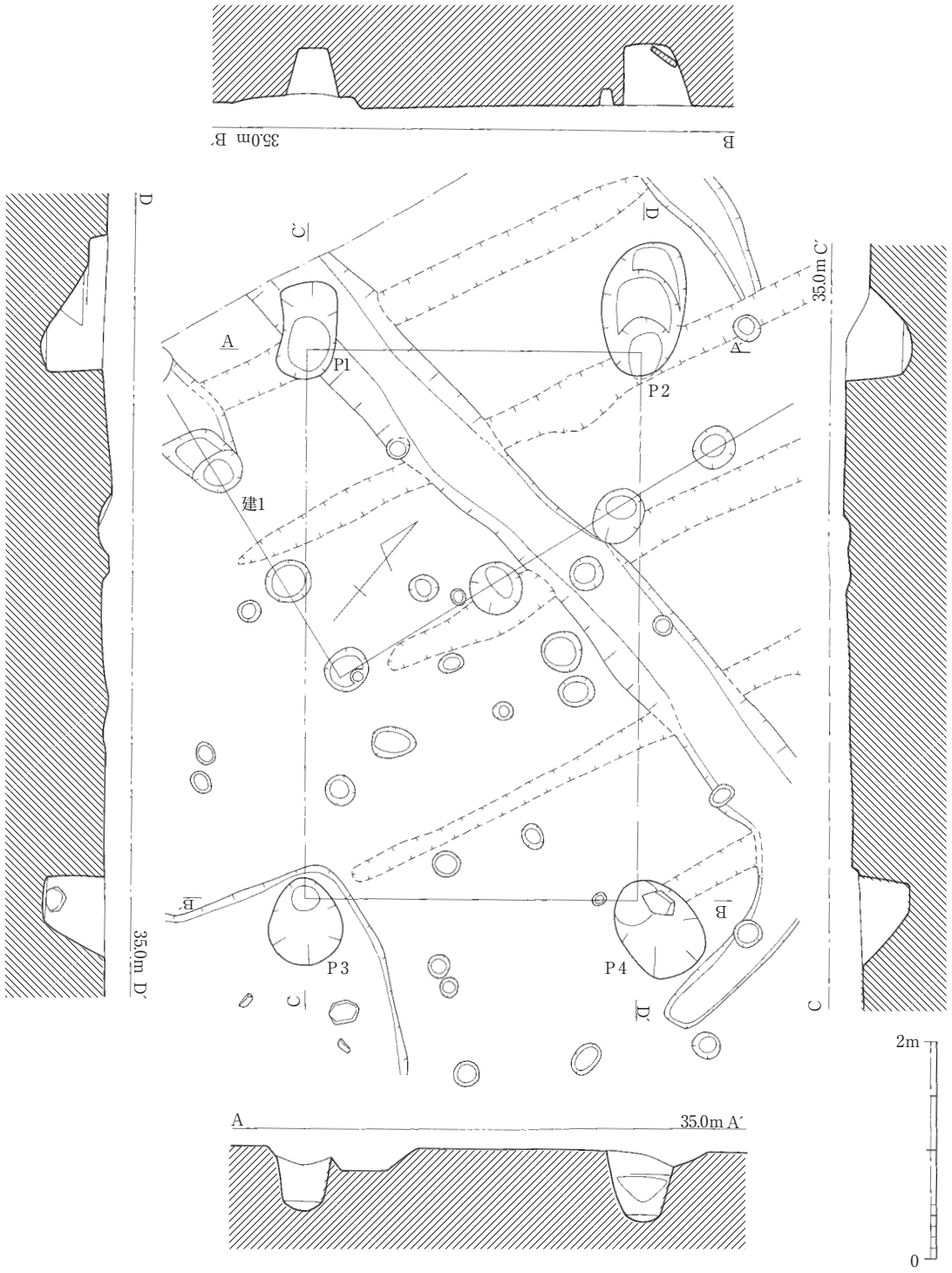


第７図　１号掘立柱建物実測図（１/60）

外へと続くため全容は分からないが、南北方向に４間、東西方向に３間以上の建物を想定した。南北長5.65m、北側長3.15m、南側長3.45m を測る。方位は南北列でＮ－17°－Ｅを測る。柱の配置は規則性に欠け、Ｐ１は大きく西側へと寄った位置にあり、柱間の



第８図　掘立柱建物
出土遺物実測図（１／３）



第９図　２号掘立柱建物実測図（１/60）

間隔も例えばＰ１－Ｐ２間は165cm、Ｐ２－Ｐ３間は105cm と差がある。柱穴の径は40cm ～50cm、深さは30～45cm を測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物（図版８－１、第８図）

１は須恵器坏である。立ち上がりが短く直線的に内傾し、受け部も短い。端部は丸味を帯びシャープさに欠ける。P10出土。

２号掘立柱建物（図版３－３、第９図）

調査区南側で検出した遺構である。１号掘立柱建物と重複した位置にある。遺構確認当初は掘立柱建物であることを認識せずに完掘してしまったが、その後遺構の形状や深さなどから掘立柱建物の可能性があることを考えるに至ったため、ここで報告するものである。桁を北西－南東方向にとり、柱間は桁行１間、梁行１間に復元される。柱間寸法は桁間505cm、梁間305cm を測り、特に桁間が極端に長い点がこの遺構を掘立柱建物として想定することに躊躇する所以である。方位は桁側でＮ－40°－Ｗとなる。柱穴はＰ１～Ｐ４の全てが楕円形を呈し、Ｐ１は長軸90cm、短軸50cm、深さ60cm を測る。南東側が深く、北西側へ向かって傾斜しながら浅くなる。Ｐ２は長軸125cm、短軸75cm、深さ60cm を測る。南東側が深く、北西側へ向かって傾斜しながら浅くなる点ではＰ１と共通する。Ｐ３は長軸80cm、短軸70cm、深さ45cm を測る。南東側が深くなる。Ｐ４は長軸95cm、短軸70cm、深さ60cm を測る。西側が最も深くなる。Ｐ１～Ｐ３は主軸方向が揃う。柱痕は検出していない。

出土遺物は各ピットから小片が出土している。Ｐ１からは胎土や焼成から弥生土器と思われる小片以外に須恵器、土師器の小片が出土しているが、これらは混入したものであろう。他のピットからも胎土や焼成から弥生土器と思われる小片が出土しており、この遺構は弥生時代のものと考えている。但しあまりに小片であるため図示に耐える資料はない。

土坑

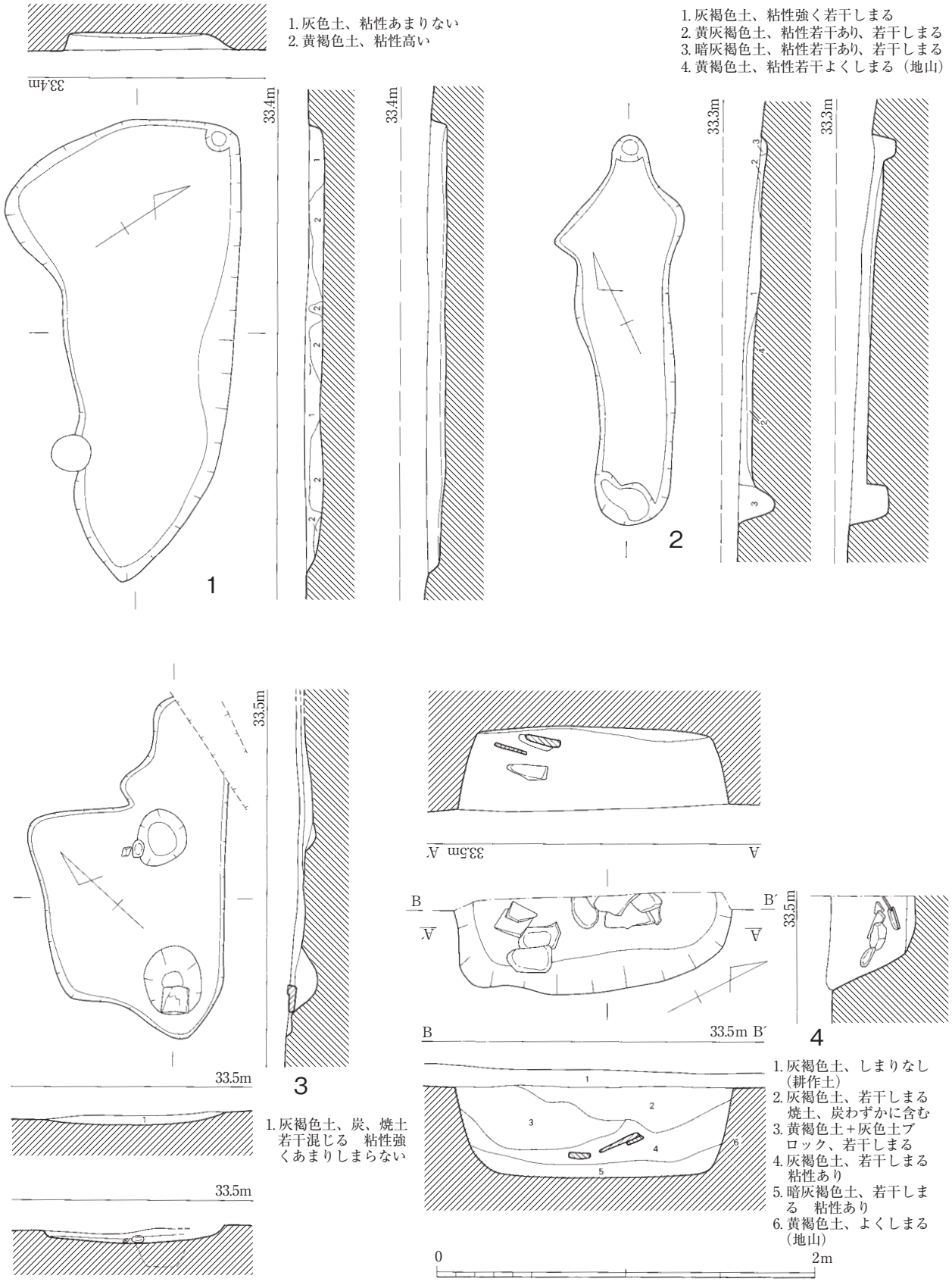
１号土坑（図版４－１、第10図）

調査区北側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し主軸を東西方向にとる。長軸245cm、短軸120cm を測る。底面はほぼ水平で深さは10cm を測る。底面上では北西隅部で径15cm、深さ10cm の小ピットを検出した。覆土は上層に粘性の弱い灰色土、下層に粘性の強い黄褐色土が堆積していた。

出土遺物（図版８－１、第11図１～10）

１・２は土師器小皿である。１は口径7.9cm、底径5.9cm、器高1.1cm。２は底径6.0cm。３・４は土師器皿である。小片であり全体の形状や大きさは不明。３は胎土が精良で色調は白灰色を呈す。４は砂粒を若干含み色調は白橙色を呈す。

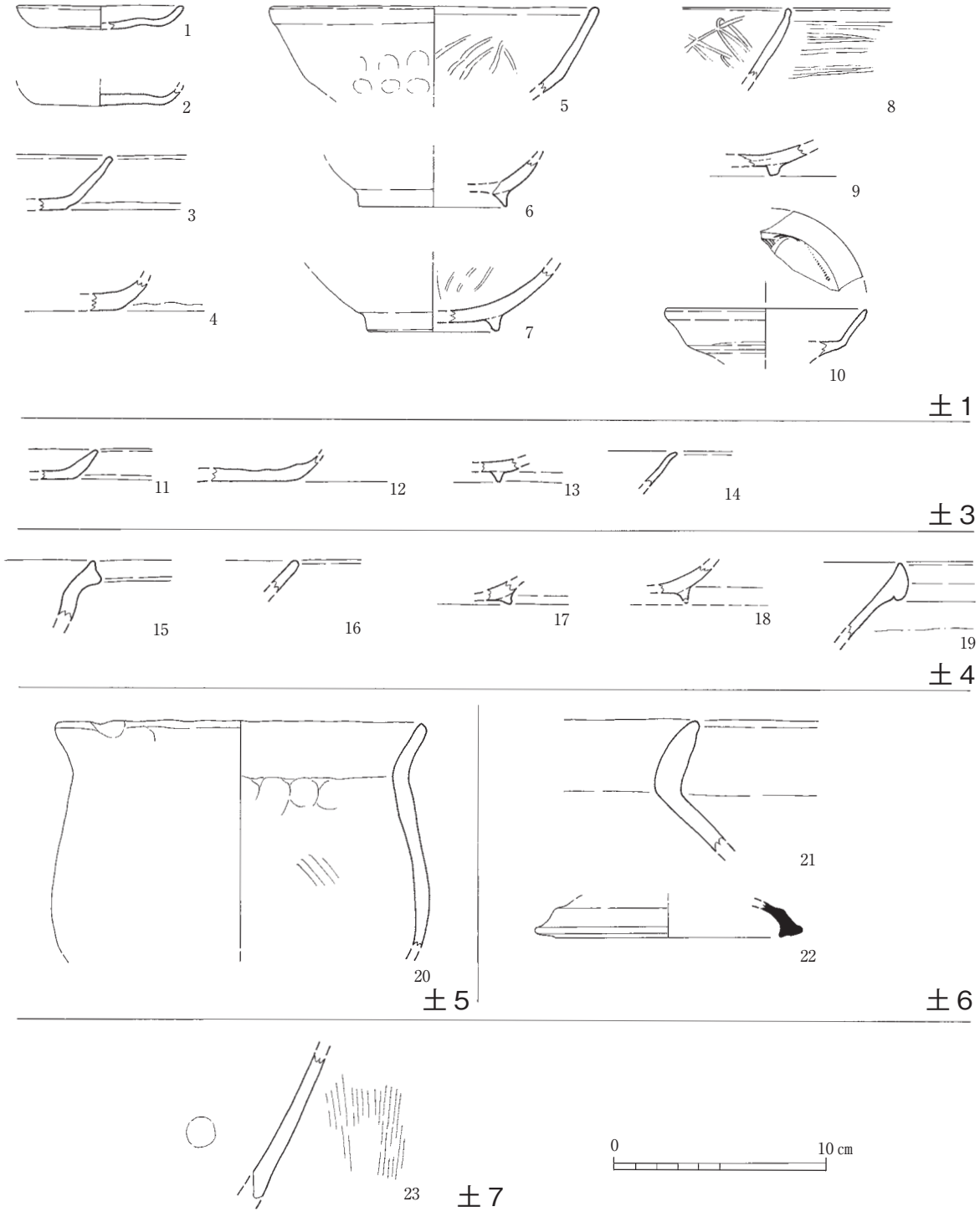
５～９は瓦器椀である。５は口径15.6cm、内面にわずかにヘラミガキが確認できる。６は高台径7.0cm、７は高台径6.2cm で内面にかすかにヘラミガキが認められる。８は口縁部片で、内面に暗文状のヘラミガキ、外面に横方向のヘラミガキが観察される。９は高台部の小片。
10は青磁皿である。内面に櫛描文様が見られる。外面体部下半は無釉。口径9.4cm。



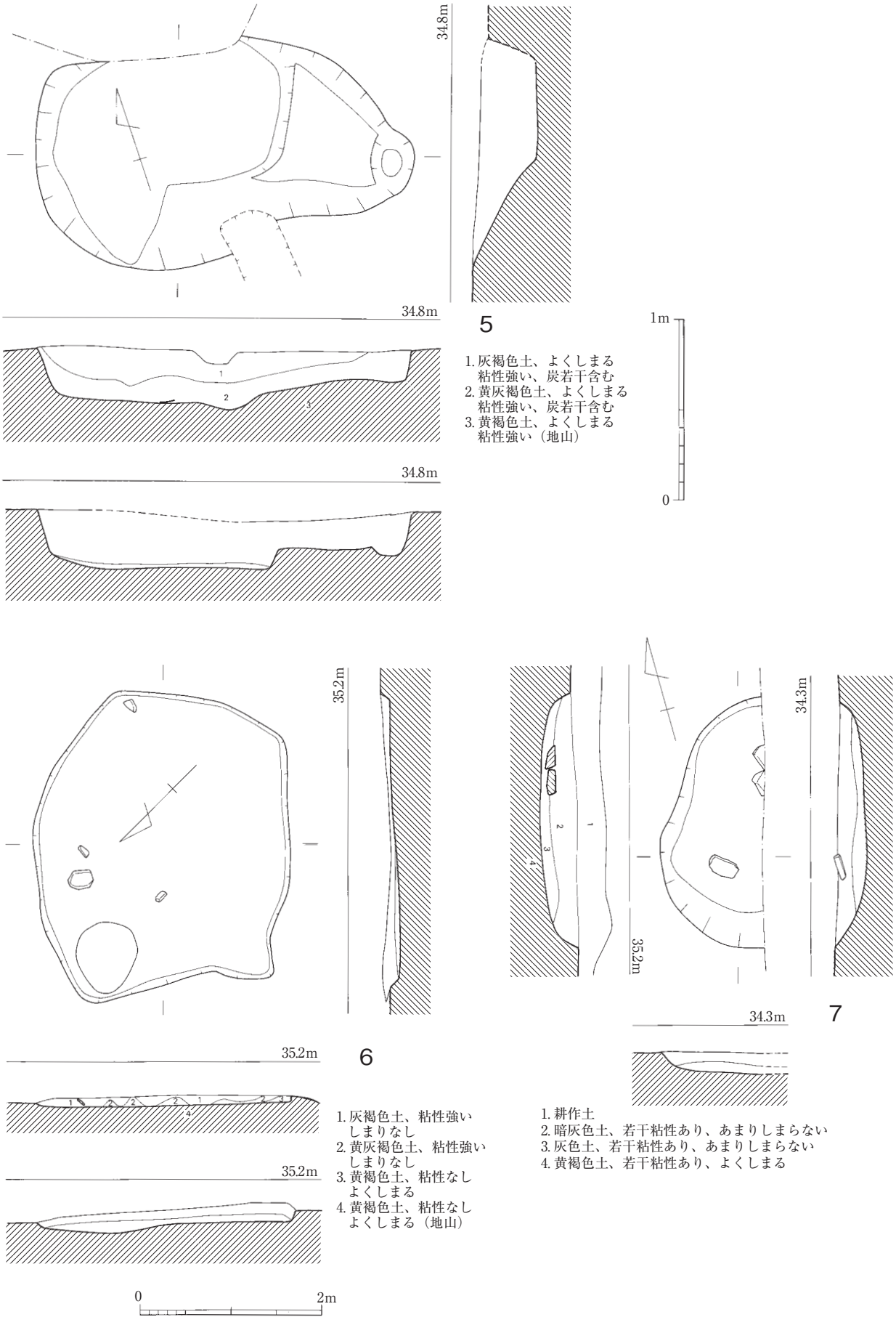
第10図　1～4号土坑実測図（1/30）

２号土坑（図版４－２、第10図）

調査区北側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、主軸を南北方向にとる。長軸205cm、短軸65cm を測り、短い溝状を呈す。底面はほぼ水平で深さは５cm 程度に過ぎなかった。底面上では北隅、南隅でそれぞれピットを検出しており、北隅のピットで径15cm、深さ10cm、南隅のピットで長軸35cm、短軸20cm、深さ15cm を測る。土層観察ではどちらも



第11図　土坑出土遺物実測図（１／３）



第12図　５～７号土坑実測図（５･７は１/30、６は１/60）

土坑の覆土とは異なる土が上層から切り込んでいる様子が観察されるため、別遺構の重複と考えてよいものである。土坑覆土は上層が粘性の高い灰褐色土、下層が黄灰褐色土となる。

３号土坑（図版４－３、第10図）

調査区北側で検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、主軸を北東－南西にとる。北東隅を後世の撹乱により削平されるが、長軸180cm、短軸105cm を測る。底面はほぼ水平で、深さは５cm 程度に過ぎない。底面では中央北寄りと南端にそれぞれピットを検出した。北寄りのピットは径30cm、深さ10cm を測り、ピット西側の縁で小円礫を１つ検出した。南端のピットは径35cm、深さ10cm を測り、ピット検出面上で角礫を１つ検出した。覆土は炭・焼土を含んだ灰褐色土層である。

出土遺物（図版８－１、第11図11～14）

11～13は土師器である。11は土師器小皿である。小片であり径不明。12は土師器皿である。胎土に雲母を多く含む。13は土師器椀である。小さくシャープな高台が付く。

14は口禿の白磁皿である。

４号土坑（図版５－１、第10図）

調査区北西端で検出した遺構である。西側が調査区外へと続くため全体の形状は分からないが、検出できた範囲では隅丸方形を呈す。長軸145cm、短軸50cm を測る。底面はほぼ水平で深さは45cm を測る。底面から10～20cm 浮いた状態で扁平な礫を複数検出したが、規則的に配置されている様子ではない。覆土は最上層の第２層が焼土・炭を若干含んだ灰褐色土、その下層の第３層に灰色土ブロックを含んだ黄褐色土、その下層の第４層は粘性のある灰褐色土で、扁平礫はこの層中に含まれる。最下層の第５層は粘性のある暗灰褐色土である。

出土遺物（第11図15～19）

15は土師質の鍋である。端部を上方につまみ上げて断面三角形に仕上げる。調整不明。

16～18は瓦器椀である。16は口縁部片。17は断面三角形の小さな高台となる。18は17と比較すると若干高台部が高くなる。

19は大きめの玉縁となる白磁碗口縁部片。

５号土坑（図版５－２、第12図）

調査区南側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸210cm、短軸120cm を測る。底面は西側が一段低くなっており、深さ30cm を測る。東側の深さは15cm。東端部では径30cm、深さ10cm のピットを検出した。覆土は上層に粘性が強く炭を若干含んだ灰褐色土、下層には同じく粘性が強く炭を若干含んだ黄灰褐色土が堆積する。

出土遺物（図版８－１、第11図20）

20は土師器甕である。頸部があまり締まらず、口縁部もあまり開かずに立ち上がる器形となる。口縁端部は丸くおさめる。胴部の内面には粗いハケ目が確認される。頸部内面には指オサエが見られる。外面は前面ナデ調整。胎土に石英、長石、雲母の粗砂粒を多く含む。口径17.4cm。

６号土坑（図版５－３、第12図）

調査区南端で検出した遺構である。平面形は方形に近い形状で、長軸320cm、短軸280cm を測る。底面はほぼ水平で、深さは10cm を測る。床面上では幾つかの礫を検出した。覆土は上層に粘性が強く締まりのない灰褐色土、下層に同じく粘性が強く締まりのない黄灰褐色土が堆積する。

出土遺物（図版８－１、第11図21・22）

21は土師器甕の口縁部である。頸部が締まった器形となり、口縁部はあまり開かずに立ち上がる。胴部に比べて口縁部の器壁が厚い。胎土に石英、長石、雲母の粗砂粒を含む。

22は須恵器蓋である。かえりの形状が特徴的である。径12.6cm。

７号土坑（図版６－１、第12図）

調査区南側の東端で検出した遺構である。東側が調査区外へと続いており全体の形状は不明だが、検出した範囲では不整楕円形を呈し、長軸140cm、短軸60cm を測る。底面は中央南寄りの付近が周辺よりもわずかに深くなっており、深さは15cm を測る。床面よりも数 cm 浮いた状態で数個の礫を検出した。覆土は上層に暗灰色土、下層に灰色土が堆積する。

出土遺物（第11図23）

23は弥生土器甕の胴下半部片である。内面ナデ、外面縦ハケ目が見られる。胎土に石英、長石、雲母を含む。

溝

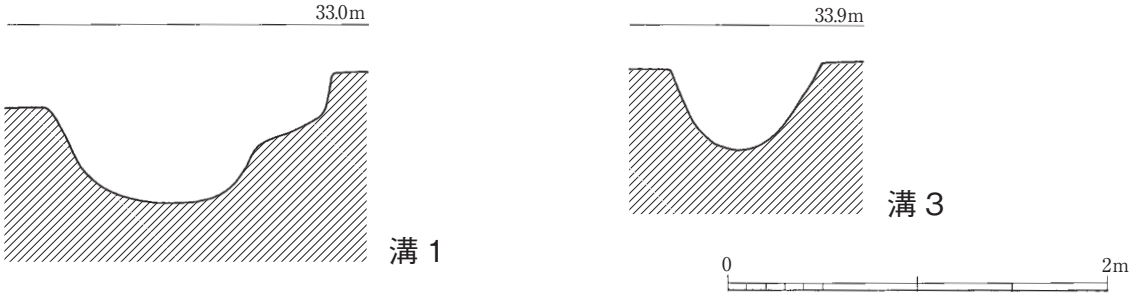
１号溝（図版６－２、第13図）

調査区北端で検出した遺構である。方位をＮ－70°－Ｗにとり、直線的に伸びる。幅は150cm、深さは60cm を測る。南壁際はテラス状に段を形成しており、検出面からの深さは25cm を測る。壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。溝底から若干浮いた位置で礫群が検出された。数カ所に固まった状態だが規則的な配置ではない。

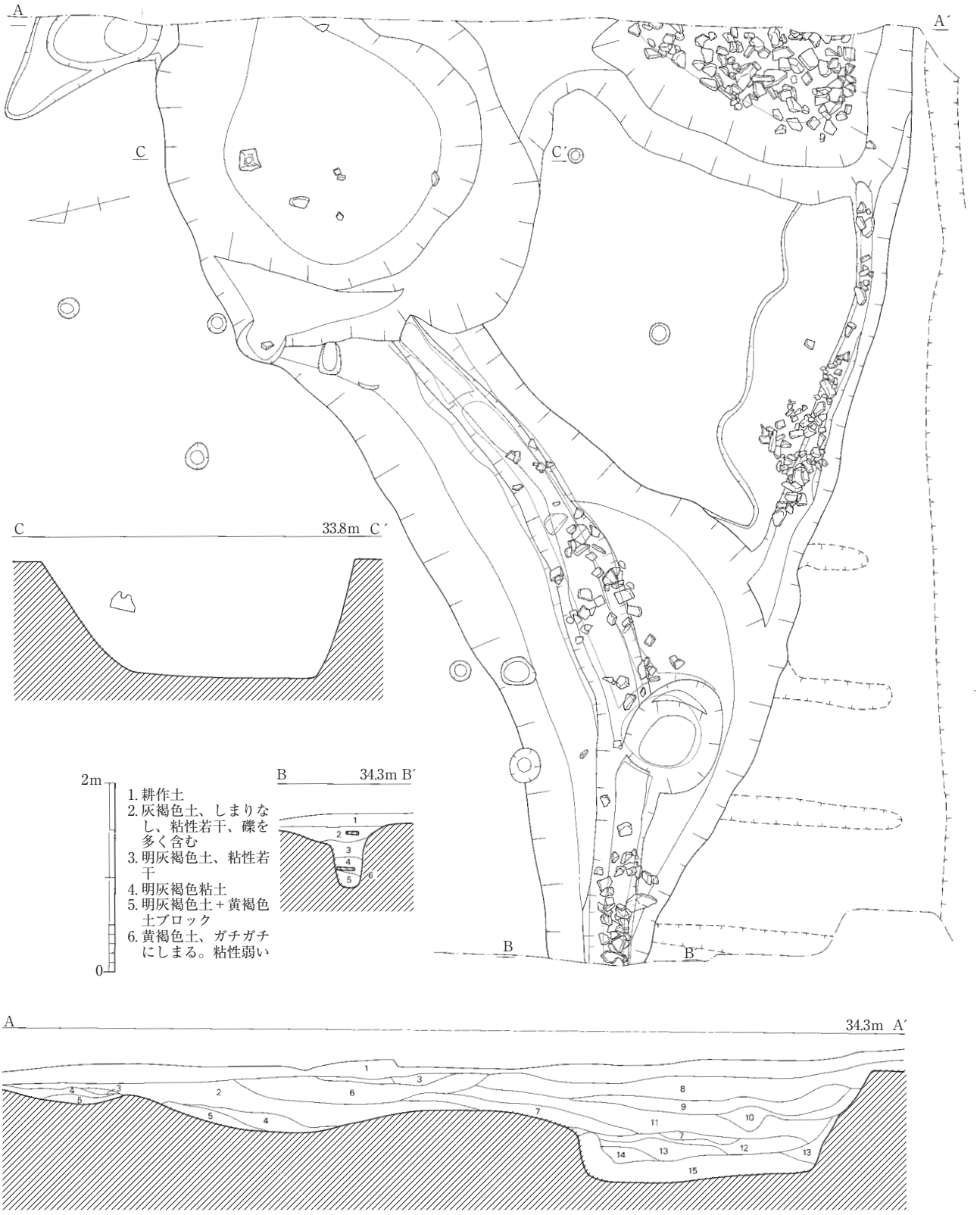
出土遺物（図版８－２、第13図１～４）

１は須恵器蓋の天井部片である。外面に自然釉が見られる。

２は瓦器椀である。低い三角形の高台が付く。３は瓦質焼成の鍋の口縁部である。端部は上方につまみ上げられる。内面にはナデに先行するハケ目が認められる。胎土に石英、長石の細砂を含む。



第13図　１・３号溝断面図（１/40）



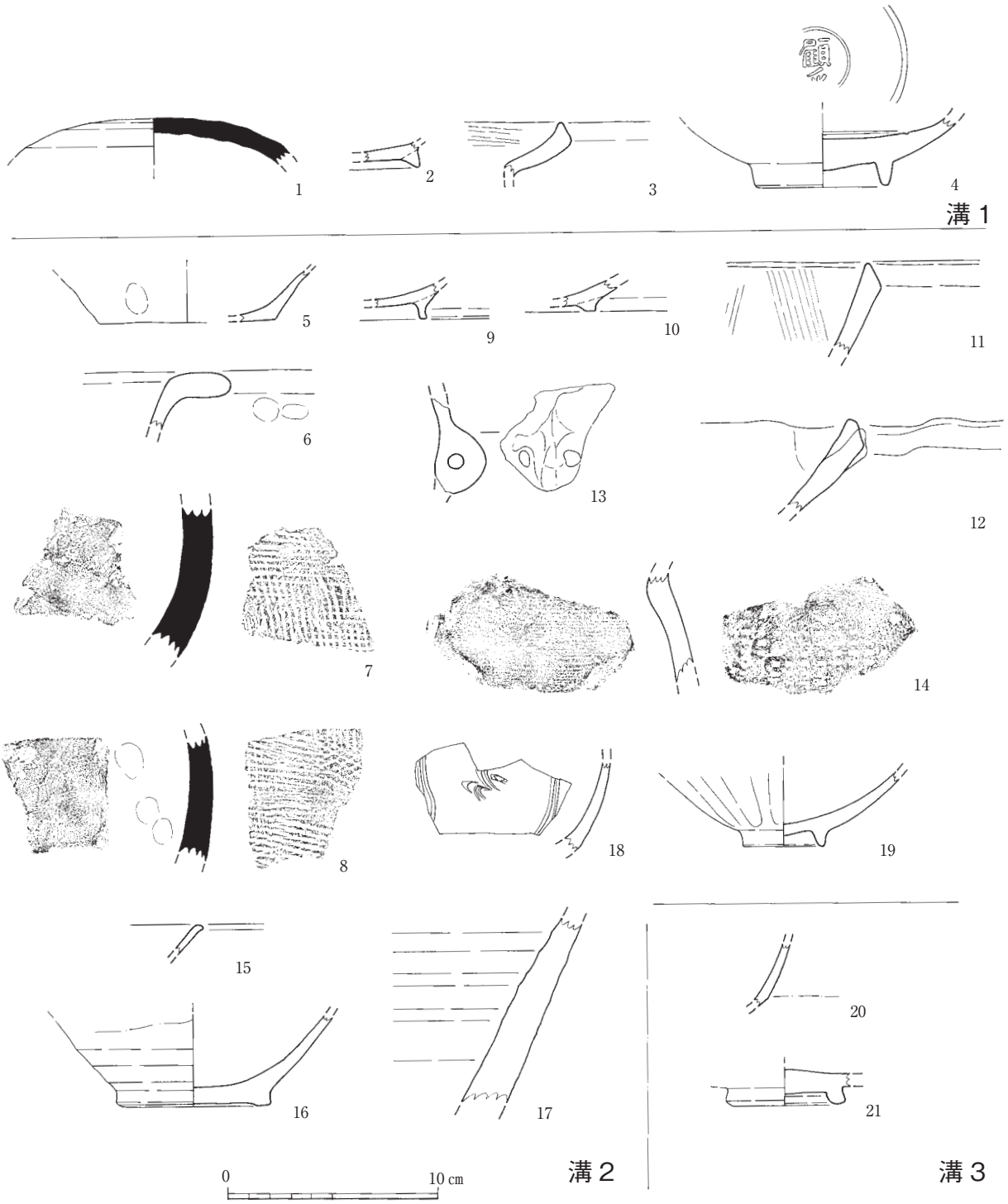
1. 耕作土
2. 明灰色土、粘性強くよくしまる
3. 黄褐色土、粘性弱くしまらない
4. 暗灰色土、粘性弱くしまらない
5. 暗灰色土＋黄褐色土ブロック、粘性弱くしまらない
6. 黒灰色土、粘性弱くしまらない
7. 灰色土、黄褐色土粒若干含む、粘性若干、しまらない
8. 灰色土、粘性強くよくしまる
9. 明灰色土、粘性強くよくしまる
10. 黄灰褐色土、粘性強くよくしまる
11. 黄灰褐色土＋灰色土ブロック、粘性強くよくしまる
12. 灰色粘土＋黄褐色土ブロック、あまりしまらない
13. 灰色粘土
14. 黄褐色土＋灰色粘土ブロック、あまりしまらない
15. 片岩礫層、雑に放り投げた状態で堆積。間には灰色粘土があり、滞水した状態を示す

第14図　２号溝実測図（１/60）

４は青磁碗である。内面には「顧氏？」の印刻がある。外面は高台部まで全面施釉される。

２号溝（図版６－３、７－１・２、第14図）

調査区中央付近で検出した遺構である。西側は１条の溝だが中央付近から東側にかけて２条の溝に分かれており、さらに東端はそれぞれ土坑状の落ち込みを形成している。二股に分かれ



第15図　溝出土遺物実測図（１／３）

た溝のうち北側の溝は幅230cm、深さ25cmを測り、底部の中央は幅70cm、深さ20cmの規模で更に溝状に深くなる。この溝中央付近からは多数の礫が検出された。覆土は上層に灰褐色土、下層に明灰褐色土、最下層には黄褐色土ブロックの混ざった明灰褐色土が堆積しており、礫は上層に含まれる。

南側の溝は幅40cm、深さ20cmを測り、北壁側が広くテラス面を形成している。この溝底からも多数の礫が検出された。両方の溝が接続する箇所は幅が300cmと広くなっており、またこの部分は径110cm、深さ50cmの規模で土坑状に深くなっている。

北側の溝に接する東端の土坑状の落ち込みは、直径360cm、深さ130cmを測る。底面はほぼ水平となる。覆土は上層が第６層黒灰色土、その下層に第２層明灰色土、第４層暗灰色土、最下層に第５層黄褐色土ブロックの混ざった暗灰色土が堆積する。南側に接する東端の土坑状の落ち込みは、長軸340cm、短軸200cm、深さ110cmを測る。底面はほぼ水平だが、床面直上からは礫が多数検出された。覆土は上層に明灰色土、下層に灰色粘土が堆積する。最下層の第15層はほぼ礫層である。なお、この南北両落ち込みは上面でつながっており、切り合い関係も認められないことから同時期に存在したものと思われる。

出土遺物（図版８－２、第15図５～19）

５は土師器皿である。胎土に雲母の細砂粒を多く含む。底径8.4cm。６は土師質焼成の鍋である。口縁部は水平方向に短く伸び、器壁が厚くなる。

７・８は須恵質焼成の甕である。同一個体になると思われる。内面ナデ、外面平行タタキ目が見られる。

９～14は瓦質焼成の土器である。９・10は瓦器椀である。９は細くて接地面の広い高台が付く。10は断面台形の低平は高台が付く。11・12は鉢である。口縁部は断面三角形に仕上げる。11は内面ハケ目調整。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。12は片口となる。胎土に石英、長石の粗砂を若干含み、土師質に近い焼成である。13は茶釜の耳部である。孔径6mm。14は茶釜の肩部片であろうか。内面横ハケ目、外面格子タタキ目。

15～17は白磁である。15は碗の口縁部。16は碗の底部である。外面は体部下半から露胎となる。高台部は非常に低い。径7.4cm。17は壺の胴下半部片である。内外面施釉され内面には轆轤目が明瞭に見られる。

18・19は青磁碗である。18は２本の区画線と飛雲文が見られる。19は外面に細長い蓮弁を施文する。高台端部のみ露胎。高台部径4.0cmと小さい。

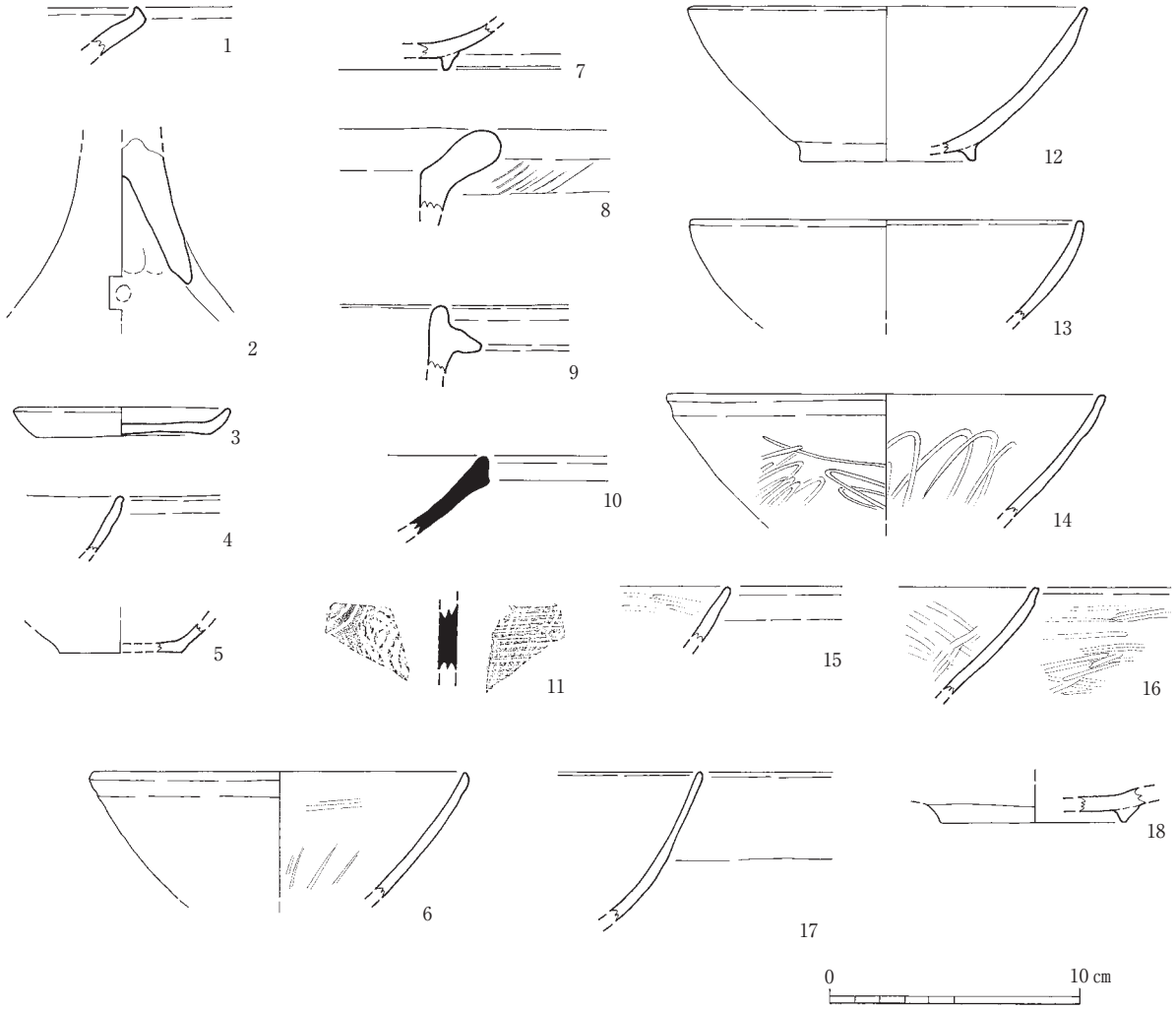
3号溝（図版７－３、第13図）

調査区南側で検出した遺構である。西側は調査区外へと続くが、東西方向に７ｍほど直線的に伸びており、東端が南側に直角に折れて２ｍほど伸びる。幅80cm、深さ40cmを測る。形状から区画溝のようなものを想定するが、その主体となるような遺構は確認できなかった。

出土遺物（図版８－２、第15図20・21）

20は白磁碗の体部片である。器壁は薄い。

21は青磁碗の底部片である。丸味を帯びた高台部となる。高台部外面から内側にかけて露胎となる。径5.7cm。



第16図　ピット出土遺物実測図（１/ ３）

ピット出土遺物（第16図）

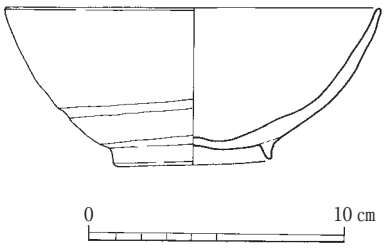
１は弥生土器の甕口縁部片である。端部をわずかに上方につまみ上げている。胎土に雲母を含む。

２～７は土師器である。２は古墳時代の土師器高坏。裾部に円形の透かし孔を穿孔する。３～５は小皿である。３は口径8.7cm、器高1.2cm、底径6.8cm。４は口縁部小片。深みのある器形となる。５は底径5.0cm。６・７は椀である。６は口径15.2cm。内面にかすかにヘラミガキが認められる。色調はうすい黄灰色を呈し、胎土は砂粒をほとんど含まない。７は小さな断面三角形の高台となる。胎土に砂粒をほとんど含まない。８・９は土師質焼成の雑器である。８は鍋である。外面の口縁部下に工具痕が多数残る。胎土に石英、長石、角閃石の細砂粒を多く含む。９は小さな鍔が付く釜である。胎土に石英、長石、角閃石の細砂粒を多く含む。

10・11は須恵質の土器である。10は鉢である。口縁部は小さな三角形を呈す。調整は前面ナデ。11は甕の胴部片か。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕。

12～18は瓦器椀である。12は丸味の少ない器形である。口径15.9cm、器高6.2cm。13は口径15.8cm。14は内外面にヘラミガキが見られる。口径17.5cm。15～17は口縁部の小片。17は風

化が著しくヘラミガキが残っていない。18は底部片。小さな断面三角形の高台が付く。



第17図　試掘調査出土遺物
実測図（１／３）

試掘調査時出土土器（第17図）

１は瓦器椀である。風化が著しく器表の調整は不明。器壁に厚みがある。口径14.8cm、器高6.2cm、高台部径6.2cm。

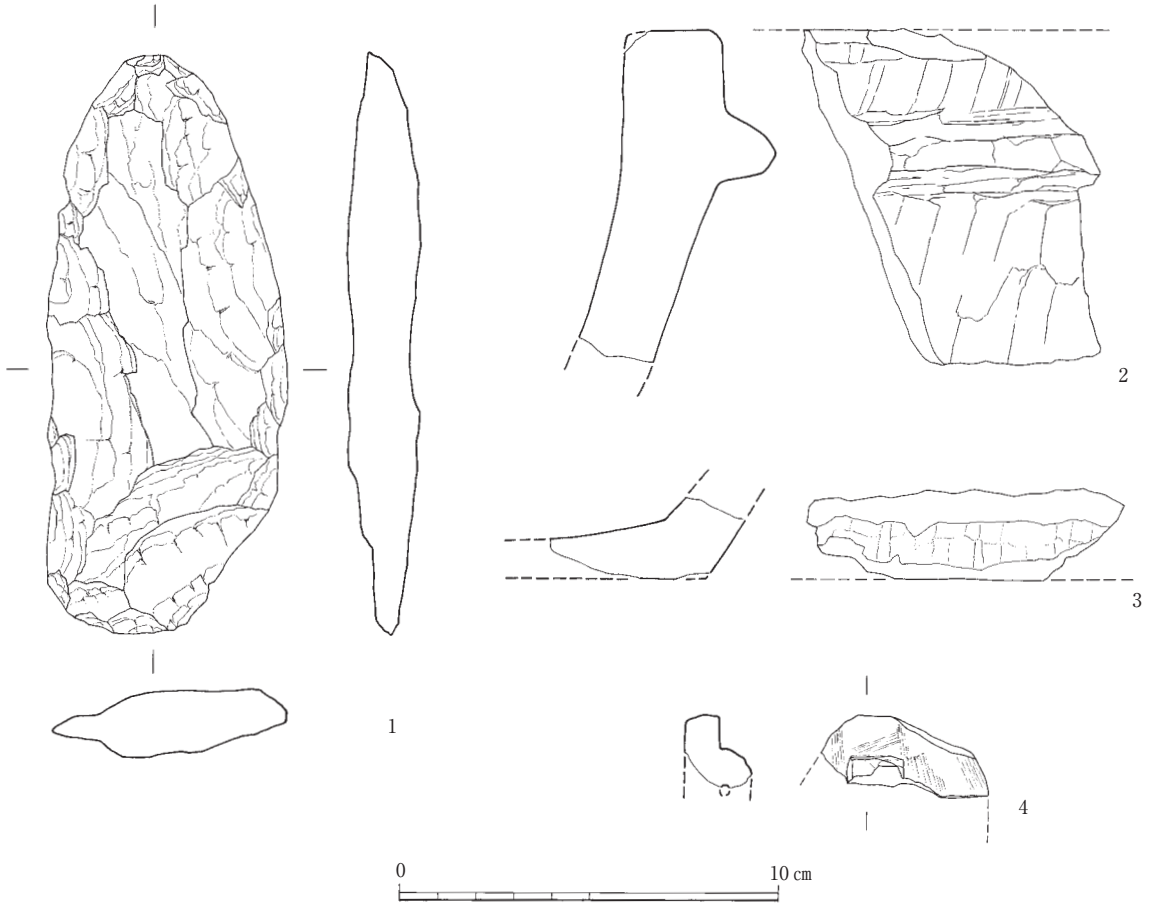
石器・石製品（第18･19図）

１は打製石斧である。粗い剥離が全面に及び比較的整った形状となる。長さ15.3cm、幅6.3cm、厚さ1.9cm。片岩製。２号溝出土。

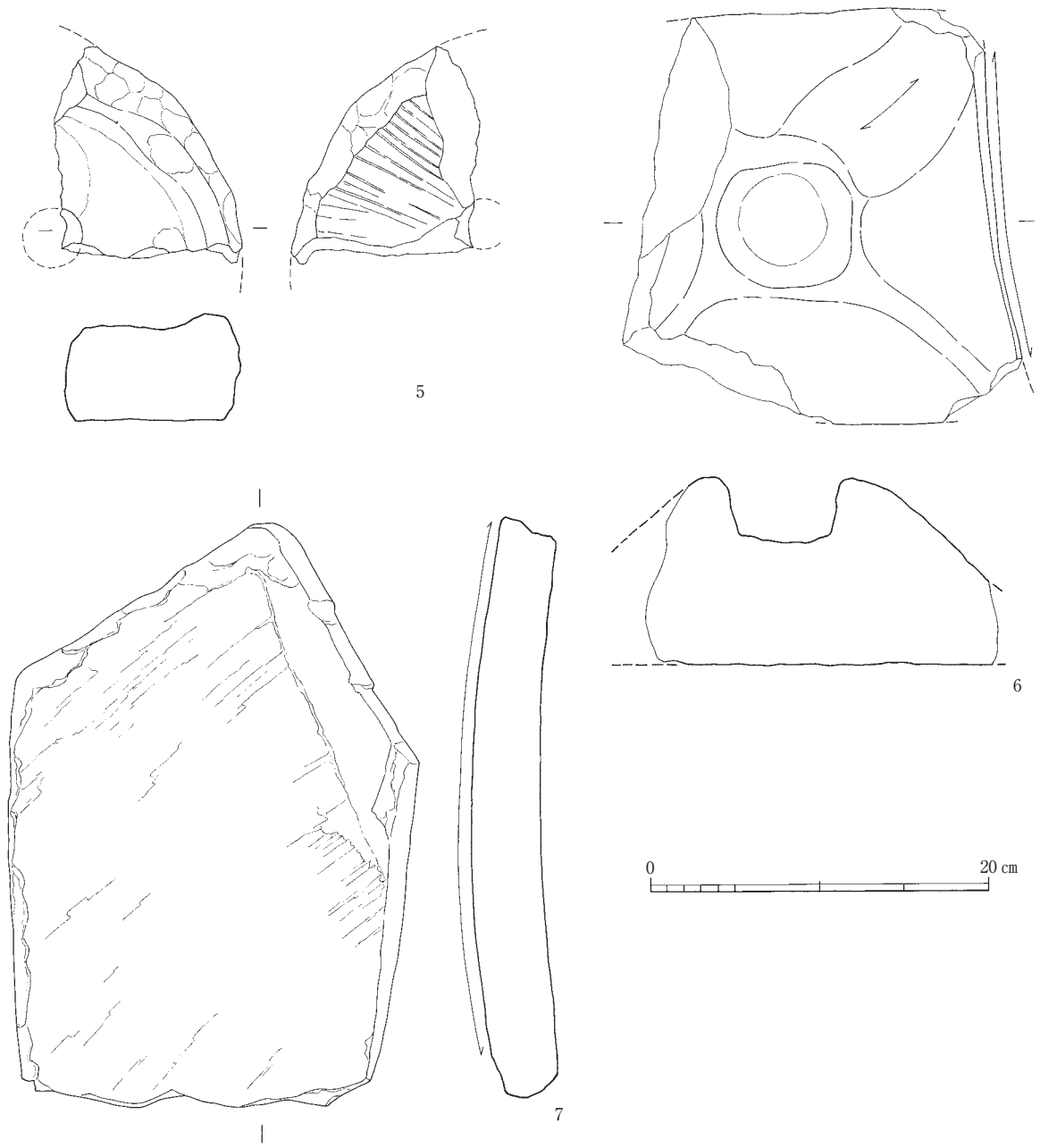
２～４は滑石製品である。２は石鍋の口縁部片。口縁部の器壁は2.6cm と厚みがあり、大型品になると思われる。鍔部は口縁部と比較すると小さめに作られている。ピット出土。３は石鍋の底部片。２号溝出土。４は石鍋の転用品。鈕の付いた鏡のような形状になると思われる。ピット出土。

５は石臼の上臼片である。側面の整形は粗い敲打調整を行っておりいびつな形状となる。擂面の溝は薄く消えかかっており、かなり使い込まれたものと思われる。２号溝出土。

６は五輪塔の火輪である。砥石もしくは何か他のものに転用したらしく、二次的な平滑面が



第18図　石製品実測図①（１／２）



第19図　石製品実測図②（１/ ２）

形成される。２号溝の北側落ち込み出土。

７は板状の石であり、表面が平滑になることから台石等のように使用したものと思われる。片岩製。ピット出土。

４）まとめ

大久保向原遺跡第１次調査では、時期不明の竪穴建物１棟、弥生時代の掘立柱建物と思われる遺構を１棟、古墳時代の掘立柱建物１棟、弥生時代の土坑１基、古代の土坑２基、中世の土坑４基、中世の溝３条を検出した。

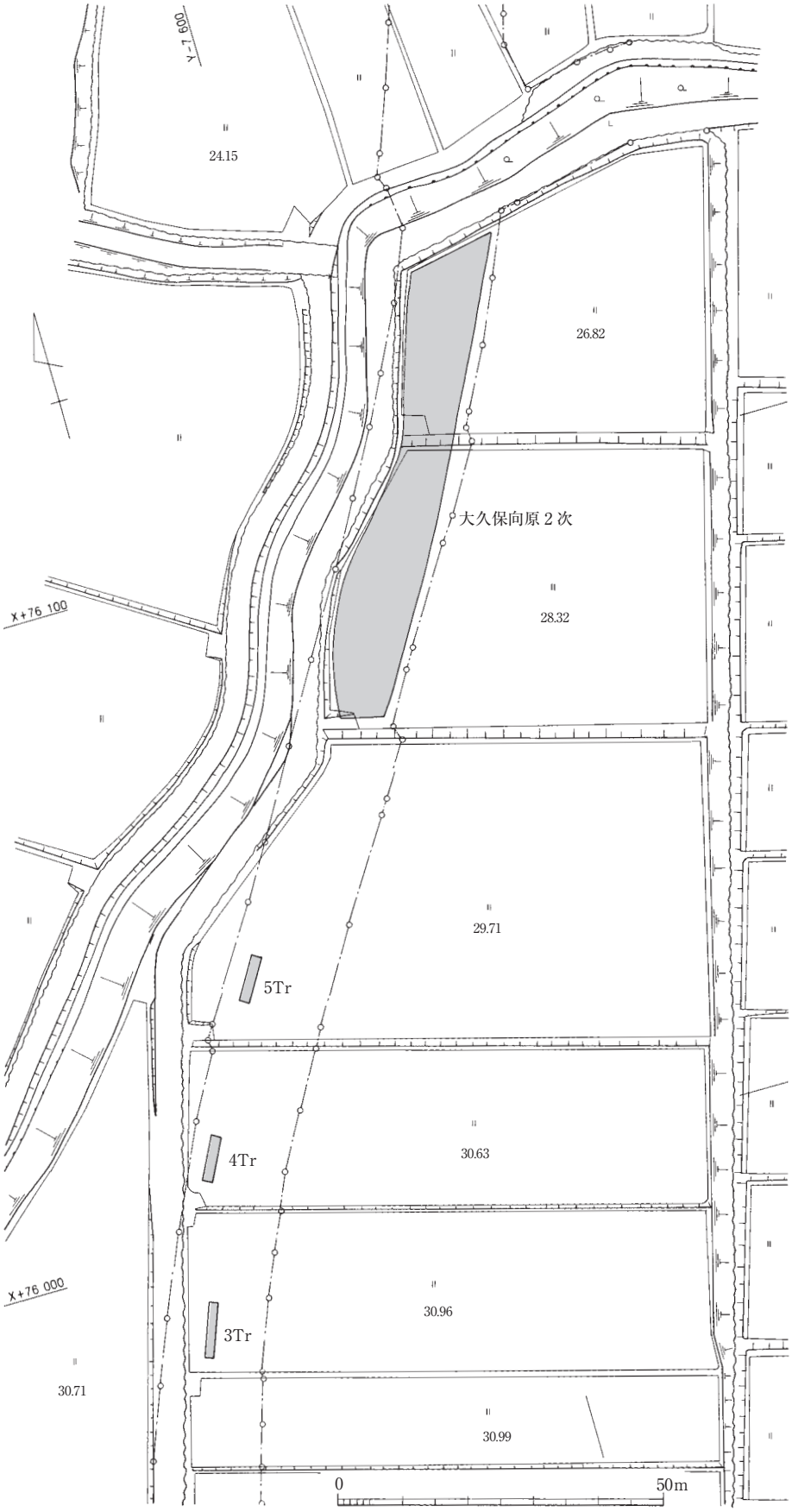
弥生時代の遺構には２号掘立柱建物と７号土坑が挙げられる。どちらも調査区の南端に位置しており、調査区北側には遺構の広がりは確認できない。わずかな遺構数であるので判った事も多くはないが、少なくともこの頃に付近一帯に弥生時代の集落遺跡が広がっており、この調査区はその一部に含まれるという点は言えるだろう。図示できる資料がほとんど無いので詳細な時期は不明と言わざるを得ない。２号掘立柱建物は柱間があまりに長過ぎる点で掘立柱建物と考えるのに躊躇するが、弥生時代の他遺跡の掘立柱建物と比較した場合、柱穴の規模や形状が類似する点は掘立柱建物である事を補強する材料である。最終的な判断は将来の資料の蓄積を待ちたい。また７号土坑の性格については不明である。

古墳時代と古代の遺構も弥生時代の遺構同様、調査区南側に位置する。古墳時代の遺構は１号掘立柱建物がある。柱穴の規模や形状、柱間の間隔からも古墳時代の掘立柱建物と考えて良いだろう。比較的規模の大きな建物になりそうだが、この時期にこの程度の広い規模の建物が検出される例は少なく貴重な例である。同時期の他の遺構が検出されていないため遺構の性格など不明な点が多いが、注目すべき遺構であることは間違いない。出土遺物から６世紀末頃に比定される。

古代の遺構は５・６号土坑がある。どちらも平面形は不整形であり遺物も少なく遺構の性格を推察するのは難しい。出土遺物から時期は７世紀後半前後に比定される。

中世の遺構には１～４号土坑と１～３号溝がある。他に調査区全体に広がるピットの多くがこの時期のものであり、当調査区の主体となる時期である。土坑については特徴的な形態や特徴的な出土遺物は無く、その性格は不明である。溝については、１・３号溝は直線的に伸びており区画を意識した溝である。特に３号溝は鍵型に曲がっており区画する対象が内側にあることをうかがわせるが、残念ながらその対象は明確ではない。多数ある小ピット群が掘立柱建物の柱穴として機能するもので、区画溝はその掘立柱建物を中心とした屋敷地を区画する施設である可能性もあるが、限られた範囲内での調査でもあったため肝心の掘立柱建物の検討が十分に行えなかったので、断定するまでには至らなかった。２号溝は南北二つの溝と土坑状の落ち込みからなる遺構だが土層観察からは新旧関係は見られなかった。土層の堆積状況からは数度の掘り直しが行われた様子がうかがわれた。その機能としては、導水のための溝と貯水用の溜め井戸といった用途が想定される。出土遺物は13世紀を中心に一部14世紀に下る時期のものである。

以上のように、大久保向原遺跡第１次調査では弥生時代・古墳時代・古代・中世の各時期の遺構・遺物を発見することができた。しかし調査範囲の狭小さもあって解明することができた内容は必ずしも多いとは言えない。特徴的な遺構としては弥生時代と古墳時代の掘立柱建物、中世の溝が挙げられるが、今後の周辺域の調査や類例の蓄積など将来に課題を積み上げる結果となった。



第20図　大久保向原遺跡第２次調査区周辺地形図（１/1,000）

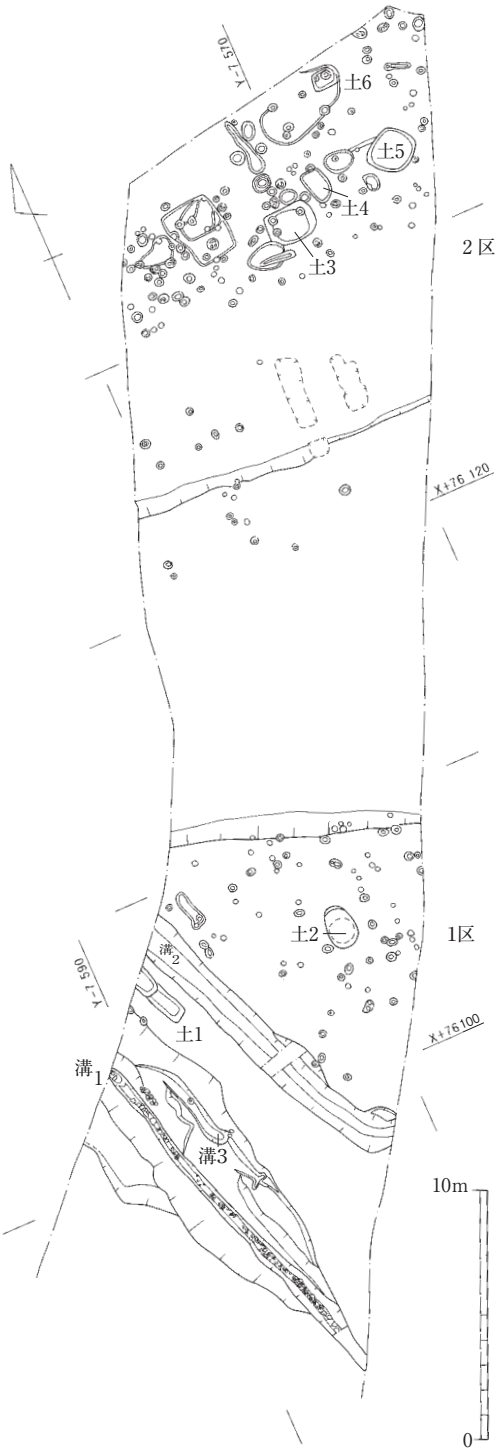
２　大久保向原遺跡　第２次調査

１）調査の概要

調査地は、みやこ郡勝山町大久保2759－３・４、2760－３に所在する。飯岳山から御所ヶ岳へ続く山系から南へ伸びる台地状の尾根の先端部にあたり、西側および北側は急激に落ちる地形を呈している。周辺は昭和50年代の圃場整備により造成を受けており、今回の調査区内でも著しく削平を受けている部分が多いが、盛土されていた地点を中心に文化財が残存しており、発掘調査による記録保存を実施した。

水田によりつくられた段により、南側から１区２区と調査区を設定した。地形は北側に向かって緩やかに傾斜するが、それぞれの区の南半分は圃場整備により掘削されて遺構は残存していないことが確認された。第21図は遺構配置図であるが、１区の南側には遺構は確認されなかったため、表土除去の作業は行ったが図化していない。また２区の中程にも段が形成されているが、圃場整備前の水田の痕跡であろうか。ゆえに水田１枚分の半分以下程度の残存であった。本来は緩やかな傾斜をなす地形であり、文化財は広く分布していたと考えられるが、圃場整備等によりかなり削平を受けているものといえよう。

検出された遺構は、ピット・溝・土坑であり、いずれも中世に位置づけられる。南側水田面の１区からは溝２条と土坑２基が検出された。土坑の内の１基は井戸である。１区のピットは２区に比べ浅く、削平が及んだ結果とみることができる。北側水田面の２区では土坑４基とピットを多数検出した。他にも土坑状に検出されたものもあるが、ごく浅く壁は緩やかに傾斜し、上層包含層の下端と判断したため図化していない。ピットは比較的高い密度で検出されたが、明瞭に掘立柱建物と認定できるものはなかった。２区は北側に遺構が集中するが、これは前記の通り削平によるものと判断できる。出土遺物は少なく、パンケースにて２箱にとどまった。



第21図　大久保向原遺跡第２次調査区
遺構配置図（１/300）

2）基本層序

第25図１号溝の土層図からもわかるとおり、遺構面の大きな削平を受けていない場所では、約10cm の表土・耕作土層の下位に約12cm の厚さで明灰褐色粘質土がひろがる。削平を受けている場所では、この明灰褐色粘質土が失われており、表土直下で遺構面となる。遺構は地山である明黄褐色土に切り込み、埋土は灰褐色粘質土を基本とするため、遺構の判別は容易であった。

3）遺構と遺物

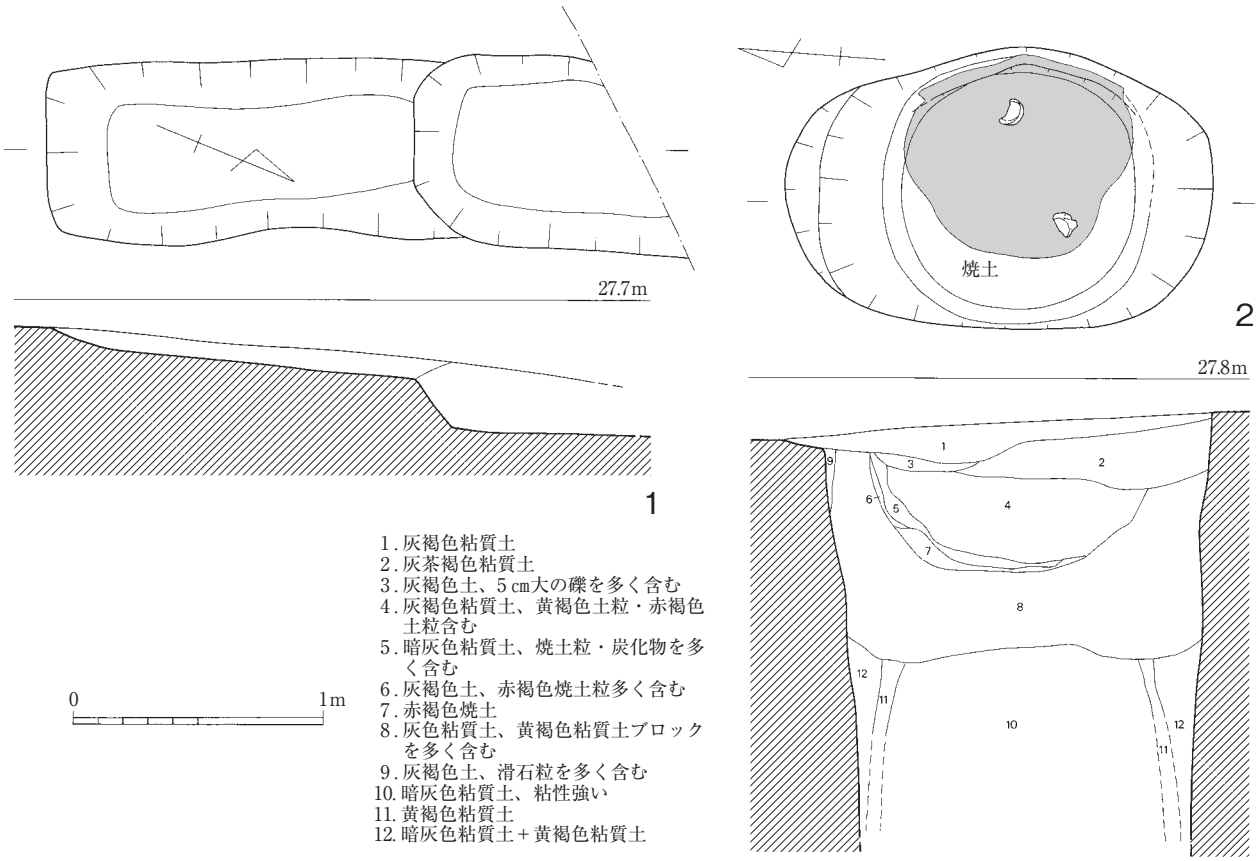
土坑

１号土坑（図版11－１、第22図）

１号溝と２号溝に挟まれる位置で検出されたもの。北側は調査区外へのびる。0.7m 幅の長方形土坑で、長軸は2.2m 以上となる。北側が深くなる２基の長方形土坑が並んでいるとも、１・２号溝に並行することから削平された溝の一部ともみることができるかもしれない。断面は台形で、底面レベルは南側で26.44m、北側で26.17m を測る。遺物は土師器・瓦器・青磁が小ビニル袋１であり、ごく少ない。

出土遺物（第23図）

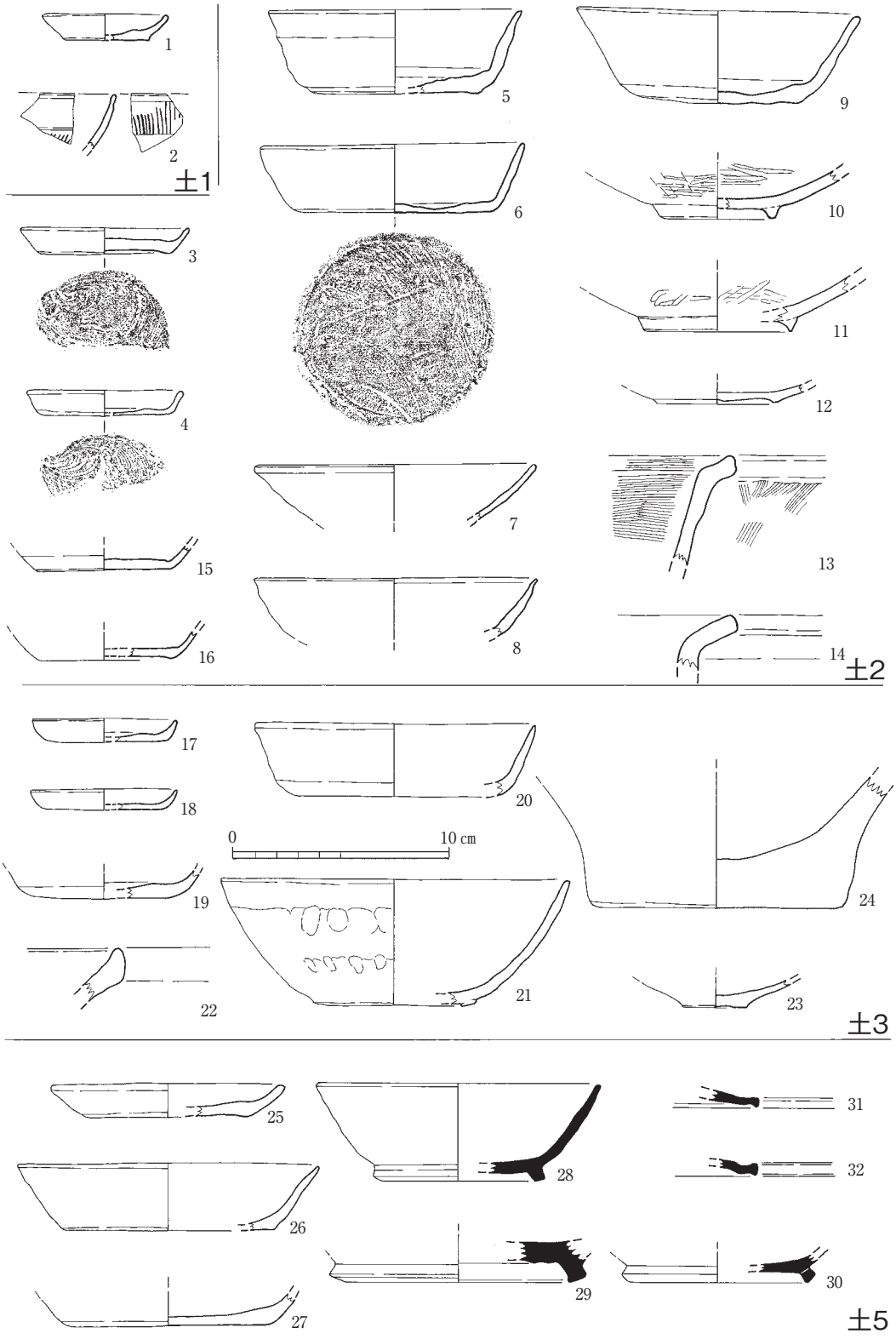
１は土師器小皿で、口径5.8cm とごく小さい。２は同安窯系の青磁碗口縁部小片。内外面に



第22図　１・２号土坑実測図（１/30）

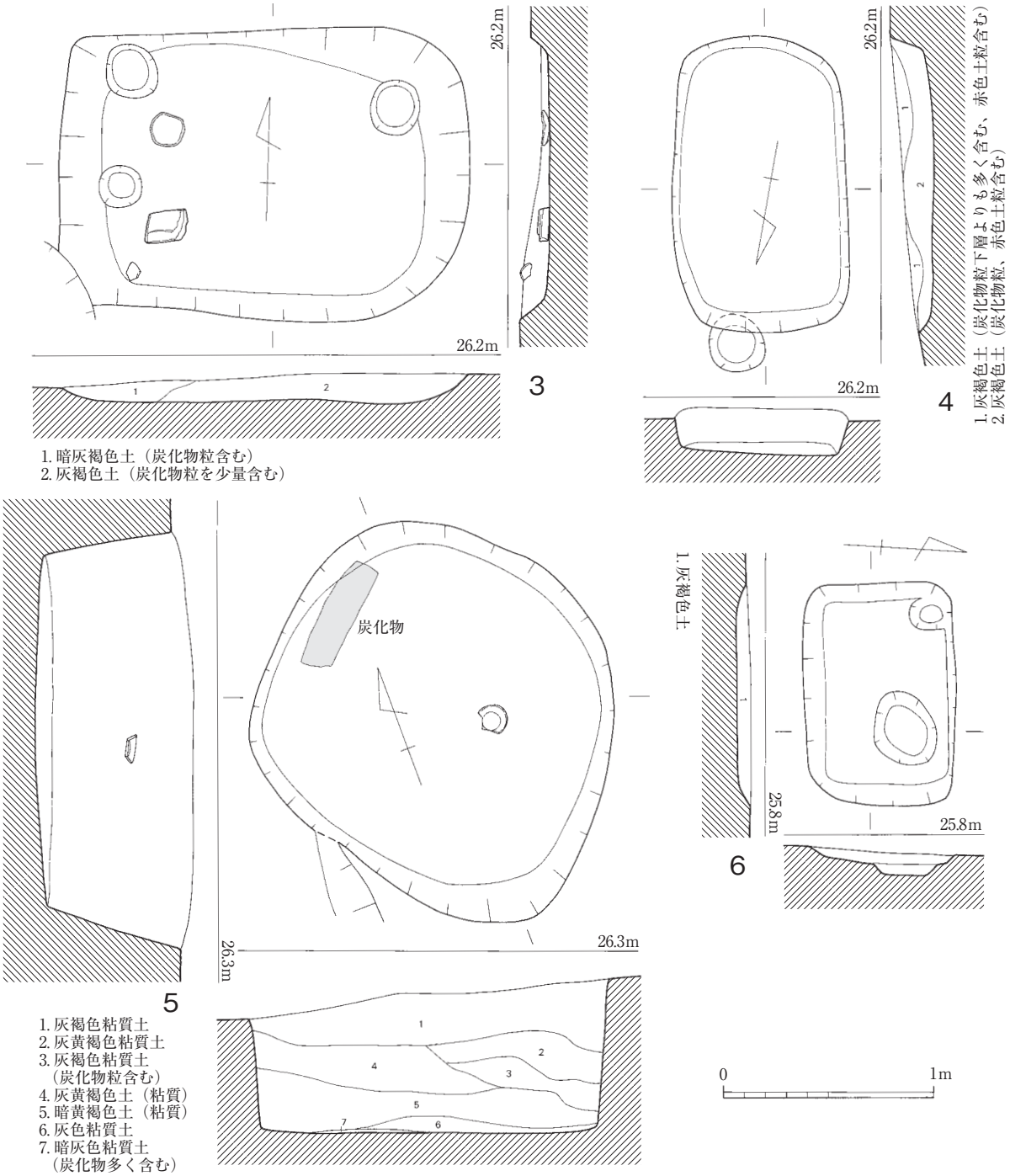
櫛描の文様をいれる。釉は発色が良く緑灰色を呈する。

２号土坑（図版11－２、第22図）



第23図　土坑出土遺物実測図（１／３）

1区のピットが散在する地区に位置するもので、形状や深さから井戸とみられる。検出面では灰褐色土が1.1m ×1.7m の楕円形で検出された。上層には焼土層が径0.9m の範囲でレンズ状に堆積し、出土遺物はこの層より上位が多い。また検出面北側を中心に壁面に滑石粒を多く含む部位があり、滑石を用いた構造物が存在したかと考えられる。焼土層を除去すると黄褐色粘質土ブロックを多く含む灰色粘質土が堆積するが、遺物はごく少ない。その下層には粘質の強い暗灰色の粘質土が厚く堆積する。この層を囲むように円柱状に黄褐色粘質土が存在するが、



第24図　3～6号土坑実測図（1/30）

これは井戸の木枠が腐食して形成されたものとみることができる。この下層からの出土遺物はごく少ない。径約1.2m の井戸と考えられるが、直立する壁面で湧水も著しく、約2.2m 下げた時点で掘削を中止した。遺物は土師器を中心とするもので、中ビニル袋３程度の量がある。図化した以外はごく細片となっており、須恵器や瓦器も若干みられる。下層として取り上げたものには、上層同様の土師器皿や瓦器椀の他に、弥生土器のような胎土の甕片や焼き締めの大甕片があるが、実測に耐えない。

出土遺物（第23図）

３・４は土師器小皿。３は口径7.8cm、４は口径7.2cm を測る。４は非常に薄手で軽い。

５～９は土師器坏。５は器高3.9cm と深い形状。底面はナデにより糸切り痕を残さない。６は口縁部の一部を欠損するものの完形に復元できる。今回の調査では細かな破片資料が多く、その中で珍しい。内外面に使用に伴うとみられる有機物の付着等が多い。８は直線的に広がる口縁部。８は短く外反する口縁部を有する。９は器高4.6cm を測る深い形状。色調が黄褐色から灰褐色を呈し、土師質とはいえ一部還元炎をうけた結果であろう。底面はヘラ切り後ナデ。10～12は瓦器椀の底部で、断面台形の高台を伴う。10･11は硬質で、白黄色を呈し、内外面にミガキが観察される。12は軟質で摩滅が著しい。13は土師質の鉢。口縁部は屈曲させ、端部は上方へややつまみ出す。外面には使用によるススが付着する。14は強く外反する甕口縁部小片。胎土に石英等の砂粒を多く含み、弥生土器の可能性が考えられる。15･16は白磁坏の底部。ハ字形に開く体部が続くものと考えられる。

３号土坑（図版11－３、第24図）

２区で検出した長方形の土坑。東西に長辺をおき、2.0m ×1.4m を測る。深さは約10cm でごく浅い。土坑内に径約15cm のピットが伴う。埋土は灰褐色土を基本とし、炭化物を含んでいる。遺物量は中ビニル袋１程度であり、土師器の小片が大部分を占める。

出土遺物（第23図）

17～19は土師器小皿。17･18は口径6.8cm と、ごく小さい。19はそれらに比べ大形ではあるが、残存が悪い。20は土師器坏。口径は13.0cm を測る。21は瓦器椀で、焼成が甘く軟質。高台はごく低く粗いつくりである。22は須恵質の鉢。23は発色の悪い白磁であろうか。径３cm の平坦な底部をもつ特異な形状。内面のみ施釉し、黄白色を呈する。24は弥生土器甕の底部。厚みがあり、どっしりとした印象を与える。摩滅が著しい。

４号土坑（図版12－１・２、第24図）

２区３号土坑の北東に位置する隅丸長方形の土坑。南北に長辺をおき、３号土坑とは直行する軸といえる。1.4m ×0.8m を測り、深さは約15cm。埋土は灰褐色土で、炭化物を含み、赤色土粒も観察される。出土遺物は小ビニル袋1程度でありごく少ない。土師器の小片が多くを占め、糸切り痕を残す小皿の底部がみられるが、実測に耐えない。他に瓦器・須恵器・青磁の小片が認められる。

５号土坑（図版12－２、13－１、第24図）

２区調査区の北東に位置する土坑。2.0m ×1.6m のやや不整形な円形をなし、深さは約65cm。

壁の立ち上りはほぼ直立するもので、底面は水平である。埋土は小礫を多く含む灰褐色～灰黄褐色粘質土で、図化したように分層したが、基本的にはいずれも類する埋土である。底面近くで炭化物がひろがり、北西隅では15cm ×50cm の板状の炭化材が検出された。遺物は中ビニル袋４程度で比較的多いが、３cm 四方に満たないような土師器の小片がほとんどを占める。他に瓦器・須恵器小片を含むが量は少ない。

出土遺物（第23図）

25は土師器皿。底面には糸切り痕が観察されるが、摩滅する。26･27は土師器坏で、26は直線的に開く体部である。27は底部で、板圧痕を残す。28･30は須恵器坏身で同一個体の可能性を残す。断面方形の外方へ開く高台をもち、体部は直線的にハ字形に広がる。焼成は甘くやや軟質で、黒灰色を呈する。29は28と同様の形状の高台だが、大形であるため長頸壺となろうか。31･32は須恵器坏蓋の口縁部小片。扁平な形状で、口縁端部は下方へ短く屈曲させる。

６号土坑（図版13－２・３、第24図）

２区調査区の北端に位置する土坑。不整形の包含層を下げた時点で検出された方形土坑である。東西に長軸をおくもので、1.0m ×0.7m の小形のもの。深さも約６cm とごく浅い。土坑内に大小のピットが伴うが、これらピットもごく浅い。埋土は灰褐色土である。遺物は実測に耐えない土師器小片が６点のみである。

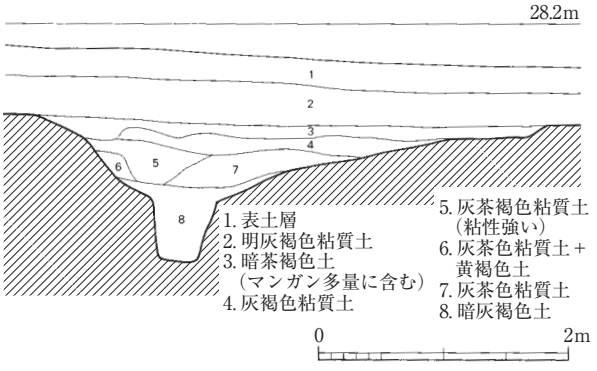
溝

１号溝（図版12－１・２、第25図）

１区で検出した溝で、北から約20度西に振る方向に直線的に延びる。両端とも調査区外へ続くが、南端は狭く検出面での幅0.5m、北端では検出面での幅3.3m を測る。第25図は調査区西壁における土層図である。断面形状は上層は30～45度の傾斜をもち、下層は急激に約50cm の深さで深くなる。底面はほぼ水平。埋土は上層が茶褐色～灰褐色粘質土で、下層の断面方形の掘り込みは灰褐色粘質土。底面近くはより粘性が強く、底面には石敷状を呈する箇所が多い。底面のレベルは南端で27.52m、北端付近で26.75m であり、北側に向かって深くなる。北端は段をもってさらに深くなり、底面レベルは26.30m を測る。南端での検出幅はごく狭いが、上層は削平され、下層の断面方形部があらわれたものといえる。周辺にピットが検出されないことからも、大きく削平されているものみることができる。

出土遺物（図版13－３、第26図）

１は青磁碗の口縁部小片。内面に草花文を描く。ローリングを受けたような摩滅が著しい。２は白磁の小形容器。丸みを有する胴部で、口縁部は短く上方へ立ち上げ、口縁部内面には平面をつくる。胴部外面に花弁の文様を浮き彫りにして刻む。３は弥生土器甕の底部。丸底で、非常に厚いつくりである。外面にはタタキ痕、内面にはハケメが観察される。



第25図　１号溝土層図（１/60）

２号溝（図版13－２、第21図）

１号溝にほぼ並行する形で直線的に延びる。調査区南端で東西方向に曲げるようであるが、検出部分が狭いため不明瞭である。検出面の幅は約1.2m を測る。断面形状は台形をなし、底面の幅は約0.4m。底面レベルは南端で27.75m、北端で27.16m で、北側に向かって深くなる。埋土はマンガン粒を多く含む暗灰褐色粘質土を基本とし、薄灰褐色粘質土が互層に堆積する。

出土遺物（第26図）

４は須恵器坏蓋。扁平な形状で、口縁端部は下方へ短く屈曲させる。外面全体に自然釉が付着する。５は瓦質鉢の口縁部で、硬質。丸みを帯びる肥厚帯をもつ。

３号溝（図版12－１、第21図）

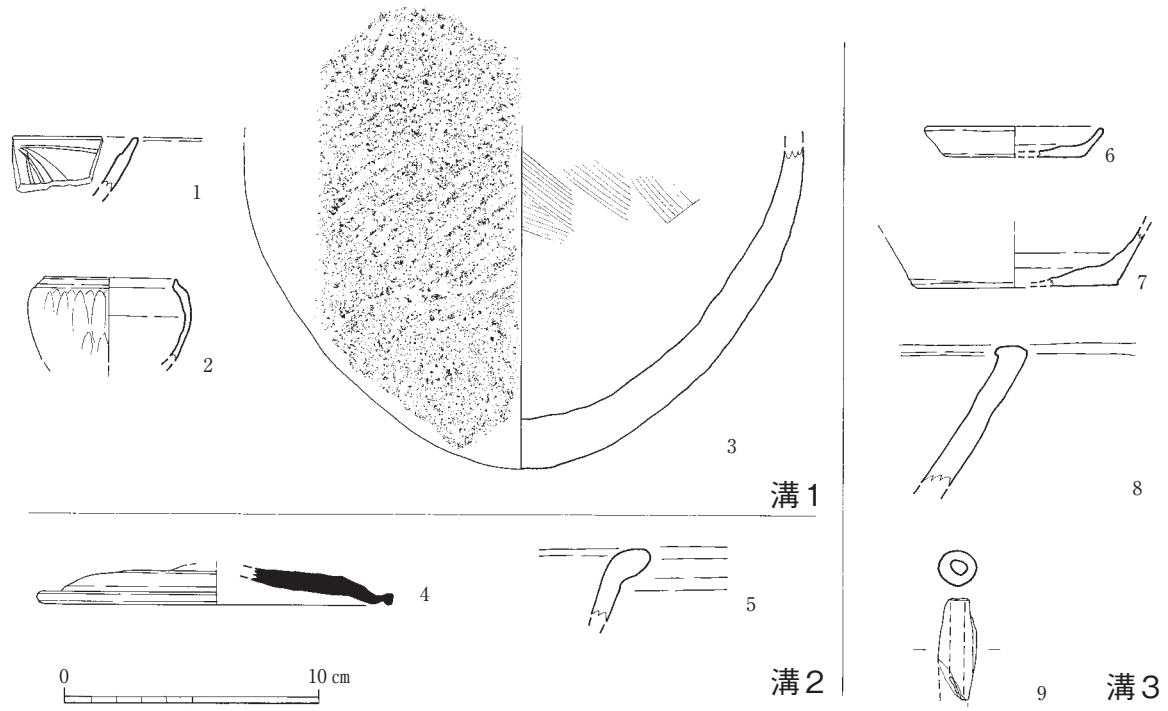
１号溝の北半肩部で検出した幅約0.6m の溝状遺構。１号溝と方向は並行するものとみられる。埋土は粘性の弱い暗灰褐色土であるが、上層には１号溝かとみられる茶褐色土が堆積することから、１号溝よりも古い時期と判断される。両端とも不明瞭であり溝とするにはいささか躊躇されるが、１号溝に先行する溝があったことを示したい。

出土遺物（第26図）

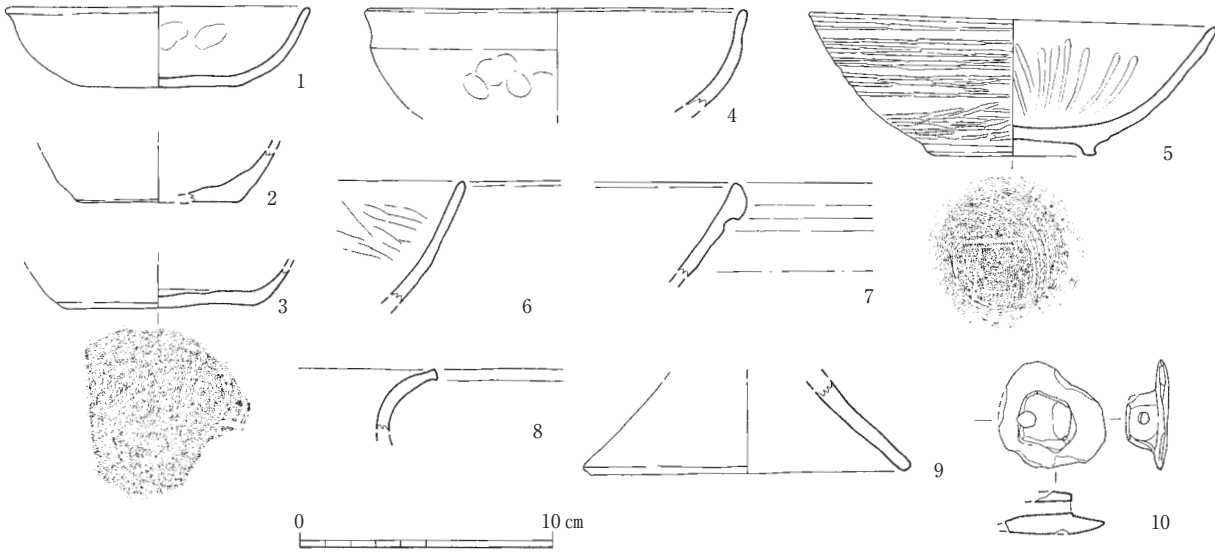
６は口径7.0cm の土師器小皿。７は土師器坏の底部で、底面には糸切り痕を残す。８は軟質瓦質の鉢。直線的に開く形態で、口縁部上面を水平につくり、端部内面をつまみ出す。使用によるとみられる摩滅が著しい。９は土師質の土錘。

ピット出土遺物（図版13－３、第27図）

１は２区北西隅付近で検出したP24出土の土師器坏。底部からの立ち上りは丸みを帯びる。



第26図　溝出土遺物実測図（１／３）



第27図　ピット出土遺物実測図（1／3）

底面はナデ調整。2は1区2号土坑東側で検出したP68出土の土師器皿で粗いつくりで歪みが生じる。3は2区北東隅付近で検出したP51出土の土師器皿で、底面には糸切り痕を残す。4は2区北東隅付近で検出したP56出土の土師器椀。丸みを帯びる体部に外反する口縁部が続く。摩滅により調整は不明だが、外面に指圧痕が観察される。5は2区北西隅付近のピットから出土した瓦器椀。焼成が良く、硬質。底面に高台を貼り付けるが、接合の痕跡を丁寧に消さない。底面には糸切り痕を残し、×印状に板圧痕がみられる。外面には横方向のミガキ、内面には放射状にミガキが施される。6は3号土坑北側のP39出土の瓦器椀の口縁部。内面には横方向のミガキがみられる。7は2区北西の不整形な包含層下層に位置するP23出土の白磁碗の口縁部小片で玉縁。釉は乳白色で発色が良い。8は3号土坑北側に隣接するP36出土の土師器甕口縁部。大きく弧を描き外反する形態で、薄手のつくり。9は4号土坑北側に位置するP47出土の土師器で、ハ字形に開く形状から高坏の脚部の可能性が考えられる。10は2区北西隅に位置するP11出土の滑石製の模造鏡。やや丸みを帯びた立方体の紐に横方向に穿孔を加える。体部は不整形の円形で、端部は薄くつくる。石鍋の把手部を用いた再利用品であろうか。

4）まとめ

大久保向原遺跡第2次調査では、中世の土坑6基と、中世の溝3条を検出した。本来はより多くの遺構が存在したはずであるが、かつての圃場整備事業で削平されている点は残念である。

土坑は井戸と判断される平面円形で深いものと、平面方形のものがある。後者はその形態から土壙墓の可能性も考えられるが、長辺が短いことや、出土遺物に特徴がみられないことから、躊躇される。溝も単調な構造で出土遺物が少ないこと等から性格を読み取ることが難しい。1号溝は底面がかなり狭くなるが、故意に石敷をおこなった状況が観察でき、里道のようなものかと考えられる。調査区西側は地形が大きく落ち込むが、下段水田面に続く道路跡であろうか。

大久保向原遺跡は、第1次調査区である丘陵裾から、第2次調査区がある台地縁辺まで、中世の集落が展開していたことが想定される。大藪遺跡や周辺の圃場整備事業に係る発掘調査の成果と併せて、当該時期の集落の様相を検討する資料が加わったものと評価したい。

3　大藪遺跡

1）遺跡の概要

大藪遺跡の発掘調査は、平成21年度末から平成22年度前半にかけて実施したものであり、平成21年度を第１次調査、平成22年度を第２次調査としている。用地買収の関係から第１次調査が路線の中間部、低丘陵上の平坦面に、第２次調査がその前後、平坦部から斜面部にあたる。第１次調査区は、京都郡みやこ町勝山大久保2635、2639、2643－１、2644に、第２次調査区は、同1878、1881－１、1881－２、1882、1883、1884、1885、1886、2580、2626－２、2633－１、2634－２、2641－３、2640－１番地及び5254道に所在する。調査直前は第１次調査区は荒蕪地及び水田、第２次調査区は畑地として利用されていた。

第１次調査区は約1,000㎡で、遺構は全面に確認されたが、北側の密度が高い。第２次調査区のうち、北側調査区は南北35m、東西15～23m、面積665㎡である。遺構は全面で確認され、遺構密度も高い。南側調査区は南北29m、東西５～15m、面積400㎡である。遺構は全面で確認されたが、北半部はかなり密度が低い。

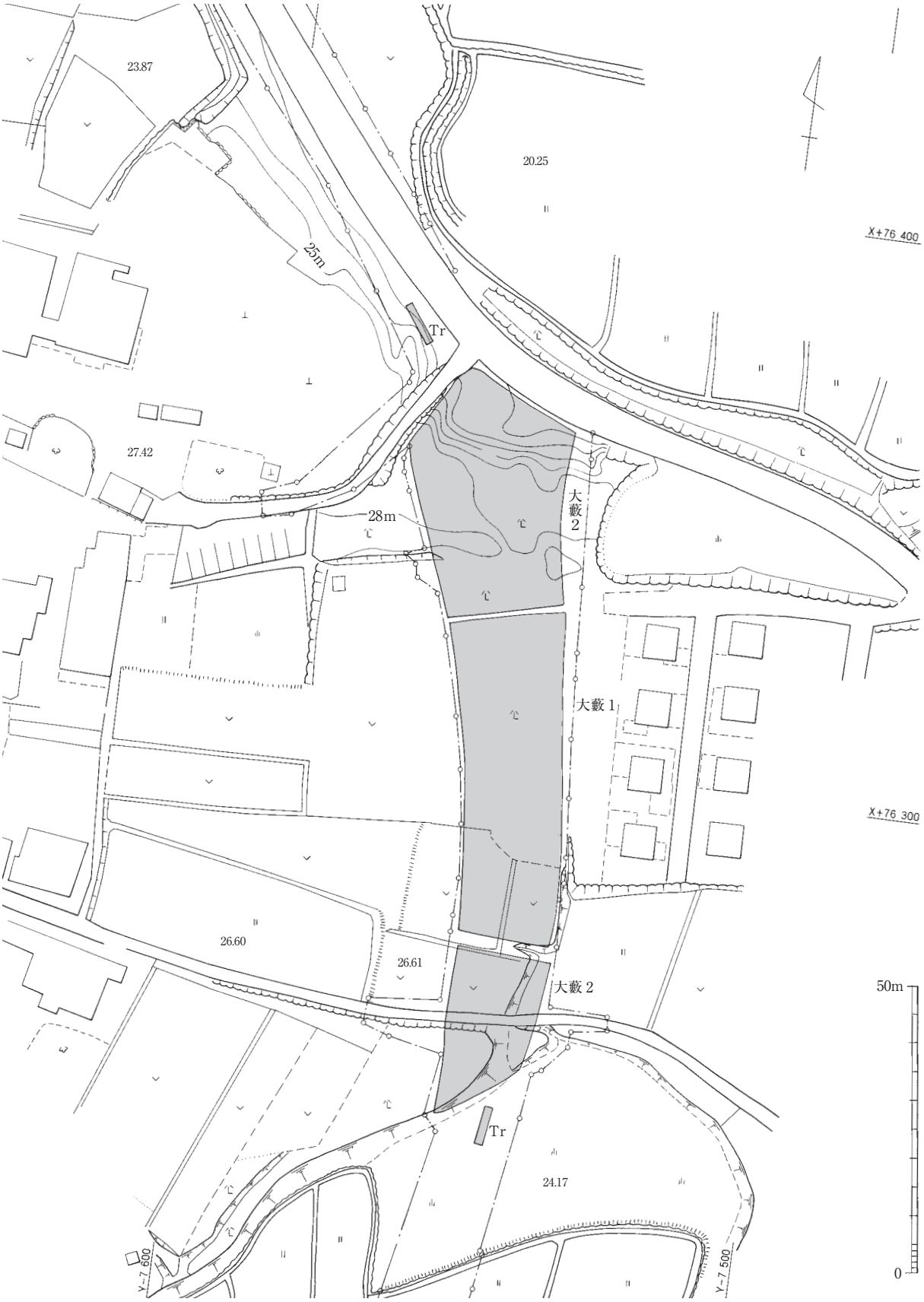
発掘調査作業風景

報告にあたっては、遺構が連続することからも、第１次調査・第２次調査をまとめて行うものとする。検出した主な遺構は、弥生時代の土壙墓13基、貯蔵穴３基、古墳の周溝１条、古代の竪穴建物１棟、土坑１基、中世の掘立柱建物１棟、土壙墓１基、配石墓１基、土坑７基、溝８条、道路状遺構１条、土塁状遺構１条である。なお、第１次調査時の遺構番号は、報告にあたって下記の通り変更した。

土坑１→23号土坑　　土坑２→24号土坑
土坑３→25号土坑　　溝１　→４号溝と一連
溝２　→９号溝　　溝３　→10号溝

なお、大藪遺跡は、文化財保護委員会が昭和43年刊行した『全国遺跡地図（福岡県）』に「上大久保大藪遺跡」として周知化されているが、本来の小字名は「大ヤ子」であることがわかった。当時、手書き表記の「大ヤ子」を「大ヤブ」と誤認したのではないかと考えられるが、混乱を避けるため現行の包蔵地地図に登録のある「大藪遺跡」を用いることとした。また今回の調査区は南北に長く、「大藪遺跡」と「上久保南遺跡」とにまたがるが、一連の遺構が続くこともあり、「大藪遺跡」として報告を行うものとした。

空中写真撮影風景

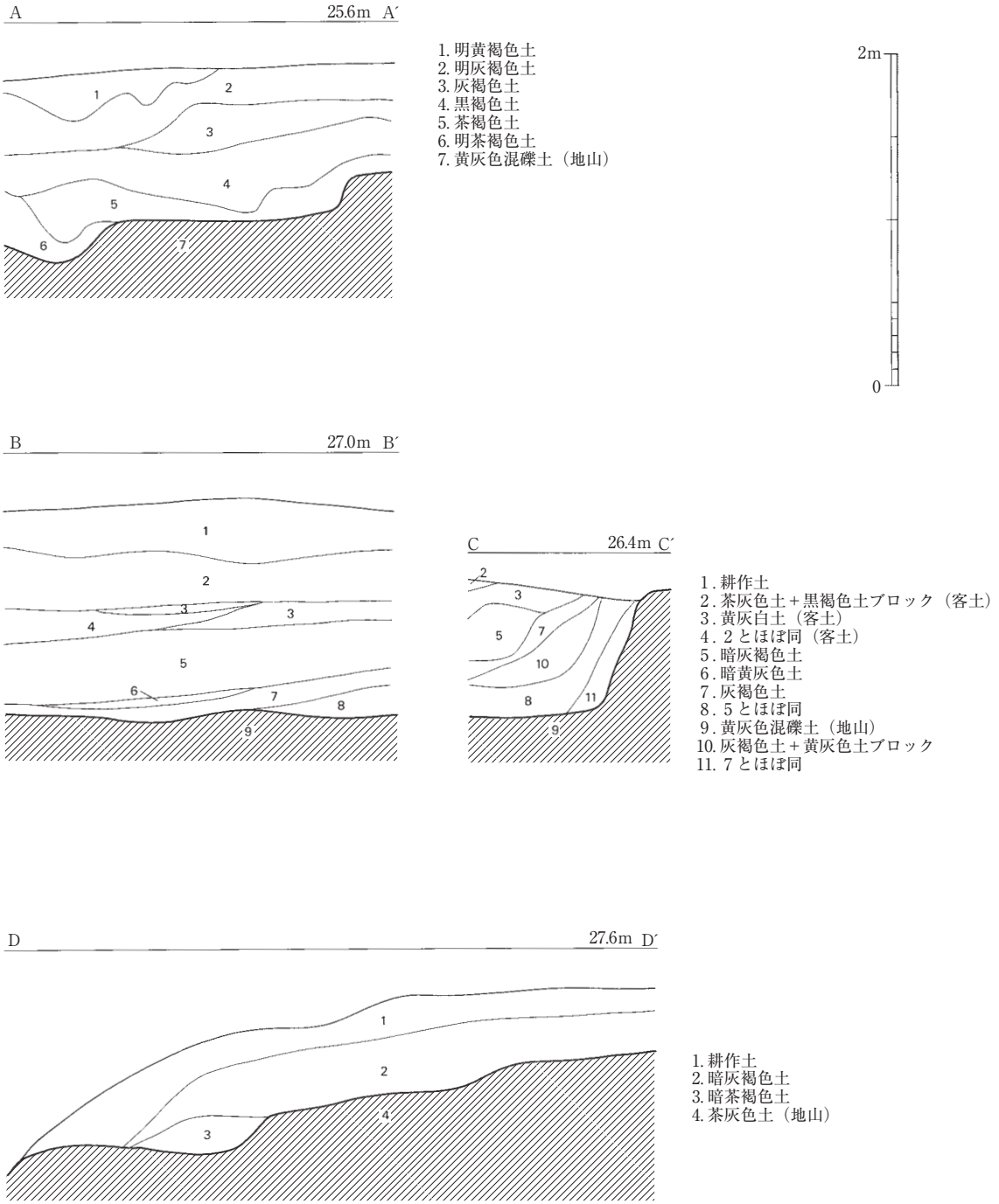


第28図　大藪遺跡周辺地形図（1/1,000）

第29図　大藪遺跡遺構配置図（1/200）

2）基本層序（第30図）

第30図Ａ－Ａ’は第２次調査北側調査区北端の土層図である。調査前に表土は除去されていたため、その下層からの堆積を示している。この付近は斜面であるため山側からの土砂の流入によって複雑な堆積状況を示す。第１層は基盤層に由来する明黄褐色土である。第２・３層は灰褐色土からなる遺物包含層である。第４～６層も遺物包含層であるが、この付近のみ層として確認される。遺構覆土もこの第４～６層に類似する。第７層黄灰色混礫土層は無遺物層であ



第30図　大藪遺跡第２次調査区基本土層図（１/40）

り、この付近の基盤層である。基盤層と遺構との差は明瞭で、遺構確認作業はそれほど困難を伴うものではなかった。

Ｂ－Ｂ'、Ｃ－Ｃ' は第２次調査南側調査区の中央付近にある谷地形の断面土層図である。本来は幅の広い、深さ80cm 位の溝であったと推察されるが、現在この直上を町道が通っており残念ながら調査できなかったため確認することができなかった。第１層は現代の耕作土である。その下層の第２～第４層は客土であり、後世に人為的に埋められて現在の地形となったことが判る。第５～８層、第10・11層は溝の覆土である。第９層がこの付近の基盤層である。

Ｄ－Ｄ' は第２次調査南側調査区南端の土層図である。耕作土の直下に暗灰褐色土の包含層が堆積する。この付近は緩斜面であるため包含層の堆積が厚い。第３層は古墳の周溝である６号溝の覆土である。第４層茶灰色土はこの付近の基盤層である。遺構覆土との差は明瞭であった。

３）弥生時代の遺構と遺物

土壙墓

１号土壙墓（図版21－１、第31図）

第２次調査北側調査区北西端の斜面で検出した土壙墓である。主軸をＮ－80°－Ｗに向け、長軸152cm、短軸50cm の長方形プランを呈す。深さは43cm。覆土は上層に第２層暗黄褐色土、その下層に第３層黄褐色土ブロックを含んだ黒灰褐色土、第６層黄褐色土を含んだ暗黄褐色土と続く。東側小口部には第４層黄褐色土ブロックを含んだ黒褐色土が、西側小口部には第５層暗黄褐色土が見られる。最下層に第７層黄褐色土が堆積する。

２号土壙墓（図版21－２、第31図）

第２次調査北側調査区北西端斜面で検出した土壙墓である。１号土壙墓から70cm 東側の直列する位置にあり、主軸をＮ－78°－Ｗに向ける。長軸134cm、短軸50cm の長方形プランを呈す。深さは40cm。覆土は上層に第１層の締まりの弱い暗灰褐色土、下層に第３層のよく締まった灰褐色土が堆積し、西側小口部には第２層の締まりの弱い灰褐色土が堆積する。

３号土壙墓（図版21－３、第31図）

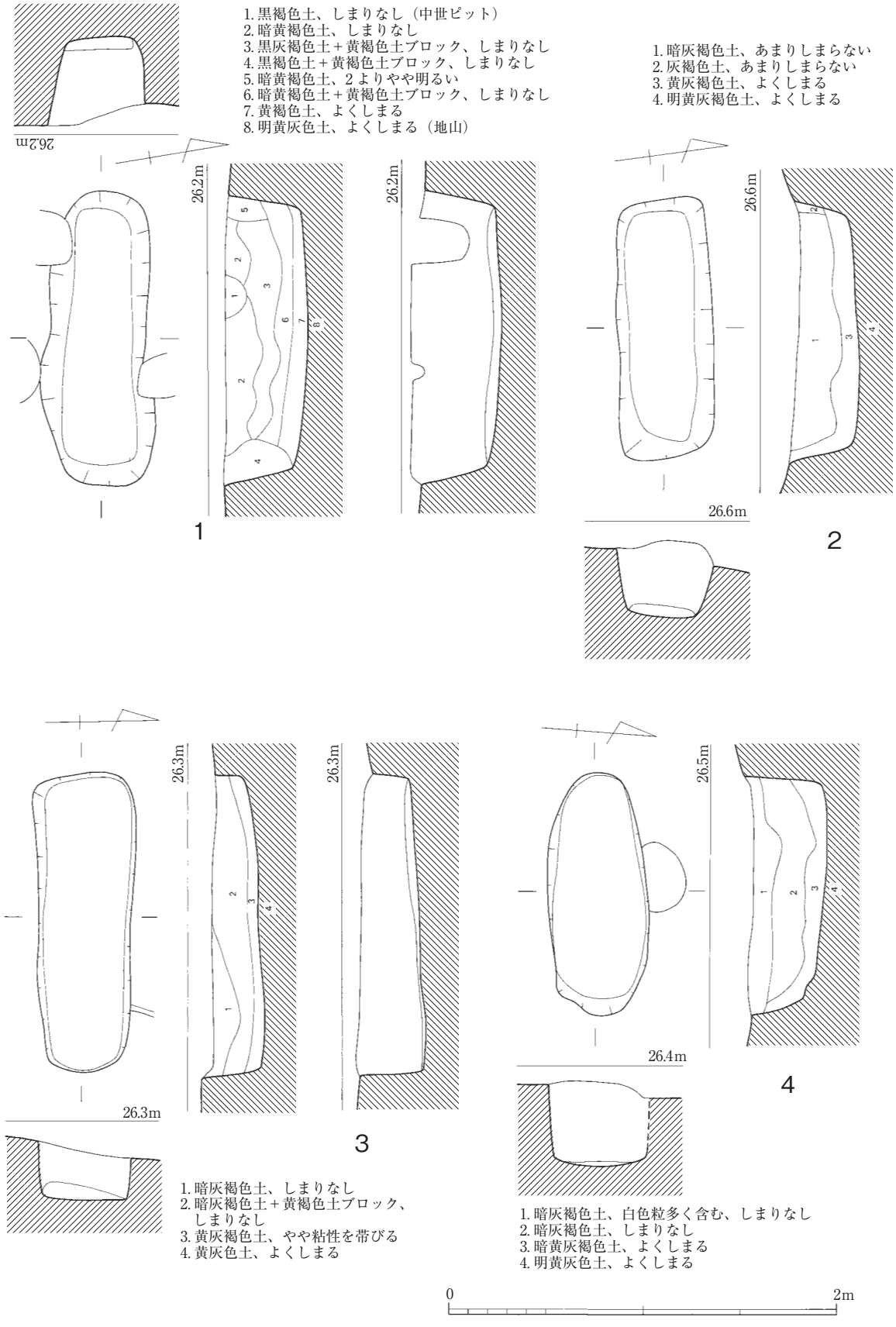
第２次調査北側調査区北西端斜面で検出した土壙墓である。２号土壙墓から80cm 南側の並列する位置にあり、主軸をＮ－89°－Ｗに向ける。長軸155cm、短軸53cm の長方形プランを呈す。深さは33cm。覆土は上層に第１層の締まりのない暗灰褐色土、その下層に第２層の黄褐色土を含んだ締まりのない暗灰褐色土、最下層に締まりのある暗黄灰褐色土が堆積する。覆土中から図示した土器片が出土した。

出土遺物（図版34、第32図）

１は壺の胴下半部片である。内面はナデ、外面は縦方向のヘラミガキを行う。底径9.7cm。胎土に石英、長石、雲母の砂粒を含む。

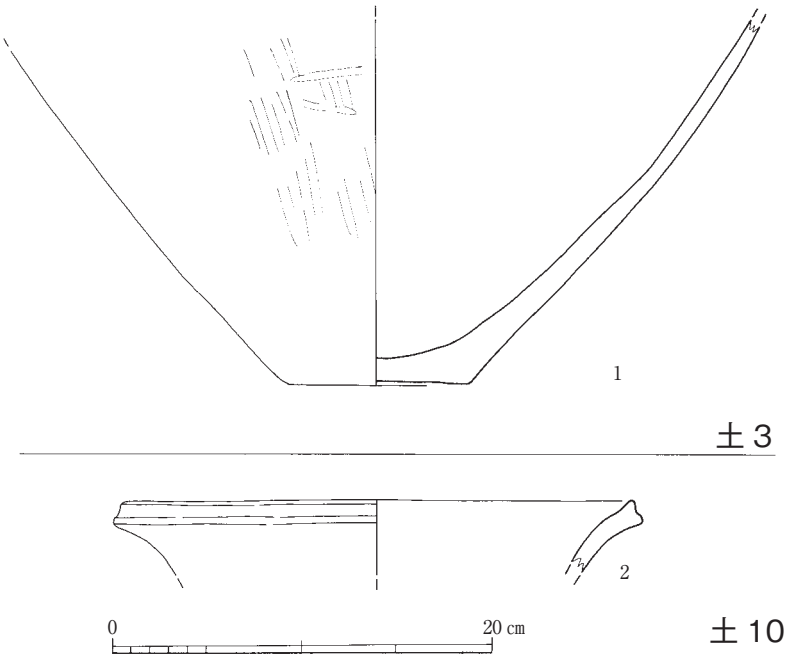
４号土壙墓（図版22－１、第31図）

第２次調査北側調査区北端斜面で検出した土壙墓である。２号土壙墓から280cm 東側にあり、



第31図　1～4号土壙墓実測図（1/30）

１・２号土壙墓から280cm東側とは直列する位置にある。主軸方位はＮ－86°－Ｅ。長軸125cm、短軸52cmを測り、小口部が丸味を帯びた長方形プランとなる。深さは43cm。覆土は上層に第１層締まりのない暗灰褐色土、その下層に第２層黄褐色土ブロックを含んだ暗灰褐色土、最下層に第３層粘性を帯びた黄灰褐色土が堆積する。



第32図　３・10号土壙墓出土遺物実測図（１／４）

７号土壙墓（図版22－２、第33図）

第２次調査北側調査区北端斜面で検出した土壙墓である。１号溝と重複しており、北西隅をこれに切られる。４号土壙墓から140cm東側にあり、１～４号土壙墓とは主軸が直交する位置にある。主軸方位はＮ－8°－Ｗ。長軸120cm、短軸55cmの長方形プランを呈す。深さは23cm。覆土は上層に第２層暗灰褐色土、下層に第３層やや締まりのある暗黄灰褐色土が堆積する。

10号土壙墓（図版22－３、第33図）

第２次調査北側調査区の中央付近の平坦面で検出した土壙墓である。主軸方位をＮ－61°－Ｗに向ける。長軸197cm、短軸79cmの長方形プランを呈す。床面は東側がテラス状に浅くなっており、深さ26cm、中央付近で深さ35cmを測る。覆土は上層に第１層の黄灰色土粒を含んだ暗灰褐色土が厚く堆積し、底部付近には第３層灰褐色土が堆積する。覆土中から図示した土器片が出土した。

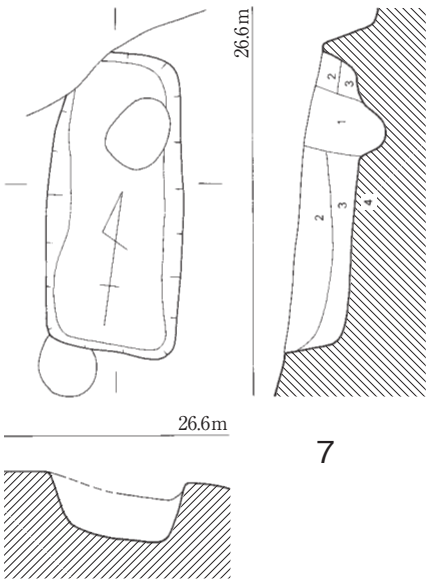
出土遺物（第32図）

２は壺の口縁部である。端部を上方に小さくつまみ上げている。口径28cm。

11号土壙墓（図版23－１、第33図）

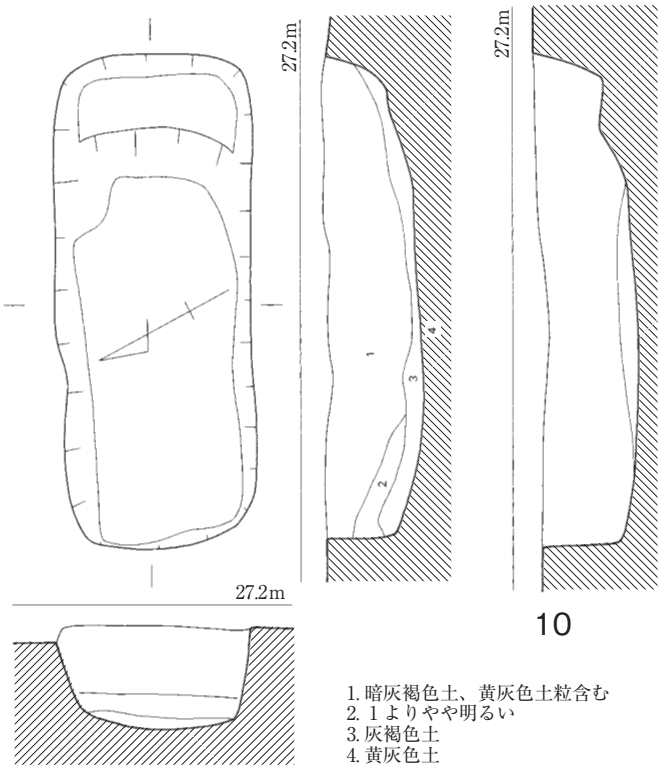
第２次調査北側調査区の中央付近の平坦面で検出した土壙墓である。10号土壙墓から70cm南東にあり、10号土壙墓とは主軸を揃えて直列する位置にある。主軸方位はＮ－75°－Ｗ。長軸210cm、短軸76cmの長方形プランを呈す。床面は中央付近が若干深く、20cmを測る。覆土は上層に第１層の黄灰白色土粒を多く含んだ暗灰褐色土、下層に黄灰白色土粒を少し含んだ暗灰褐色土が堆積する。東側小口部には第３層暗黄灰色土が見られる。

12号土壙墓（図版23－２、第33図）



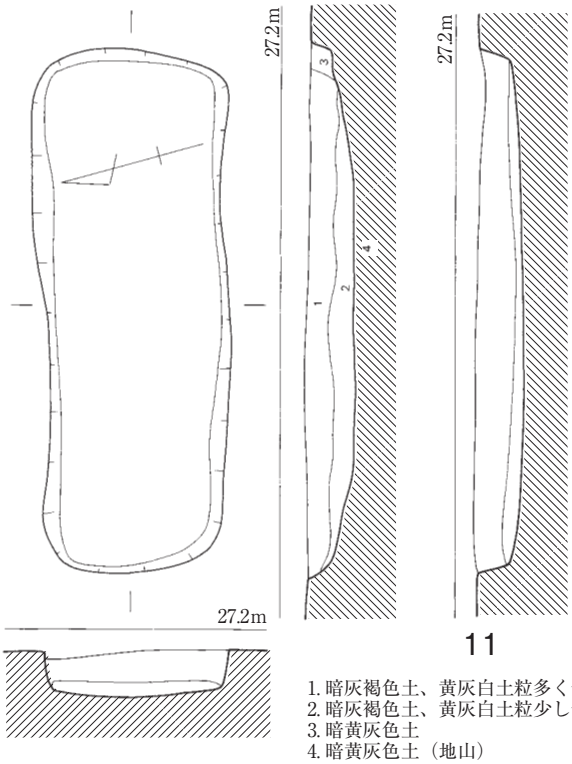
7

1. 黒褐色土、しまりなし
2. 暗灰褐色土、しまりなし
3. 暗黄灰褐色土、ややしまる
4. 明黄灰色土、よくしまる



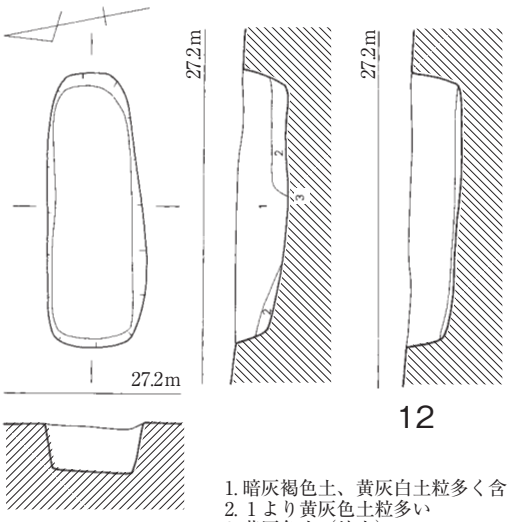
10

1. 暗灰褐色土、黄灰色土粒含む
2. 1よりやや明るい
3. 灰褐色土
4. 黄灰色土



11

1. 暗灰褐色土、黄灰白土粒多く含む
2. 暗灰褐色土、黄灰白土粒少し含む
3. 暗黄灰色土
4. 暗黄灰色土（地山）

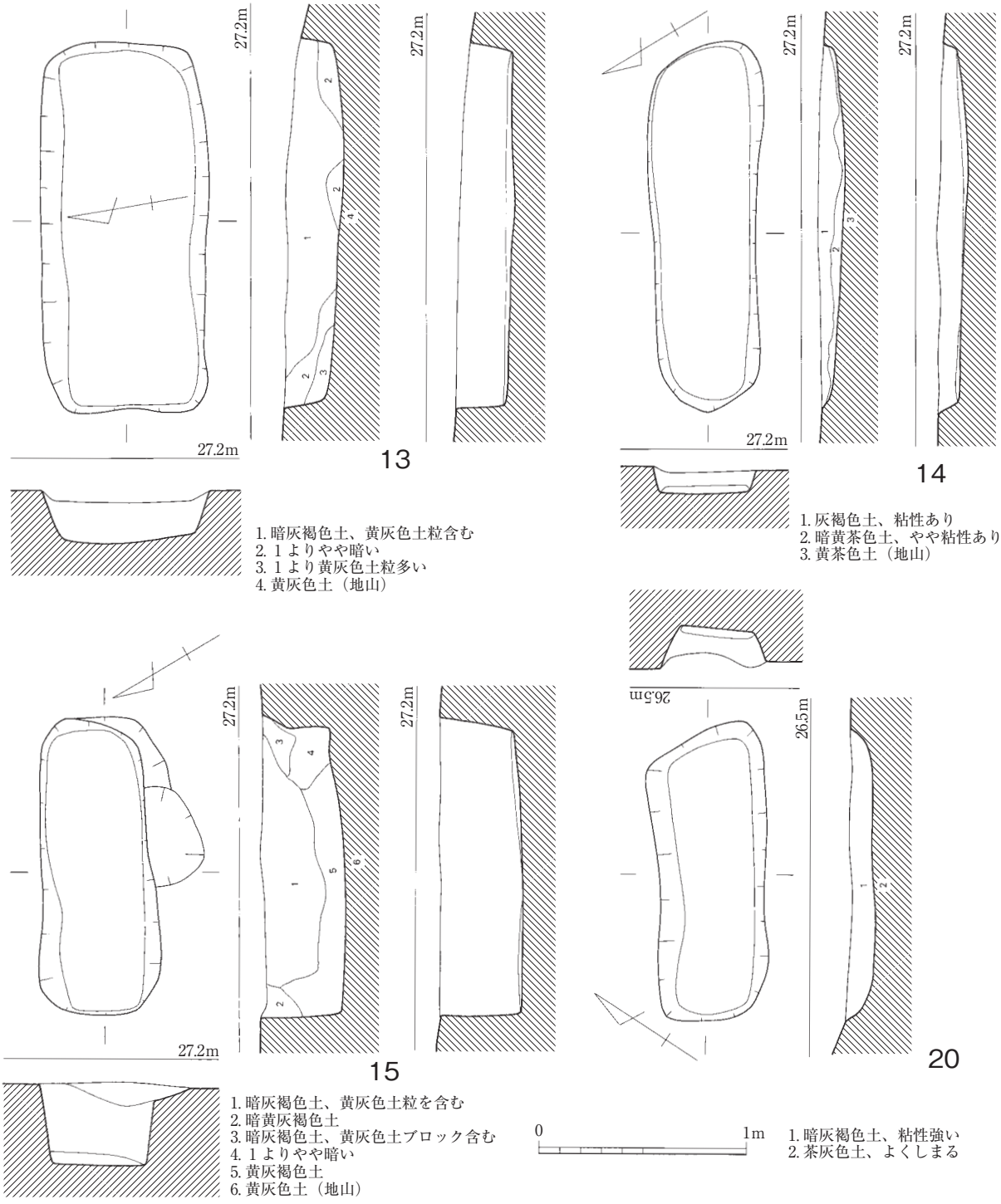


12

1. 暗灰褐色土、黄灰白土粒多く含む
2. 1より黄灰色土粒多い
3. 黄灰色土（地山）

第33図　7・10～12号土壙墓実測図（1/30）

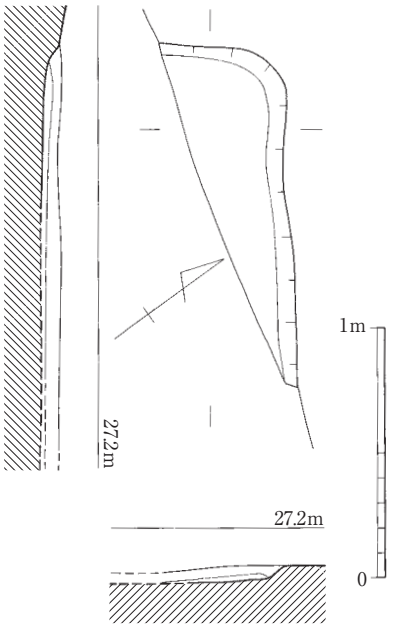
第２次調査北側調査区の中央付近平坦面で検出した土壙墓である。11号土壙墓から20cm 南東側にあり、主軸を揃えた位置にある。主軸方位はＮ－80°－Ｗ。長軸109cm、短軸39cm を測り、東側小口部が丸味を帯びるが長方形に近いプランを呈す。深さは20cm。覆土は上層に第１層黄灰色土粒を多く含んだ暗灰褐色土、下層に第１層よりも黄灰褐色土粒を更に多く含んだ暗灰褐色土が堆積する。



第34図　13～15・20号土壙墓実測図（１/30）

13号土壙墓（図版23－３、第34図）

第２次調査北側調査区の中央付近平坦面で検出した土壙墓である。12号土壙墓から40cm 南側にあり、主軸を揃えた位置にある。主軸方位はＮ－82°－Ｗ。長軸176cm、短軸81cm の長方形プランを呈す。深さは26cm。覆土は上層に第１層黄灰色土粒を含んだ暗灰褐色土、下層に第１層よりもやや暗い第２層が堆積する。



第35図　22号土壙墓実測図（１/30）

14号土壙墓（図版24－１、第34図）

第２次調査北側調査区の西端平坦面で検出した土壙墓である。10号土壙墓から100cm 南側、13号土壙墓から210cm 東側に位置し、10・11号土壙墓とはほぼ並列する位置、13号土壙墓とはほぼ直列する位置にある。主軸方位はＮ－58°－Ｗ。長軸178cm、短軸55cm を測り、両小口部が丸味を帯びた長方形プランとなる。深さは11cm を測る。覆土は上層に第１層粘性のある灰褐色土、下層に第２層やや粘性のある暗黄茶色土が堆積する。

15号土壙墓（図版24－２、第34図）

第２次調査北側調査区の西端平坦面で検出した土壙墓である。14号土壙墓から200cm 南西で、ほぼ並列する位置にある。主軸方位はＮ－59°－Ｗ。長軸144cm、短軸59cm の長方形プランを呈す。深さは40cm を測る。覆土は上層に第１層黄灰色土粒を含んだ暗灰褐色土、下層に第５層黄灰褐色土が堆積し、西側小口部には第２層暗黄灰褐色土、東側小口部には第３・４層の黄灰色土ブロックを含んだ暗灰褐色土層が見られる。

20号土壙墓（図版24－３、第34図）

第２次調査南側調査区の南半部で検出した土壙墓である。単独で位置しており、出土遺物も皆無であることから土壙墓とする明確な根拠に欠けるが、方位や形状から土壙墓と判断して報告する。主軸方位はＮ－56°－Ｅ。長軸143cm、短軸57cm を測り、ややいびつな長方形プランとなる。深さは11cm。覆土は粘性の強い暗灰褐色土である。

22号土壙墓（図版25－１、第35図）

第２次調査北側調査区の中央付近平坦面で検出した土壙墓である。１号配石墓と重複しており、大半がこれに切られているため全体の形状は不明だが、遺存する部分では長軸132cm、短軸45cm を測る。主軸方位はＮ－55°－Ｗをとり、11号土壙墓と並列する位置にある。深さは７cm 程しか残っていなかった。

土坑

８号土坑（図版25－２、第36図）

第２次調査北側調査区西端で検出した土坑である。規模や形状から貯蔵穴と推察される。西側が調査区外へと続くが、直径310cm 前後の円形プランになると思われる。床面はほぼ水平で、深さは55cm を測る。中央から北に寄った位置に20cm 程度の浅い窪みがある。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に第３層黒褐色土、下層に第４層や５層などの黄色味を帯びた層が堆積し、自然堆積の様相を呈す。床面から20cm ほど浮いた状態で土器がかたまって出土した。

出土遺物（図版34、第37図）

１～３は壺である。１・２は小型の壺。１は完形に復元できた。口縁部は短く水平に広がり、端部は丸くおさめる。頸部はあまり締まりがない。胴部の中央より若干上に最大径があり、その部分に稜が丸味を帯びた三角突帯を巡らせる。下半部は丸味が少ない器形となる。頸部内面は横ヘラミガキ、外面には縦方向の直線的な暗文が見える。胴部外面は横ヘラミガキ、底部付近は縦ヘラミガキを行う。内面は剥離が著しく調整不明。口径12.8cm、底径4.6cm、器高16.4cm。胎土に石英、長石の粗砂を若干含む。２は胴部片である。底部は丸く稜も不明瞭である。胴部は球形に近く、最大径は中位よりやや上にある。器表の風化が著しく調整不明。内面には粘土接合痕が見える。胎土に石英、長石の粗砂を含む。底径3.5cm、胴部径12.6cm。３は素口縁となる壺である。頸部の屈曲部に沿って一条の低い三角突帯を巡らせる。口縁部は短く大きく外反しており、端部は四角く面をなす。内面及び口縁部外面はナデ、胴部外面はヘラミガキを行う。色調は黄灰褐色だが口縁部外面のみ薄茶色の化粧土を塗布しているようである。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を含む。口径33.6cm。

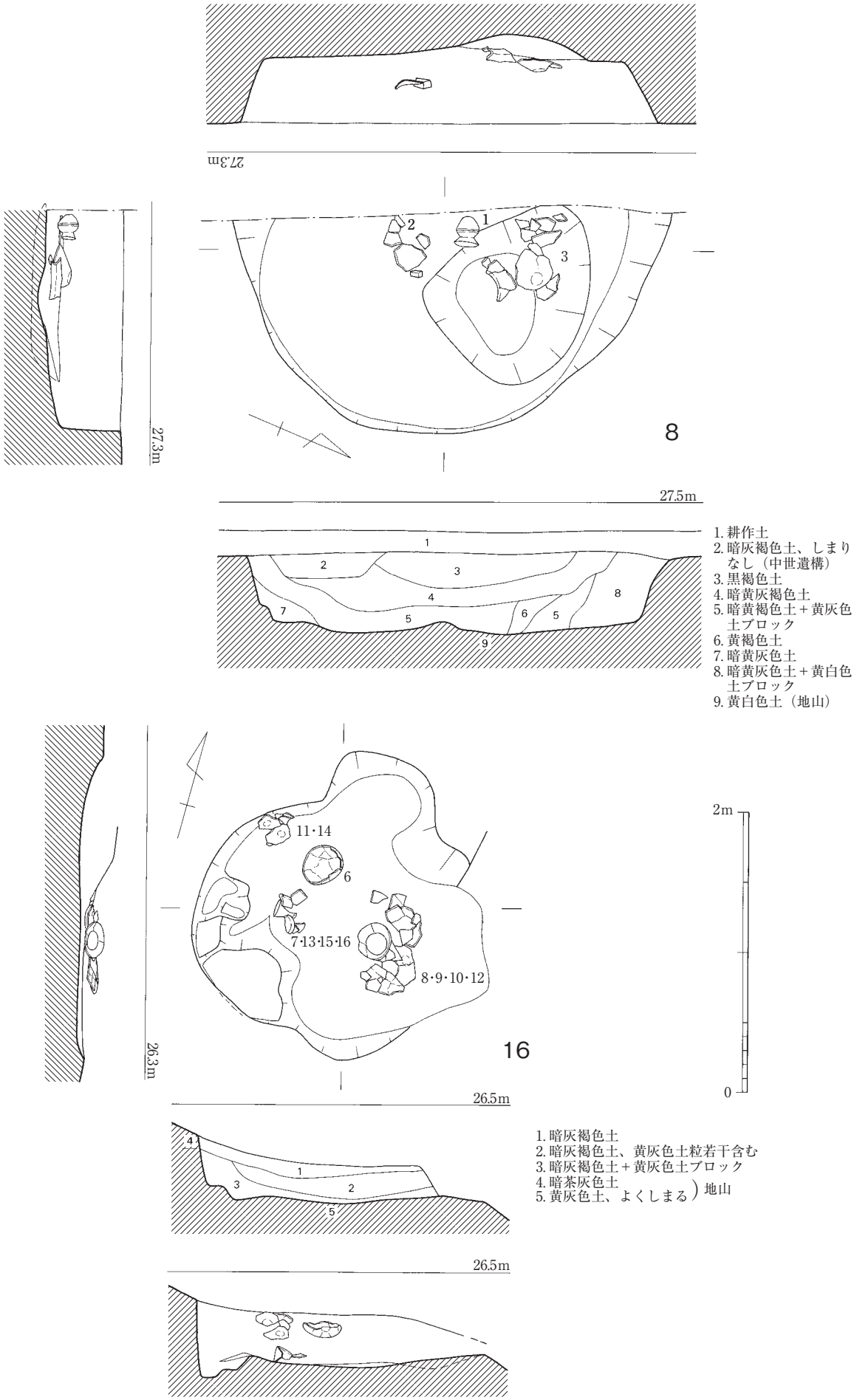
４・５は甕である。４は甕口縁部片。短く外折した口縁部で、外面の口縁部下には突帯が巡らされる。胎土に石英、長石の粗砂を含み、黄灰色を呈す。５は底部片である。底面はわずかに上げ底となる。胎土に石英、長石の粗砂を含み、色調は明茶色を呈す。底径8.1cm。

16号土坑（図版25－３、第36図）

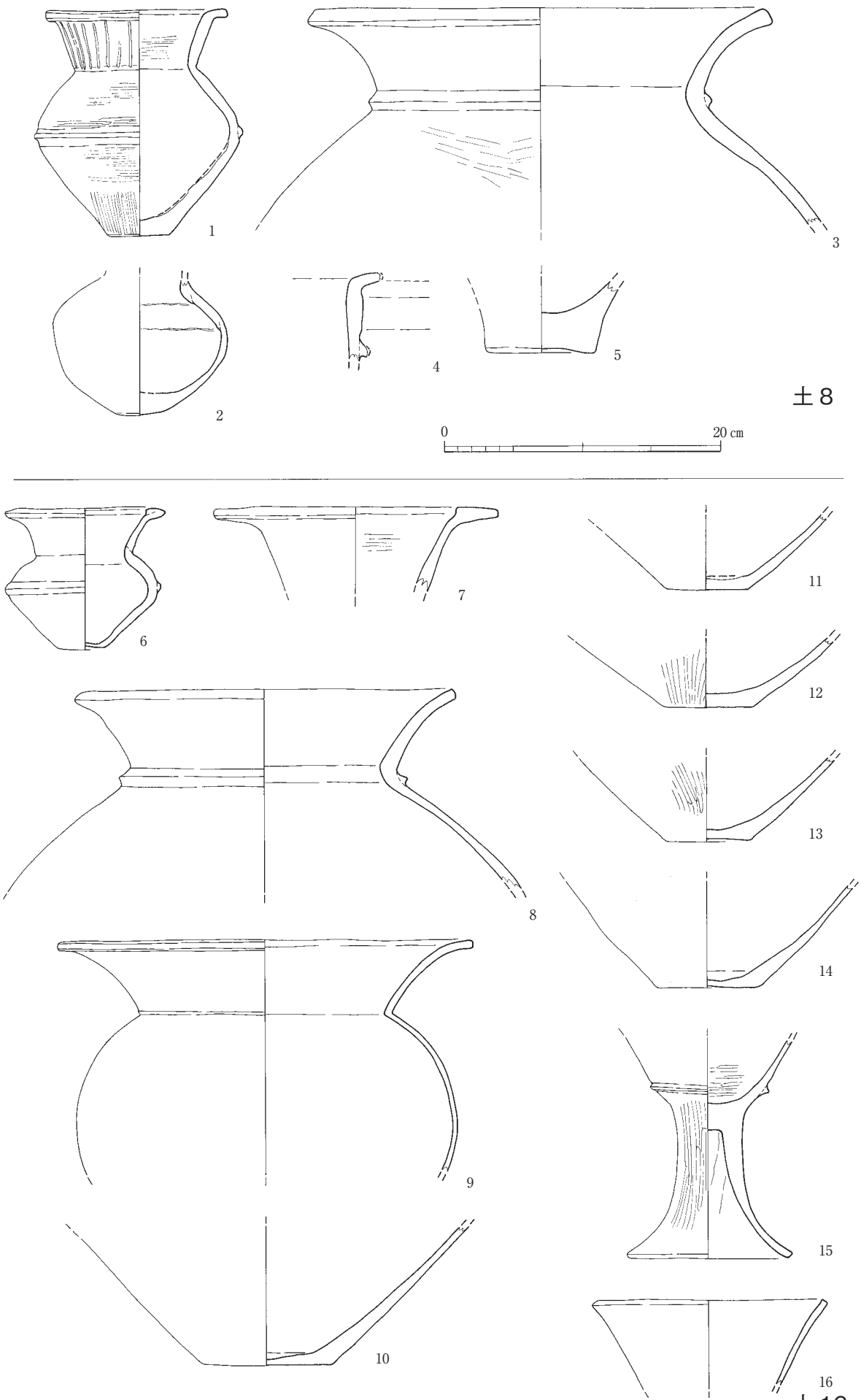
第２次調査北側調査区の南側で検出した土坑である。規模や形状から貯蔵穴と推察される。４号溝に上部を大きく削平されており、底部付近しか残っていない。現状で直径220cm 前後の不整円形プランを呈す。床面は西側に高さ10cm 程度のテラスがあるが、他はおおよそ水平な面をなす。深さは最も残りの良い西側で50cm、東側は確認時に既に床面が露出していた。覆土は上層に第１層暗灰褐色土、その下層に第２層黄灰色土粒を若干含んだ暗灰褐色土、最下層に第３層黄灰色土ブロックを含んだ暗灰褐色土が堆積する。遺物は床面直上から30cm 上までの範囲にかたまって出土した。

出土遺物（図版34、第37図）

６～14は壺である。６は完形に復元できる小型の壺。口縁部は小さな鋤先口縁となる。頸部の締まりは弱く、胴部の最大径は中位より若干上にあり、その部分には低い突帯を巡らせる。胴部下半は直線的に底部へと続いている。器表の風化が著しく調整は不明である。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を若干含む。口径11.6cm、器高10.2cm、底径3.4cm。７は水平方向に長く伸びた鋤先口縁の壺である。口縁部内面の稜は明瞭だが長く伸びてはいない。全体的に風化が著



第36図　8・16号土坑実測図（1/40）

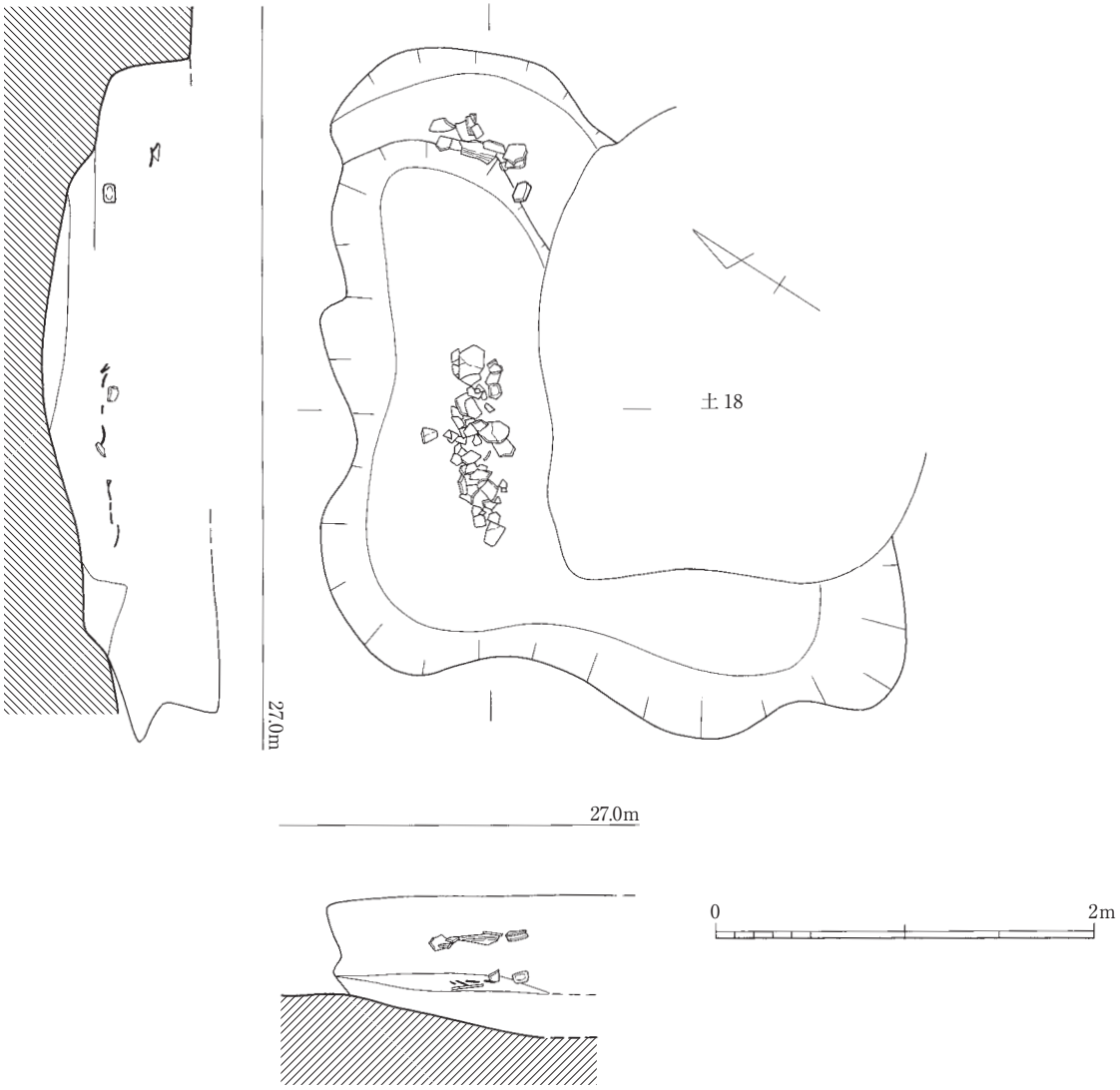


第37図　8・16号土坑出土遺物実測図（1／4）

しいが、内面にはかすかに横ヘラミガキが認められる。口径20.6cm。８は短く開く素口縁の壺である。頸部の屈曲部外面に三角突帯を巡らせる。器表の風化が著しく調整不明。胎土に石英、長石、雲母の細砂を若干含む。口径27.6cm。９も素口縁の壺である。胴部は球形に近く、頸部の締まりは弱い。口縁部は大きく長く開き、口径は胴部径を超える。全体的に器壁が薄く作られる。風化が著しく調整不明。胎土に石英、長石の細砂を若干含む。口径30cm。

10～14は壺の底部片である。10は底径9.4cm。胎土に石英、長石、角閃石の粗砂を若干含む。11は底径6.0cm。胎土に石英、長石、角閃石を若干含む。12は底径6.6cm。外面に縦方向のヘラミガキが見られる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を多く含む。13は底径6.6cm。外面に縦方向のヘラミガキが見られる。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。14は底径7.3cm。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を若干含む。

15は高坏である。坏部は丸味の少ない深みのある器形となるようである。外面の脚接合部に三角突帯を巡らせる。脚部はあまり長く伸びず裾部の短い器形となる。坏部内面には横ヘラミ



第38図　17号土坑実測図（１/40）

ガキ、脚部外面には縦ヘラミガキが見られる。裾部径12.0cm。胎土に石英、長石、雲母の砂粒を若干含む。

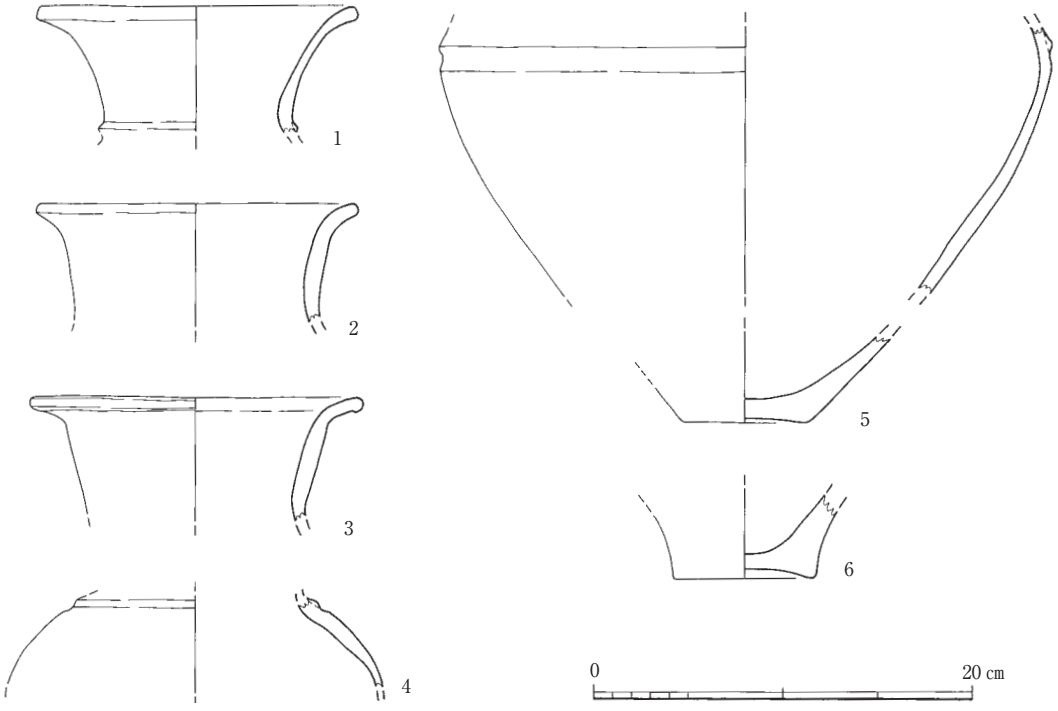
16は小片なので器形がよく判らないが器台であろう。端部は四角く面をなし、直線的に伸びている。器壁は薄い。胎土に石英、長石、角閃石、雲母の細砂を若干含む。端部径17.0cm。

17号土坑（図版26－１、第38図）

第２次調査北側調査区の南側検出した土坑である。16号土坑の北側に接して位置し、18号土坑や４号溝に大きく切られているため本来の形状を留めていないものと思われる。現状では長軸430cm、短軸190cm の不整形を呈す。床面は中央付近が深くなっており、深さは60cm を測る。遺物は床面から20cm 程浮いた状態でかたまって出土した。

出土遺物（第39図）

１～５は壺である。１～３は素口縁となる壺口縁部である。１は端部が面をなし、頸部が締まった器形となる。頸部屈曲部には三角突帯を巡らせる。胎土に石英、長石、雲母の砂粒を若干含む。口径17.0cm。２は頸部が締まらず筒状に立ち上がっており、端部付近が外側に短く開く器形となる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を多く含む。口径17.0cm。３も頸部があまり開かず、口縁部付近が外側に短く開いた器形となる。端部は丸味を帯びる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を多く含む。口径17.6cm。４は肩部片である。丸味を帯びた器形となり、頸部との接合部に三角突帯を巡らせる。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。５は胴下半部である。底部とは接合しないが同一個体である。底部は小さくわずかに上げ底となる。胴下半部は直線的に伸びており、最大径が中位より上に位置する器形となるようである。最大径部分に低い三角突帯を巡らせる。風化が著しく調整不明。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を多く含む。



第39図　17号土坑出土遺物実測図（１／４）

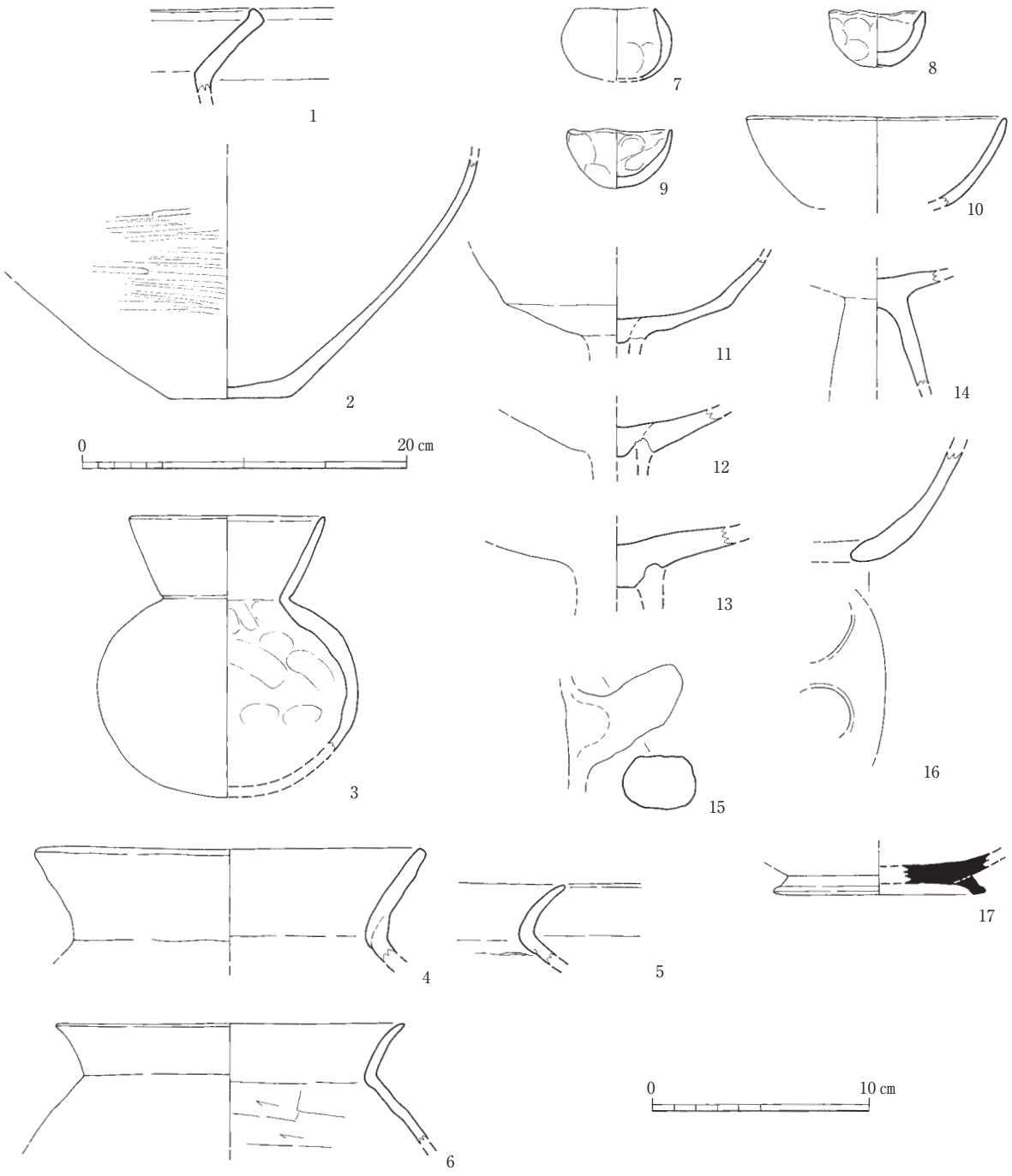
第40図　６号溝実測図（１/60）

底径6.6cm、胴部最大径32.4cm。

６は甕底部片である。底面はわずかに上げ底となる。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。底径7.4cm。

４）古墳時代の遺構と遺物

古墳



第41図　６号溝出土遺物実測図（１/ ３、１･２は１/ ４）

６号溝（図版26－２、第40図）

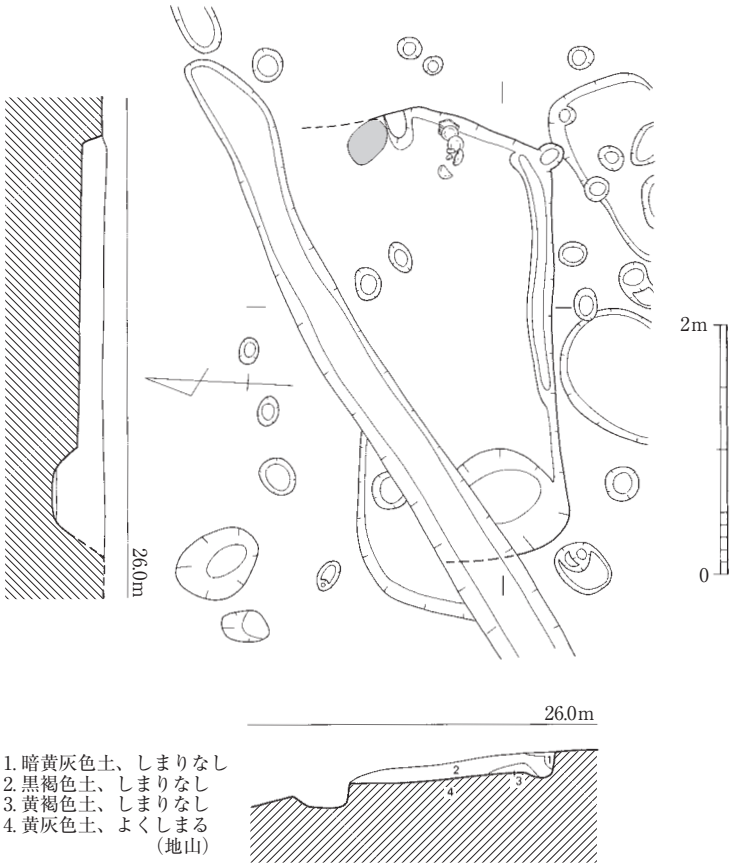
第２次調査南側調査区の南端で検出した遺構である。調査区外へと続いており、現状では弧状を呈し復元すると直径16m 程の円形となる。検出した長さは約12m、幅は最も広いところで２m、狭いところでは65cm を測る。溝の断面は緩やかな弧を描いており、深さは深いところで25cm を測る。覆土は上層に黒褐色土、下層の底面に近いところに暗茶灰色土が堆積する。覆土中からは、底面から10cm前後浮いた状態で土器がまとまって出土した。この溝については規模や形状、遺物の出土状態等から、主体部は検出していないが古墳の周溝と判断される。

出土遺物（図版34、第41図）

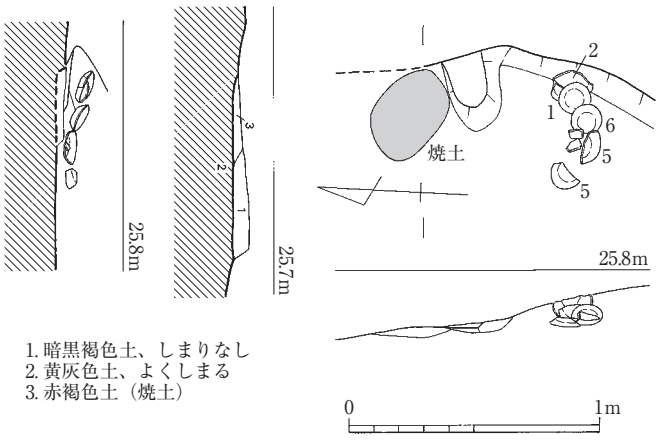
１・２は弥生土器である。混入したものであろう。１は甕の口縁部である。直線的に開いており、端部を上方につまみ上げる。胎土に石英、長石の粗砂を若干含む。２は壺の胴下半部である。器壁が全体的に薄く作られる。外面には横方向のヘラミガキが認められる。胎土に石英、長石の粗砂を若干含む。底径7.8cm。

３～16は土師器である。３は小型の壺である。胴部は球形胴で、頸部はあまり締まらない。口縁部は短く直線的に開く。胴部内面には整形時の指圧痕が明瞭である。胎土に石英、長石の粗砂を少量含むが比較的精良である。口径9.0cm、器高12.9cm、胴部最大径12.0cm。４は広口壺である。口縁部は短く直線的に開き、端部は面をなす。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。口径18.0cm。

５・６は甕である。５は丸く外反した口縁部で、端部付近は



第42図　１号竪穴建物実測図（１/60）



第43図　１号竪穴建物カマド実測図（１/30）

器壁が薄くなる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を若干含む。６も丸く外反した口縁部で、端部付近の器壁が薄い。胴部内面には横方向のヘラケズリが見られる。口径16.0cm。

７～10は鉢である。７～９は指整形の小型鉢で、いわゆるミニチュア土器に属する。７は頸部が内傾しており無頸壺に近い形状となる。口径3.7cm。８は口縁部が直立する。口径4.4cm。９は口縁部が開いた器形となる。口径4.8cm。10は丸味の少ない器形となる。口径12.0cm。風化が著しく調整不明。胎土に石英、長石の粗砂を若干含み精製品ではない。

11～14は高坏である。11は坏下半部である。屈曲部の段は不明瞭である。脚部との接合部には内面からの粘土充填の痕跡が見られる。胎土に石英、長石の粗砂を含むが総じて精良である。12は脚部接合面に施した工具による刺突痕が残る。胎土に石英、長石の粗砂を若干含む。13もやはり接合面の工具刺突痕が見られる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を若干含む。14はわずかに中膨らみの脚部となるようである。胎土に石英、長石の粗砂を若干含む。

15・16は甑である。15は小さめの牛角把手である。胴部との接合部には内面から粘土を充填した痕跡が見られる。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。16は多孔式となる甑底部の破片である。円形の蒸気孔が現状で少なくとも二つあり、孔径は３cm 前後になると思われる。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。

17は須恵器坏の底部片で、混入品である。高台部はやや長めに開いた形状となる。焼成はあまり良くなく黄灰色を呈す。高台径9.8cm。

５）古代の遺構と遺物

竪穴建物

１号竪穴建物（図版26－３、第42図）

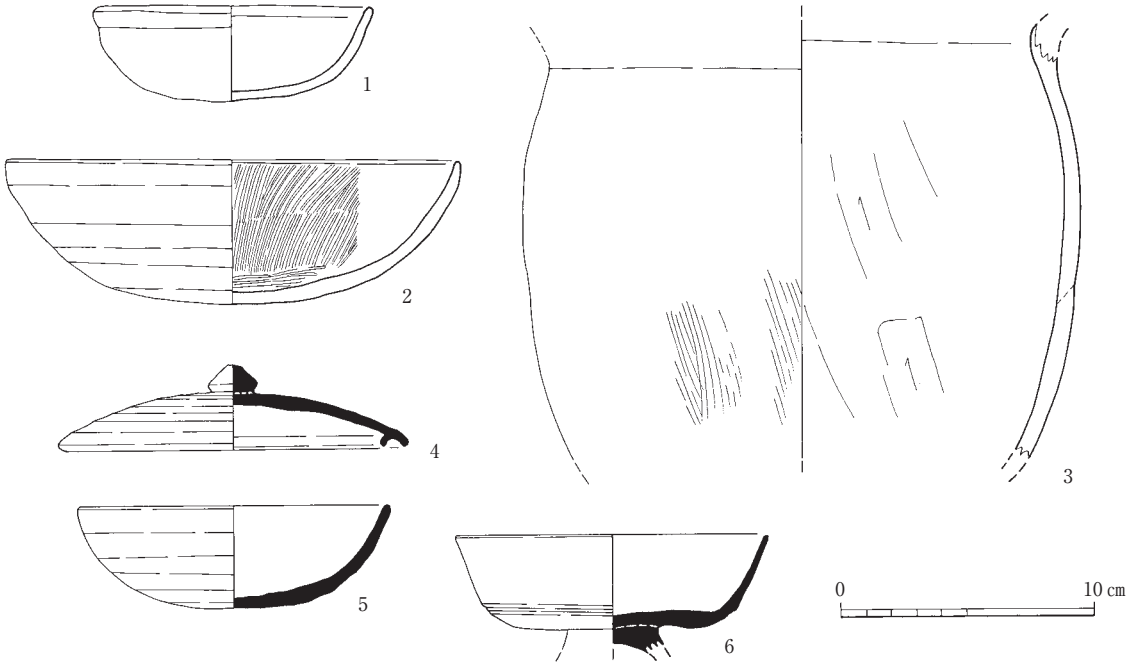
第２次調査北側調査区の北端斜面で検出した遺構である。大きく削平されており、南半部しか残っていない。南側壁の長さは3.1m を測り、おおよそ南北長も同程度の長さになると思われ、方形プランの竪穴建物が推測される。主軸はＮ－85°－Ｅを向く。深さは最も残りの良いところで15cm を測る。南壁際では壁溝が確認された。主柱穴は確認できなかったが南西隅部では直径80cm、深さ20cm のＰ１を検出した。東側の壁際にカマドを付設する。覆土は黒褐色土が多くを占める。遺物はカマド南側から完形に近いものがまとまって出土した。

１号竪穴建物カマド（第43図）

東壁に付設するカマドである。大きく削平を受け、右袖と燃焼部の焼面しか残っていなかった。建物南壁の長さから方形プランの竪穴建物を想定すると、東壁の中央から若干南側に寄った位置に付設されたものと思われる。遺存する右袖は長さ30cm、幅22cm、高さ５cm を測る。焼面の規模は長軸35cm、短軸25cm の規模で確認された。カマド付近の覆土は、焼面上層には赤褐色土、その西側には暗黒褐色土が堆積していた。

出土遺物（図版34、第44図）

１～３は土師器である。１・２は坏である。１は口縁部が外傾し底部は丸底に近い。調整は内外面ともナデによる。胎土には石英、長石の粗砂を多く含む。口径11.0cm。器高3.7cm。２もやはり丸底に近い形状となる。口縁部外面は横ナデ、底部付近は回転ヘラケズリ、内面には細かい放射状ヘラミガキが行われる。口径18.0cm、器高5.7cm。



第44図　１号竪穴建物出土遺物実測図（１／３）

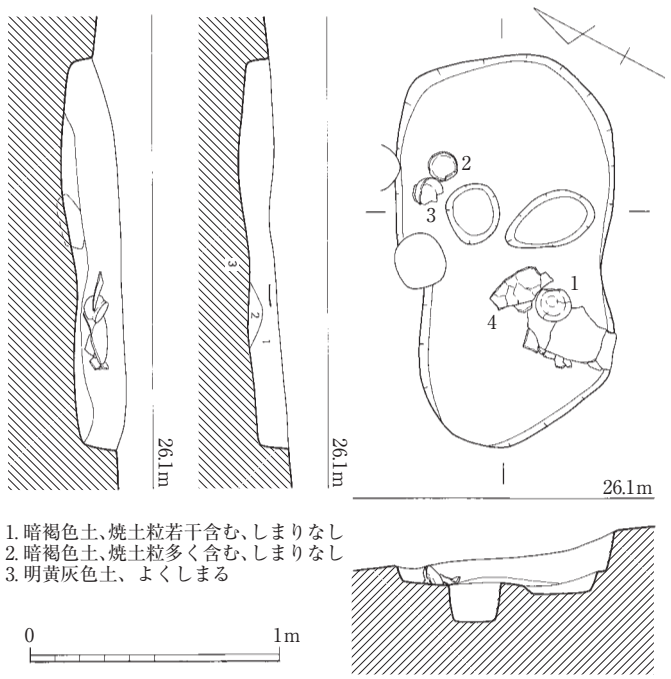
３は甕である。胴部は長胴で頸部が締まらない器形となる。内面には縦方向のヘラケズリ、外面は縦ハケ目が見られる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を含む。

４～６は須恵器である。４は蓋である。天井部には宝珠様のツマミを有し、内面には小さなかえりがある。口径13.8cm、器高3.3cm。５は坏である。丸味を帯びた器形で調整も丁寧である。口径12.4cm、器高4.0cm。６は高坏である。坏部は丸味の少ない器形となる。体部外面には二重の沈線が巡らされる。口径12.1cm。

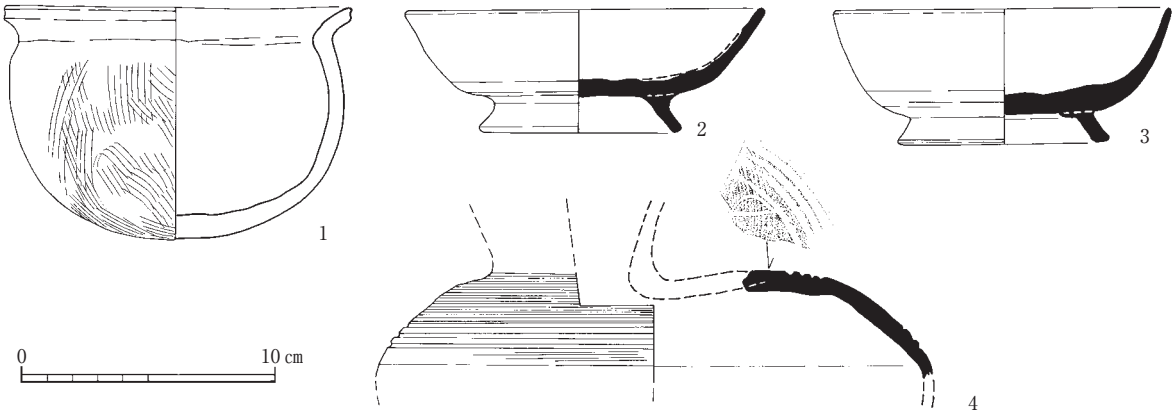
土坑

６号土坑（図版27－１、第45図）

第２次調査北側調査区の北端斜面で検出した遺構である。１号竪穴建物の南東に近接する位置にある。長軸155cm、短軸85cmの長方形に近い形状を呈す。主軸はＮ－62°－Ｅを向く。床面はほぼ水平で、深さは南側で15cm、北側で５cmを測る。床面上では２つのピットを検出した。覆土は大半が焼土を若干含んだ暗褐色土で、床面上の一部では焼土を多く含んだ暗褐



第45図　６号土坑実測図（１/30）



第46図　６号土坑出土遺物実測図（１／３）

色土が検出された。遺物は床面直上で、完形に近いものが数点出土した。

出土遺物（図版34、第46図）

１は土師器鉢である。胴部は球形に近く、頸部はあまり締まらない。口縁部は短く外反しており端部は面をなす。内面および口縁部外面はナデ、胴部外面はハケ目。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を若干含む。口径13.7cm、器高9.2cm。

２～４は須恵器である。２・３は高い高台を有した坏である。２は口縁部が開いた浅い器形となる。口径14.2cm、器高4.9cm。焼成は悪く軟質であり明黄灰色を呈す。３は２と比べると幾分深みのある器形となる。口径13.3cm、器高5.3cm。やはり焼成が悪く軟質であり、暗黄灰色を呈す。４は平瓶の肩部片である。肩部に広くカキ目を巡らせるが、頸部付近と胴部最大径から若干上がった位置に沈線を巡らせている。肩部にはヘラ記号が見られる。

６）中世以降の遺構と遺物

掘立柱建物

大藪遺跡では、方形区画内を中心として多数のピットが検出された。おそらく掘立柱建物を構成するものも含まれると考えるが、ピット密度が高いこともあり、現場においても明瞭に把握することが困難であった。１次調査北端で検出した比較的ピットの規模が大きいものについて、説明を加えることとする。

１号掘立柱建物（第47図）

１次調査区北端で検出したもので、西側は調査区外へ延びる可能性を残すが、１間×２間の建物と捉えた。梁を南北方向に向け、約５度西に振る。梁間2.8m、桁行4.6m を測る。南西隅は25号土坑に切られるため残らない。柱穴は径約70cm を測るが、南側の列は規模が小さくかつ北側に比べて浅いため、建物としては疑問を残す。出土遺物は小片となり実測に耐え得るものはないが、北辺のピットからは糸切り痕を伴う土師器坏底部等が出土しており、中世に位置づけられる。注目すべきは北辺中央のピットから鉄滓６点と、多数の径２cm 程度の不整形焼土塊が小ビニール袋１程度出土している点である（図版38）。同様の焼土塊は４号溝からも出土し、また鞴の羽口等も出土していることから、生産関係の遺跡があったことをうかがわせる

資料であり、この建物もそれに関連する可能性が指摘できる。なお、鉄滓は、調査区南端に近いピットからも１点出土しているが、建物跡に伴うか判断はできない。

土壙墓

５号土壙墓（図版27－２、第48図）

第２次調査北側調査区北端の斜面で検出した遺構である。２号溝と接しており、また後世のピットによって切られていたため遺構確認時には土壙墓と認識せずに掘削を行ったが、遺物の出土状態から土壙墓と判明した次第である。主軸方位をＮ－85°－Ｗにとり、長軸133cm、短軸63cmの不整長方形プランとなる。深さは47cmを測る。西側隅から土師器小皿、瓦器椀、第73図６の鉄刀子がまとまって出土した。

出土遺物（図版35、第49図）

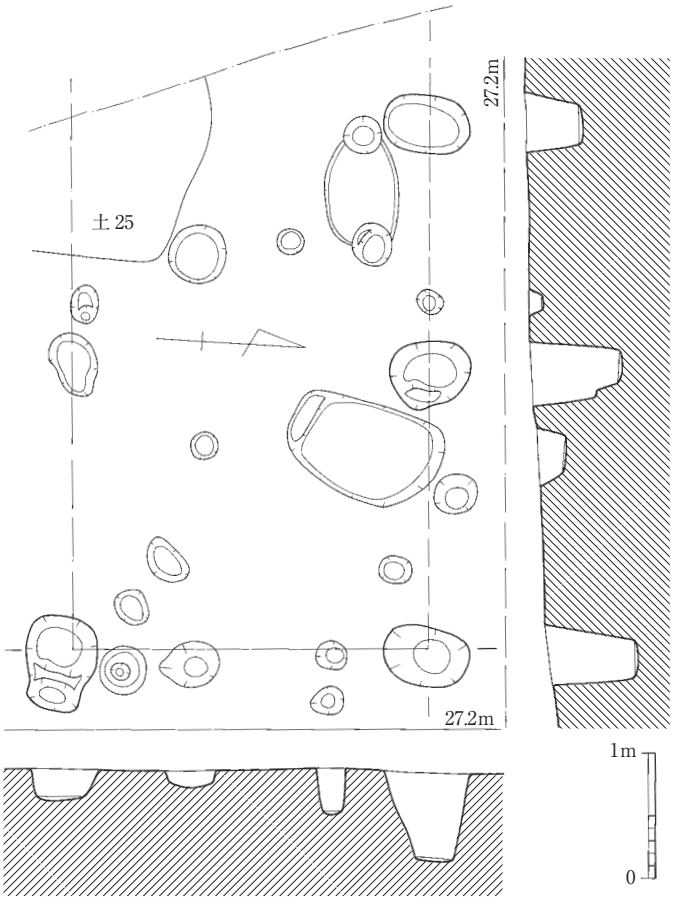
１～５は土師器小皿である。口径8.6cm～9.0cm、器高1.0cm～1.5cm、底径6.2cm～6.8cm。

６・７は瓦器椀である。６は外面にかすかにヘラミガキが見られる。口径15.9cm、器高6.1cm。７は６よりやや深みのある器形となる。内外面に横方向のヘラミガキが見られる。口径16.5cm、器高6.5cm。

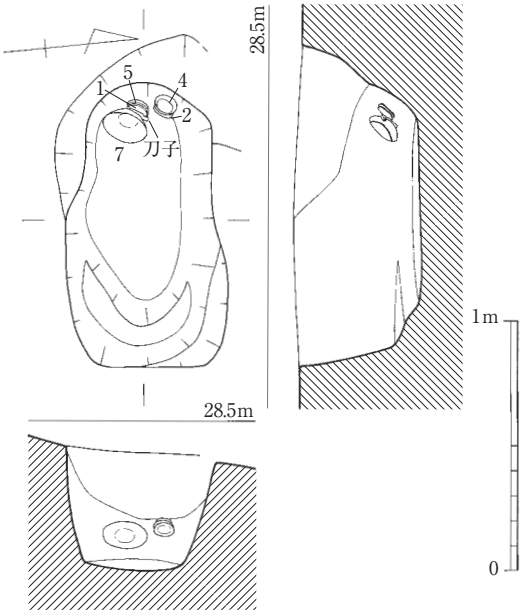
配石墓

１号配石墓（図版27－３、第50図）

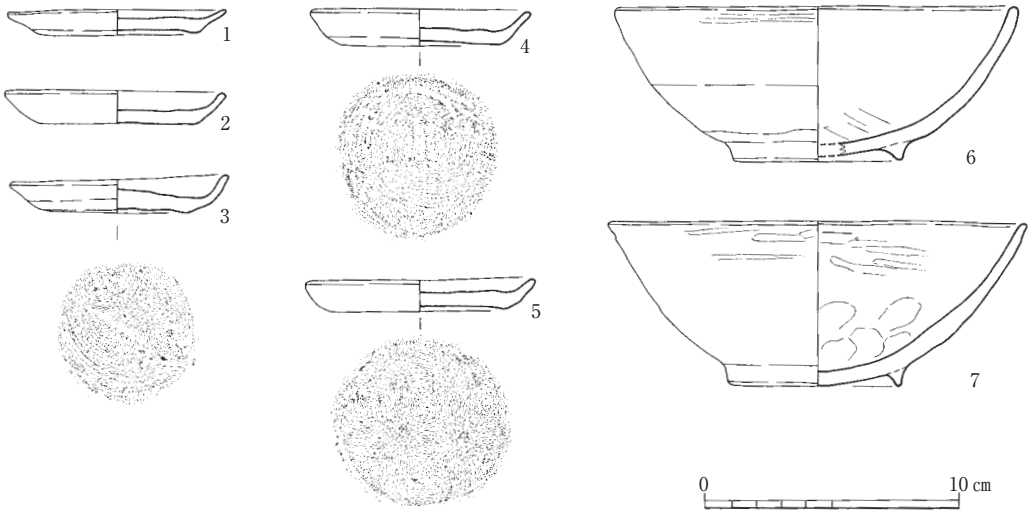
第２次調査北側調査区の中央付近平坦面で検出した遺構である。石を配した遺構であることと、遺構の規模や形状、遺物の出土状態から墓と推察されることから、配石墓として報告する。弥生時代の土壙墓である22号土壙墓を



第47図　１号掘立柱建物実測図（１/60）



第48図　５号土壙墓実測図（１/30）



第49図　５号土壙墓出土遺物実測図（１／３）

切って営まれており、中世の遺構である５号溝に切られる。掘方は主軸方位をＮ－82°－Ｗにとり、長軸305cm、短軸183cm の長方形プランになる。著しい削平のために残りが悪く、中央付近で深さ20cm、東側は10cm 程度である。掘方内部からは扁平な片岩が敷き詰められた状態で検出されたが、西側の一部は小口面を揃えて重ねられている状態のものがあることから本来は石室を構成していたものと思われる。東側の石は完全に失われているが、敷石の下部から検出された浅い窪みの範囲から、石室の規模はおおよそ長軸170cm、短軸100cm 程度であったと推察される。覆土は上層に炭を若干含んだ灰褐色土が堆積するが、中央の配石付近には炭層や焼土層が堆積していることから、火葬していたものと思われる。遺物は削平のためか非常に少なく、北西側の配石上から土師器皿１点、中央付近の配石上から土師器皿４点が出土しただけである。

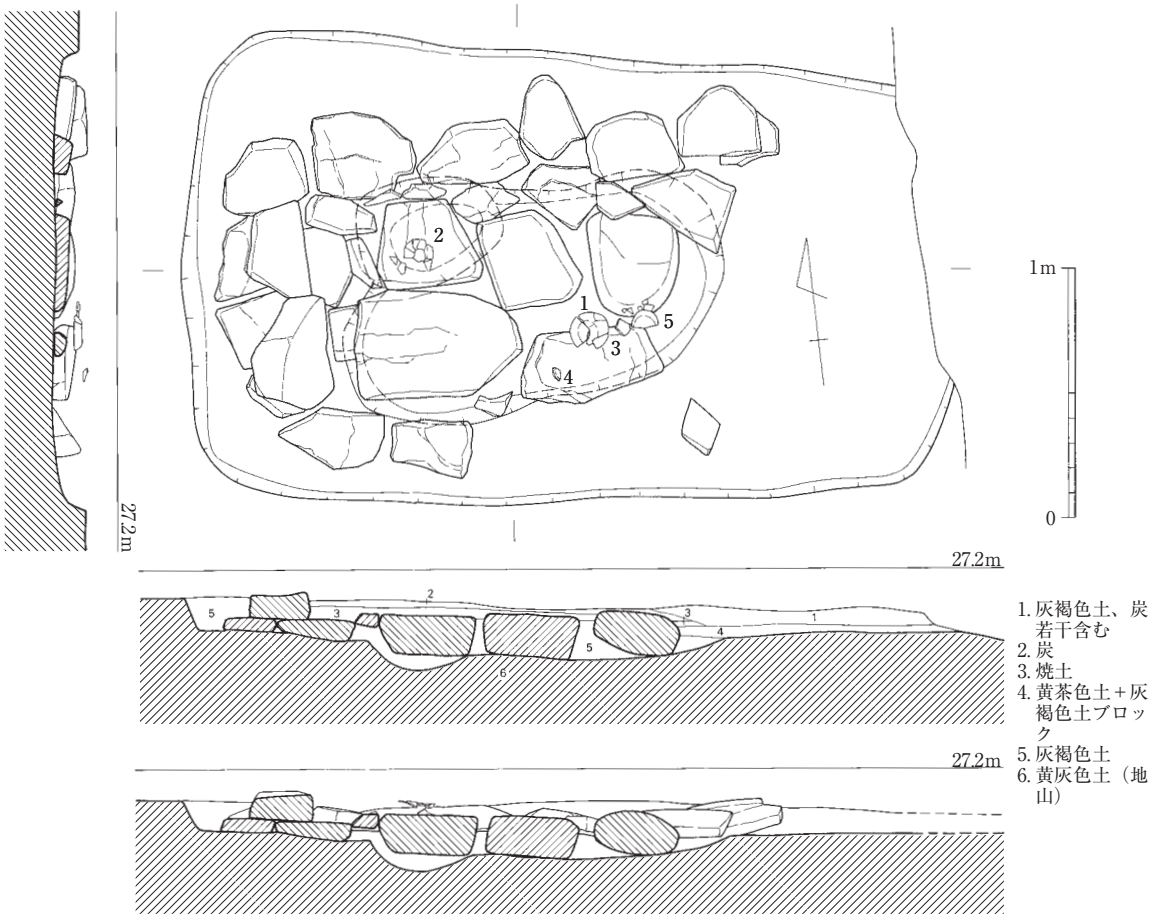
出土遺物（図版35、第51図）

１～５は土師器坏である。１は完形品で丸味を帯びた器形となる。胎土に石英、長石、雲母の微砂を含み精良な粘土を使用する。口径13.5cm、器高3.3cm、底径8.4cm。２は口縁部を欠失するが、13.4cm に復元される。胎土に石英、長石、雲母の微砂を含み精良な粘土を使用する。器高は3.3cm 程度、底径10.7cm。３は石英、長石の粗砂が目立つ。底径8.4cm。４は底径10.0cm に復元される。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用する。５は石英、長石、雲母の微砂を含むが精良な胎土で、底径は8.2cm。６は覆土中から出土した瓦器椀の口縁部片である。

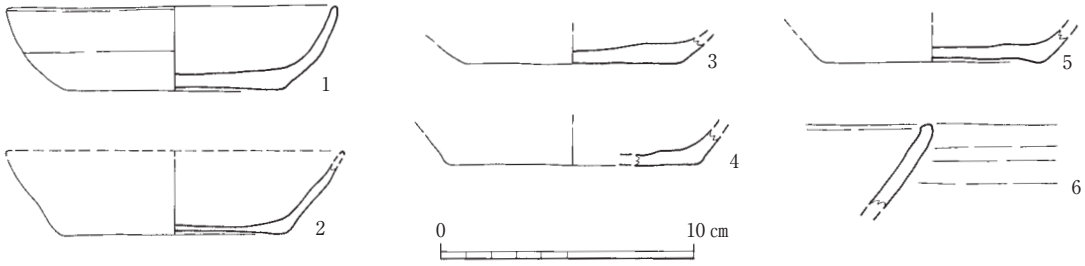
土坑

９号土坑（図版28－１、第52図）

第２次調査北側調査区の中央付近で検出した遺構である。４号溝と接しており、４号溝コーナー部内側に位置する。遺構確認時には切り合いによる先後関係は認められず、また土坑の位置や形状から４号溝と同時期に形成されたものと思われる。形状は長軸320cm、短軸270cm の円形に近い楕円形プランであり、東側の一部が４号溝に向けて溝状に伸びた形状となる。壁の



第50図　１号配石墓実測図（１/30）

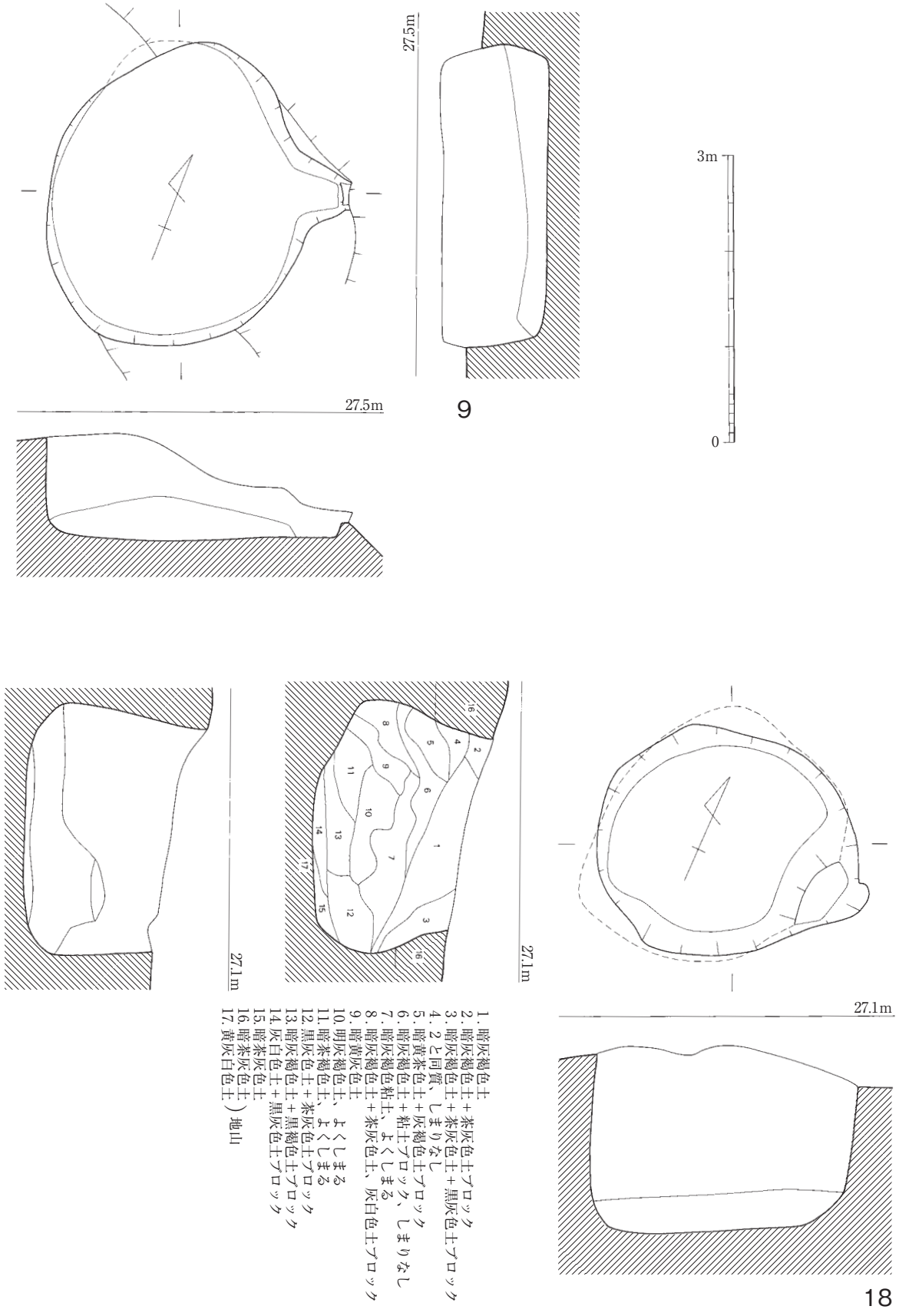


第51図　１号配石墓出土遺物実測図（１/３）

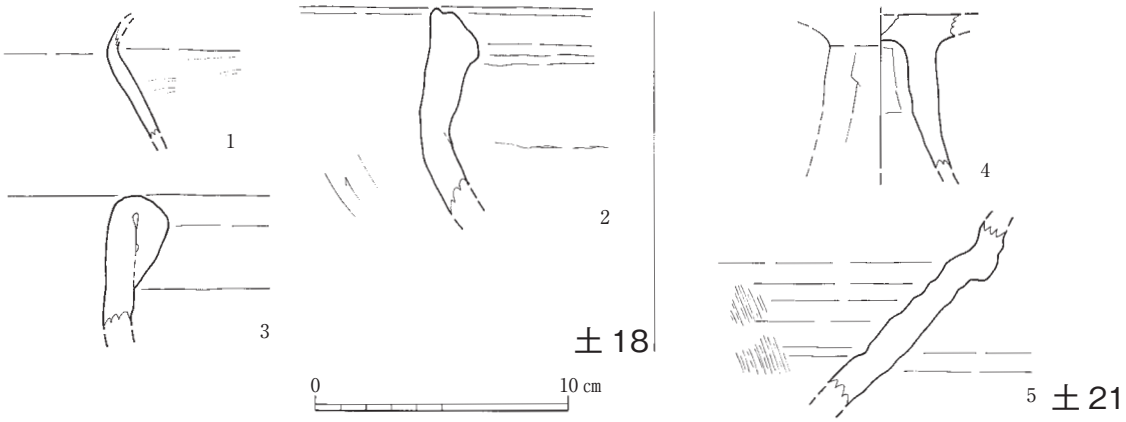
立ち上がりは垂直に近く、一部オーバーハングする。底面はほぼ水平で、深さは110cm を測る。遺物は出土していない。

18号土坑（図版28－２、第52図）

第２次調査北側調査区の中央付近で検出した遺構である。弥生時代の土坑である17号土坑を切って形成され、４号溝からは切られているために上部を削平される。平面形は長軸270cm、短軸240cm の円形に近い楕円形プランとなる。壁の立ち上がりはほぼ全面オーバーハングしており、フラスコ状の断面となる。東側の一部にはテラス状の段が認められる。床面はほぼ平



第52図　9・18号土坑実測図（1/60）



第53図　18･21号土坑出土遺物実測図（１／３）

坦であり、床面までの深さは185cm、テラス部までの深さは100cm を測る。覆土の土層は周囲からの崩落や土砂の流入によって自然に堆積したと思われる様相を示している。
出土遺物には土器の他に第73図３の硯がある。

出土遺物（第53図）

１は土師器の甕であろう。風化が著しく調整はほとんど判らないが、外面にハケ目らしき横方向の筋が見える。胎土に石英、長石の粗砂を多く含み暗黄灰色を呈す。

２は土師質の甕である。頸部は直立し、端部が三角形に肥厚する。調整は頸部より上はナデで、内面の頸部下には縦方向のヘラケズリが見られる。胎土に石英、長石の細砂を若干含み黄灰色に焼成される。

３は備前焼の甕口縁部である。頸部は直立し、端部を外側に折り返して玉縁状に肥厚させる。調整は全面横ナデ。

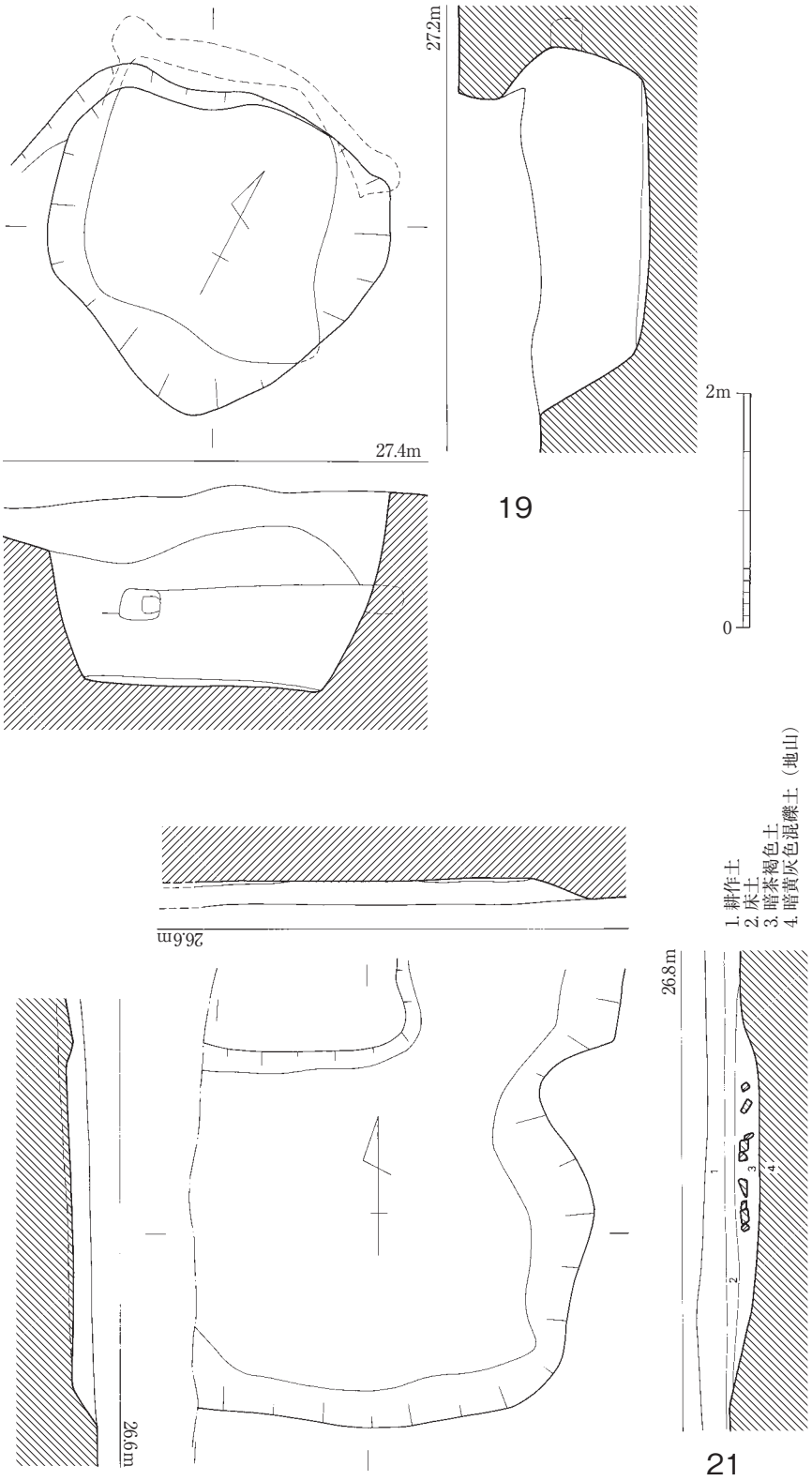
19号土坑（図版28－３、第54図）

第２次調査北側調査区中央付近で検出した遺構である。５号溝と重複しており、これに切られるために上部を大きく削平されている。平面形は長軸290cm、短軸275cm の円形に近い不整楕円形プランとなる。壁は急な立ち上がりとなり、特に北側の壁は大きく奥に入り込んでいる。床面からの高さが80cm のところにその稜線があり、稜線上の北西側と北東側の二箇所に、一辺40cm、深さ30cm 程度の方形に近いピット状の横穴が掘られている。床面はほぼ平坦であるが、上方のプランと形状が異なり、一辺200cm 程の方形に近いプランとなる。深さは160cm を測る。出土遺物は、土器はほとんど出土しなかったが第73図４の五輪塔水輪が出土した。

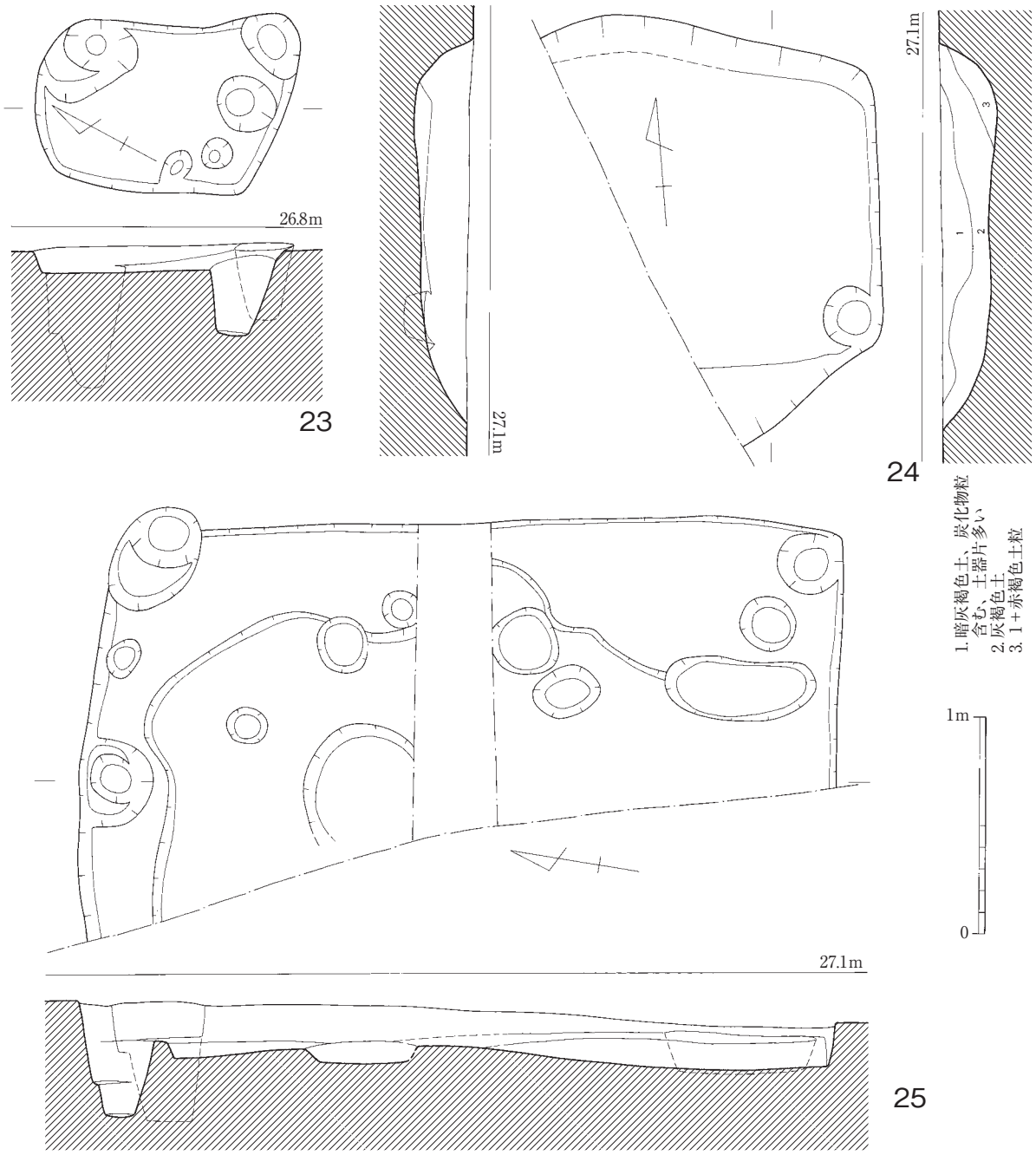
21号土坑（図版29－１、第54図）

第２次調査南側調査区の北西端で検出した遺構である。西側が調査区外へと続いており、また北東側が開いて近現代の撹乱溝へと接続する形状となる。検出した範囲では、一辺3.3m の方形プランとなる。床面はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは緩やかである。深さは25cm。覆土は暗茶褐色土が堆積しており、層中には礫が多数含まれていた。出土遺物は少ない。

出土遺物（第53図）



第54図　19・21号土坑実測図（1/60）



第55図　23～25号土坑実測図（1/60）

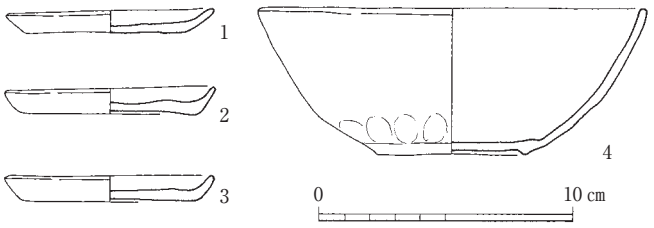
1は土師器高坏の脚柱部片である。外面には鈍いヘラナデ状の稜線が見られる。胎土に石英、長石を若干含み精良な粘土を使用する。

2は備前焼擂鉢である。口縁部は不明瞭に屈曲して段を形成している。

23号土坑（図版29－2、第55図）

1次調査区のピットが最も集中する地区の中に位置する。やや不整形な台形土坑で、南北の

長軸で1.1m、東西で0.8m を測る。検出面からの深さは約10cm で、底面は水平となる。５基のピットが土坑内に存在するが、配置はランダムであり土坑に伴うかどうかは判断できない。ピットはいずれも深く、30～50cm の深さがある。土坑北東隅にて土師器皿・瓦器椀がまとまった形で検出された。



第56図　23号土坑出土遺物実測図（１/ ３）

出土土器（図版35、第56図）

１～３は土師器皿。いずれもほぼ完形に復元されるもので、口径は8.2cm を測り、同規格といえる。底面には糸切り痕を残すものがあるが、摩滅して観察しがたい。４は瓦器椀。器高5.8cm で深く、丸みを帯びたずんぐりした形状。ごく低い高台を伴う。使用に伴うとみられる摩滅が著しい。

24号土坑（図版29－３、第55図）

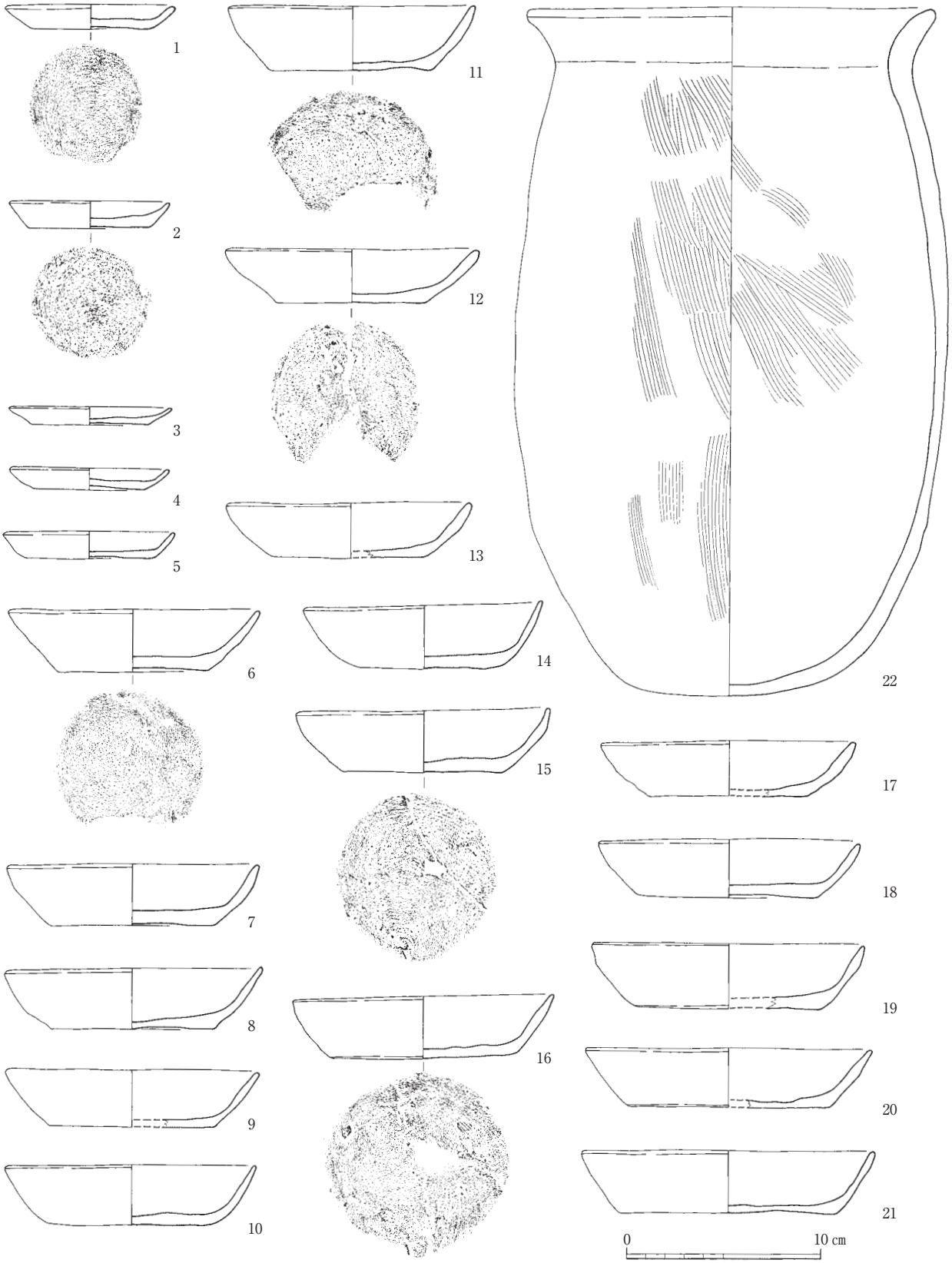
１次調査区の北西部で検出されたもの。西側は調査区外へ続く。方形の土坑で、南北3.2m を測り、東西は調査区内で1.9m を測る。深さは約20cm を測るが、周縁は20～50cm の幅で不整形に一段高くなる。底面は若干のアップダウンはあるが、ほぼ水平である。埋土は上層約2/3が暗灰褐色土で、下層は地山よりやや濁った色調の暗赤褐色土。ピットが複数切り込むが、埋土は上層の暗灰褐色土と判別ができにくい色調である。北側にあるピットは深さ約50cm と深いが、他は10cm 前後で浅い。出土遺物は、上層暗灰褐色土から中ビニル袋２程度出土している。土師器・瓦器の小片が多く、中世の土師器皿とみられるものを含む。土師器甑が出土しており、遺構の形状的にも竪穴建物の可能性を残すが、埋土は他の中世遺構と変わらないことや、小片とはいえ中世の遺物が含まれることから、中世の遺構として扱った。

25号土坑（図版30－１、第55図）

24号土坑の北側に近接して位置する土坑。西側は調査区外へ続く。東辺は南北に直線的にのびるが、全体的には台形に近い不整形となる。深さは20cm 強を測り、底面はほぼ水平である。壁面は東側は急な立ち上りをなすが、北及び南辺は比較的ゆるやかで、底面角も丸みをもつ。埋土は灰褐色土が基本であり、上層には炭化物を含む。土師器皿・坏を多量に含んでおり、部分的にはぎっしり土師器が詰まった状況を呈している。遺物量はパンケース１箱に及ぶ。

出土遺物（図版35･36、第57図）

１～６は土師器皿。いずれも口径約8.2cm を測り、同規格とみてよい。焼成が甘く、摩滅が進むが、１・２は底面に糸切り痕が観察される。６～21は土師器坏。口径は約13.0cm を測るものが大半を占めるが、19～21は14cm を超え、21の口径は15.0cm を測る。体部はわずかに内湾して立ち上がるものが多い。底面は糸切り痕を残すが、焼成が甘いために摩滅して観察しがたい。22は土師器甕。長胴で、器高35.3cm を測る。口縁部は厚みを有し、シンプルに外反する形態で、口径21cm を測る。胴部は内外面ともにハケメ調整であるが、煮炊きによるとみら



第57図　25号土坑出土遺物実測図（１／３）

れる摩滅がみられ、外面下半にはススの付着がみられる。底部は平底に近い丸底。

溝

１号溝（第58図）

第２次調査北側調査区の北斜面上で検出した溝である。先後関係では１号竪穴建物、７号土坑を切り、２号溝に切られる。11.5m の長さでほぼ直線的に伸びており、主軸方位はＮ－57°－Ｅをとる。幅50cm、深さは15cm 程度で、断面は逆台形を呈す。壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。覆土は上層に黒褐色土、下層に黄灰色土ブロックを含んだ暗茶褐色土が堆積する。

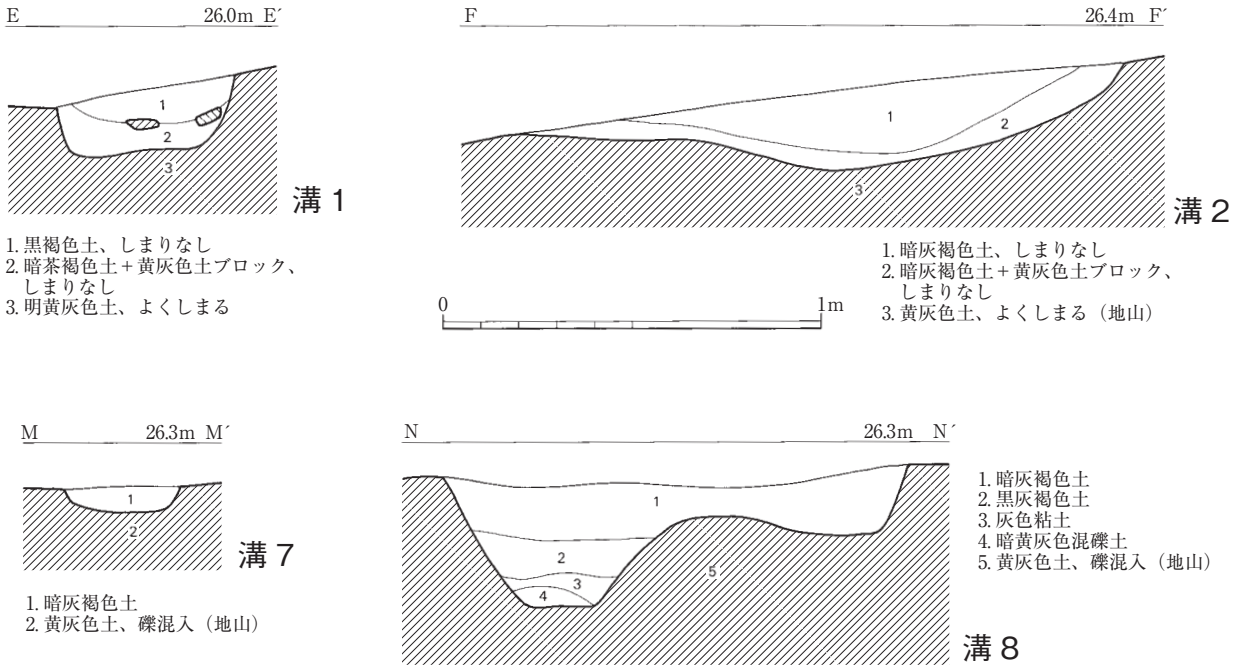
2号溝（第58図）

第２次調査北側調査区の北斜面上で検出した遺構である。１号溝とわずかに重複しており、先後関係ではこれを切って営まれる。地形の等高線に沿って長さ12m ほど直線的に伸びており、東端は直角に北方に折れて２m ほど伸びるが、その先端部は削平により失われている。幅は170cm、深さは20cm を測る。壁の立ち上がりは緩やかで、側面と底面の境も明瞭ではない。覆土は上層に暗灰褐色土、下層に黄灰色土ブロックを含んだ暗灰褐色土が堆積する。

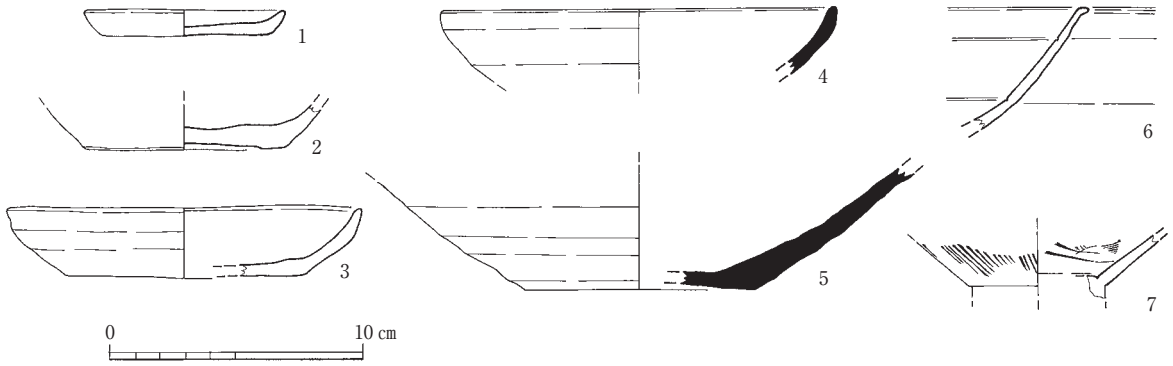
出土遺物（第59図）

１～３は土師器である。１は土師器小皿である。石英、長石、雲母の細砂を多く含む。口径8.0cm、器高1.0cm、底径6.6cm。２・３は坏である。２は底径8.0cm。石英、長石、雲母を若干含む。３は口径14.0cm、器高2.7cm、底径9.4cm。胎土に石英、長石、雲母の微砂が多い。

４は須恵器坏である。口縁端部が上方へと立ち上がった器形となる。口径15.6cm。混入品。



第58図　１・２・７・８号溝断面土層図（１/20）



第59図　２号溝出土遺物実測図（１／３）

５は須恵質の鉢である。底部は糸切りでわずかに上げ底となる。体部は大きく開く。全体的に器壁が薄く作られる。胎土に砂粒をほとんど含まない。底径9.0cm。

６は白磁碗の口縁部片である。端部が小さく外側に折れ、内面の口縁部下と見込み部境に一条ずつ沈線が巡る。外面下方は露胎となる。７は内外面に櫛目文様のある同安窯系青磁碗である。

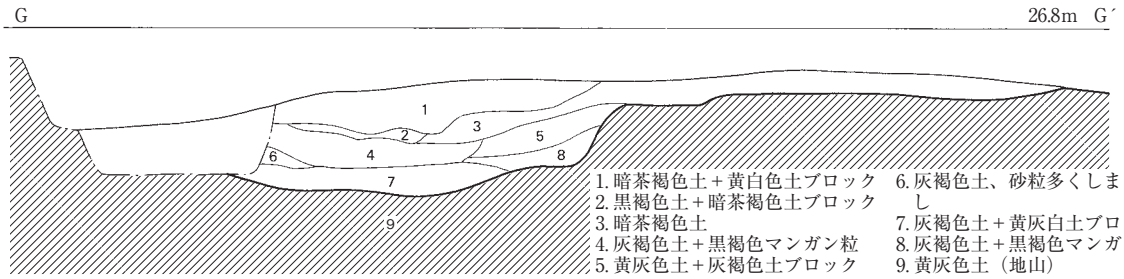
４号溝（図版30－２・３、31－１・２、第60･61図）

第１次調査区に沿う形で南北に伸び、第２次調査北側調査区に至る形で検出した溝である。重複関係では、弥生時代の土坑である16・17号土坑および18号土坑を切って営まれており、また19号土坑とは先述の理由から同時併存と思われる。長さ17m に及ぶ東西溝と、長さ70m に及ぶ南北溝からなる。両者は約100°の角度で鈍角に接続しており、その内側に方形区画の空間を形成している。

東西溝の西側は調査区外へと続いている。地形の等高線に沿って直線的に伸びており、主軸方位はＮ－88°－Ｅを向く。Ｈ－Ｈ'の断面土層図を見ると、幅360cm、深さ70cm を測り、溝の南壁には不明瞭なテラス状の段が見られる。壁の立ち上がりは両側面とも緩やかで、断面は逆台形に近い形状となる。底面はほぼ水平な面を形成し、幅は100cm。覆土は上層に暗灰褐色土、中層には黄灰色土ブロックが混ざった暗灰褐色土、下層に黄灰褐色土が堆積する。

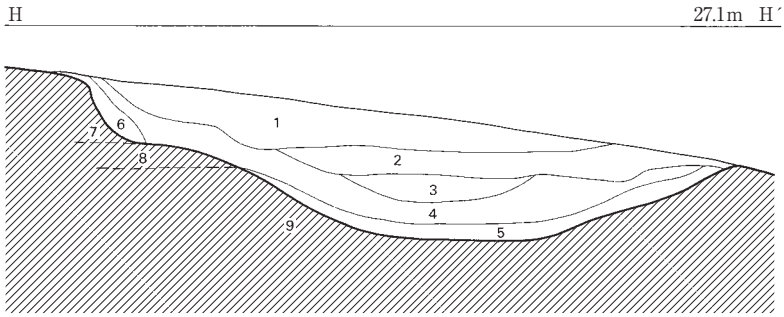
南北溝は総延長75m を測るもので、主軸方位をＮ－8°－Ｗにとってほぼ直線的に伸びる。Ｉ－Ｉ'の断面土層図を見ると、この付近は西側が若干不整形になるので明確ではないが、幅470cm、深さ95cm を測る。壁の立ち上がりは両側面とも緩やかで、特に西側面の傾斜が緩やかである。断面は逆台形に近く、底面はほぼ水平な面を形成し、幅は150cm を測る。覆土は最上層に近現代の客土が見られ、近年まで溝の形状が残っていた事を示す。第２層は暗灰褐色土層であり、溝として再掘削していた事が判る。第３層明灰褐色土層は第４層黄灰色土ブロックを含んだ暗黄灰褐色土層を切っている。第３層の下層にある第12層茶灰色土は、地山掘削土が時を経ずして流入したものと思われる。第５・６層は第７層灰褐色土層を切っている。最下層には第８層明灰褐色土層が堆積する。この第８層と第13層黄灰白色土層との差は明瞭であり、第13層は非常に固く締まった層である。

第１次調査区での断面Ｏ－Ｏ'では東西に並行して新旧の溝が存在するように観察される。



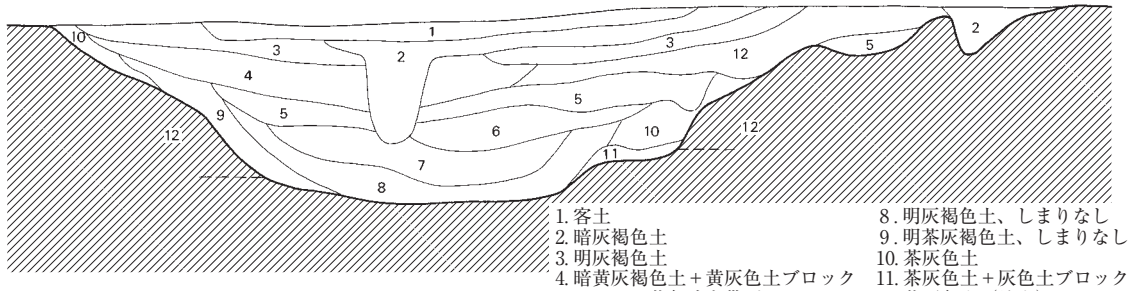
1. 暗茶褐色土＋黄白色土ブロック
2. 黒褐色土＋暗茶褐色土ブロック
3. 暗茶褐色土
4. 灰褐色土＋黒褐色マンガン粒
5. 黄灰色土＋灰褐色土ブロック
6. 灰褐色土、砂粒多くしまりなし
7. 灰褐色土＋黄灰白土ブロック
8. 灰褐色土＋黒褐色マンガン粒
9. 黄灰色土（地山）

溝３



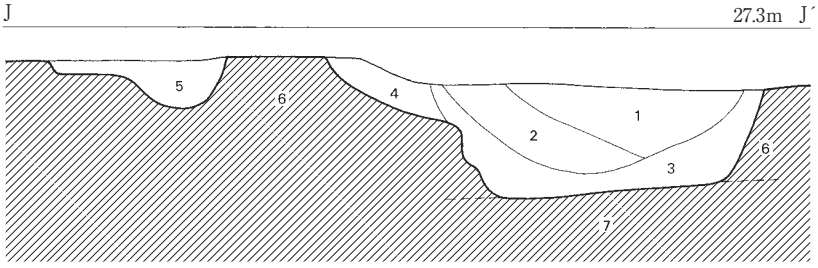
1. 暗灰褐色土、しまりなし
2. 暗灰褐色土＋黄灰褐色土ブロック
3. 2よりブロック多い
4. 2よりやや暗い
5. 黄灰褐色土
6. 暗黄褐色土
7. 黄灰色土
8. 花崗岩風化礫層 ）地山
9. 暗黄灰色粘土 ）

溝４東西



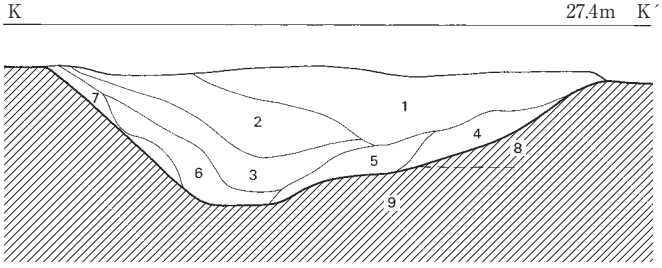
1. 客土
2. 暗灰褐色土
3. 明灰褐色土
4. 暗黄灰褐色土＋黄灰色土ブロック
5. 2にやや茶色味を帯びる
6. 茶灰褐色土
7. 灰褐色土、しまりなし
8. 明灰褐色土、しまりなし
9. 明茶灰褐色土、しまりなし
10. 茶灰色土
11. 茶灰色土＋灰色土ブロック
12. 茶灰色土（地山）
13. 黄灰白土（地山）

溝４南北



1. 茶灰色土＋灰色土ブロック
2. 灰色土＋茶灰色土ブロック
3. 灰色土
4. 薄灰色土
5. 黒灰色土（近世）
6. 黄茶色土
7. 花崗岩風化礫大

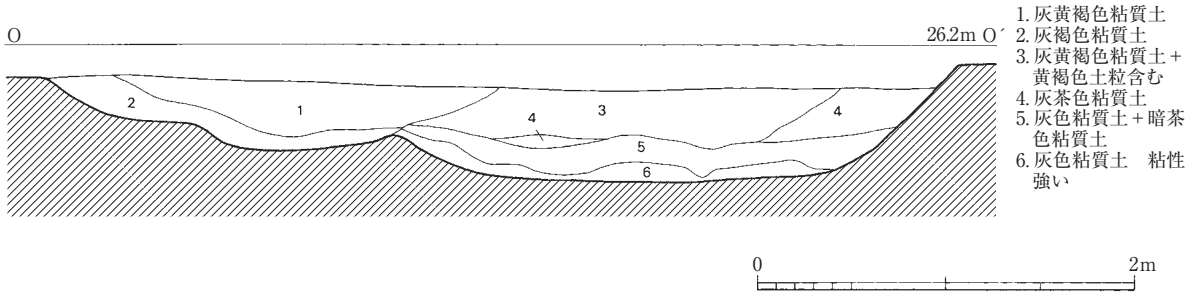
溝５南北



1. 暗灰褐色土
2. 茶灰色土＋暗灰褐色土ブロック
3. 暗灰褐色土、しまりなし、茶灰色土ブロックわずかに含む
4. 暗灰褐色土＋茶灰色土、黄灰色土ブロック
5. 暗灰褐色土、しまりなし
6. 暗茶灰色土
7. 茶灰色土
8. 茶灰色土（地山）
9. 黄灰色土、よくしまる

溝５東西

第60図　３～５号溝断面土層図（１/40）



第61図　４号溝断面土層図（１/40）

両溝ともに上層は灰黄褐色土であり、黄褐色土粒が混入するかどうかの判別が困難な状況を呈していたため、遺構検出面における平面確認はできていない。東側の新しく位置づけられる溝は検出面での幅2.4m を測る。検出面からの深さは40cm であり、西側の溝よりも若干浅い。底面は約80cm 幅でほぼ水平である。壁の立ち上りは緩やかで、東側は中段に幅40cm 程度のテラスをもつ。埋土は単調で、上層に灰黄褐色粘質土・下層に灰褐色粘質土となる。西側の溝は深さ50cm。底面は約1.7m 幅で水平である。壁の立ち上りは東側は緩やかであるが、西側は急傾斜となる。埋土は上層は西側に類する灰黄褐色粘質土で、下層は灰色粘質土を基本とし締まりが強い。最下層は粘性の強い灰色粘質土である。この２条が併走する状況は南端から後述する東西溝の９号溝までである。９号溝との交点で精査を行い得なかったが、９号溝から派生して南へ溝を構築した可能性も考えられよう。

９号溝以北では、幅約４m となり、東側にテラスを有する断面形状となる。１次調査区北端付近で、西側へ屈曲する様相をみせたが、調査時はここで地形に沿って東西溝となるものと想定したが、２次調査の結果、ここを基点に５号溝が派生すると判断されることとなった。

出土遺物には土器、陶磁器の他に第73図の土製品や磨製石斧、鉈鎌がある。また図版38に示すような炭化物塊や焼土塊、鉄滓がある。鞴の羽口の出土と併せて考えると、区画内に鍛冶遺構が存在したことが窺われる。

出土遺物（図版36・37、第62～65図）

第62～64図は第１次調査の出土遺物。１・２は土師器皿。１は口径7.8cm、２は口径9.2cm を測るもので、ともに底面は糸切り痕・板圧痕を残す。３～14は土師器坏。３～５は口径11.6cm で揃う。３は厚みがあり、丸みをもつのが特徴的。細かい砂粒を多く含み比較的硬質に焼成される。４は深い体部で、器高3.5cm を測る。６・７・９･12は比較的小径の底部から直線的にハ字形に広がる体部となるもの。薄手のつくりで軽いものが多い。13･14は口径14.4cm を測るもの。体部は内湾気味に立ち上がる。15は土師器椀。小振りで深く、口径11.2cm を測る。

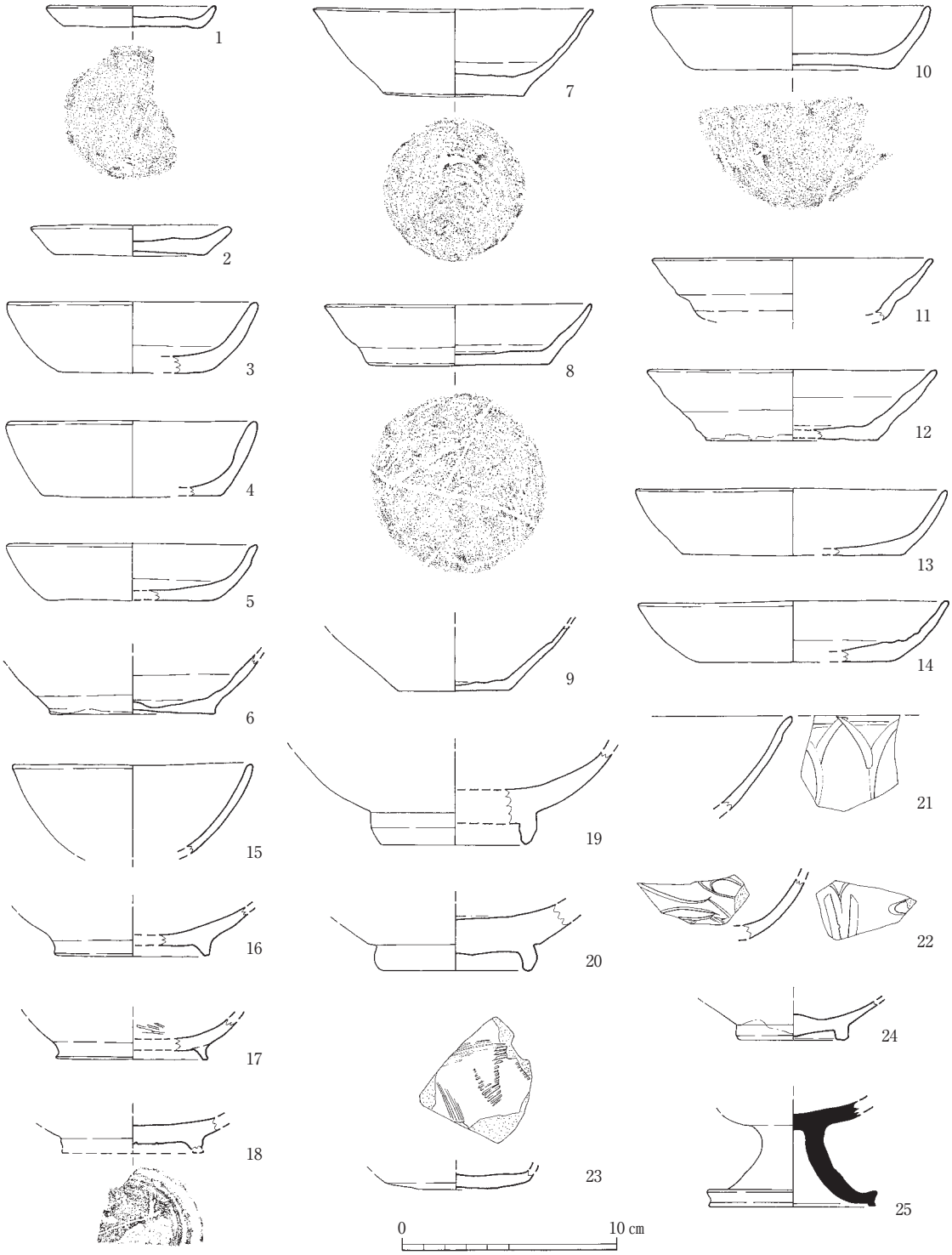
16～18は瓦器椀の底部。細身であるが約５㎜の高さの高台を有する。18は高台内に傷状のヘラ記号を有する。

19～23は青磁。ただし20は釉調は白緑色を呈するが、胎土は褐色が強く、陶器に分類されるべきか。19は碗の底部。釉は厚く掛けられるが、発色が悪くくすんだ緑灰色を呈する。21は蓮弁文を立体感なく表現する碗。釉は透明感があり、黄茶褐色を呈する。22は内外面に草花文を描く碗の小片。23は皿の底部で、内面に櫛描文を描く。底面には重ね焼きによる傷が観察される。

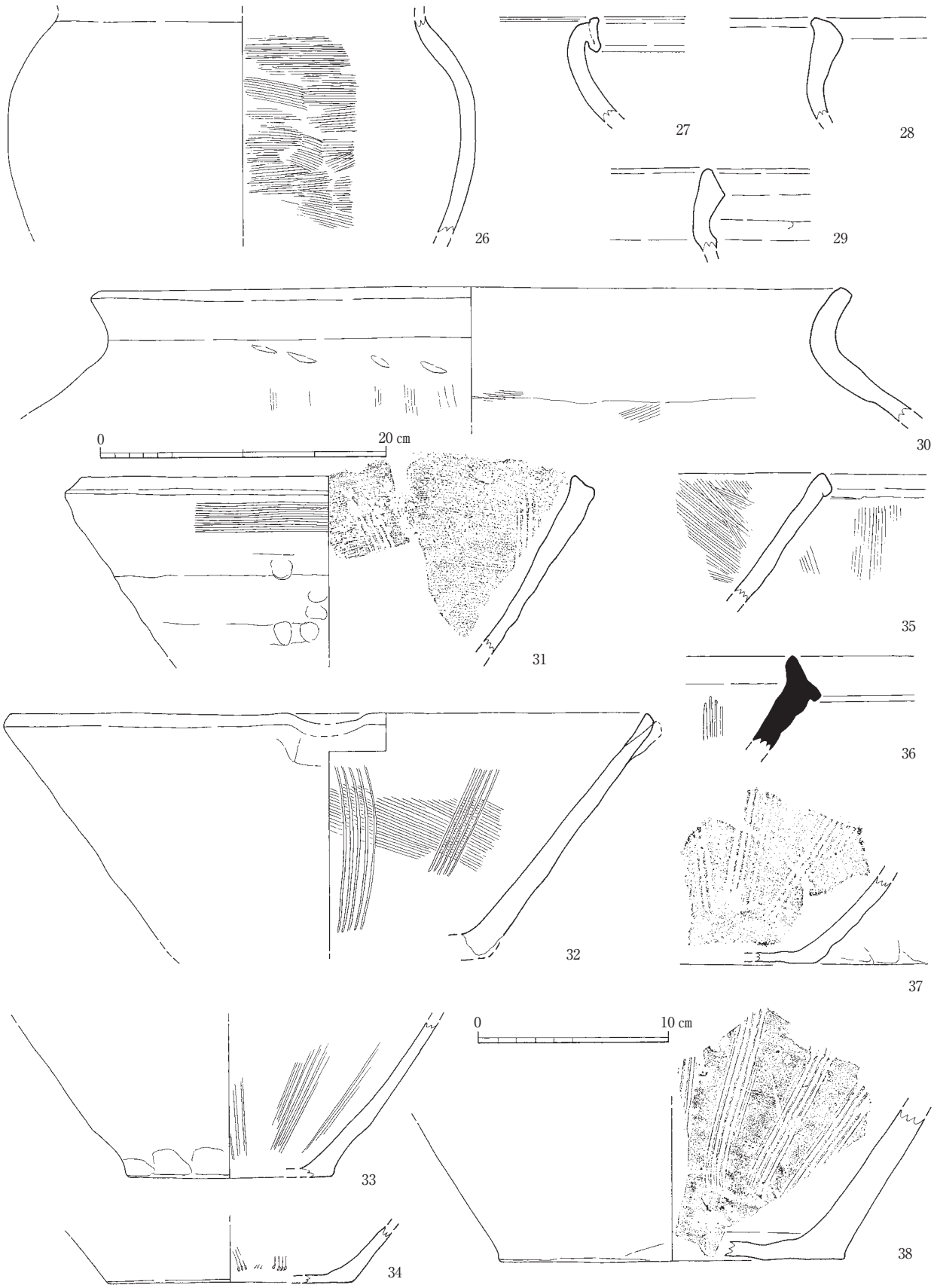
24は白磁碗。釉調はやや灰味を帯びる白色。高台は内外面ともに露胎。

25は須恵器高坏の脚部。短脚で、ラッパ状に大きく開き、端部は下方へ短く屈曲させる。古墳時代の所産であり、混入品と判断される。

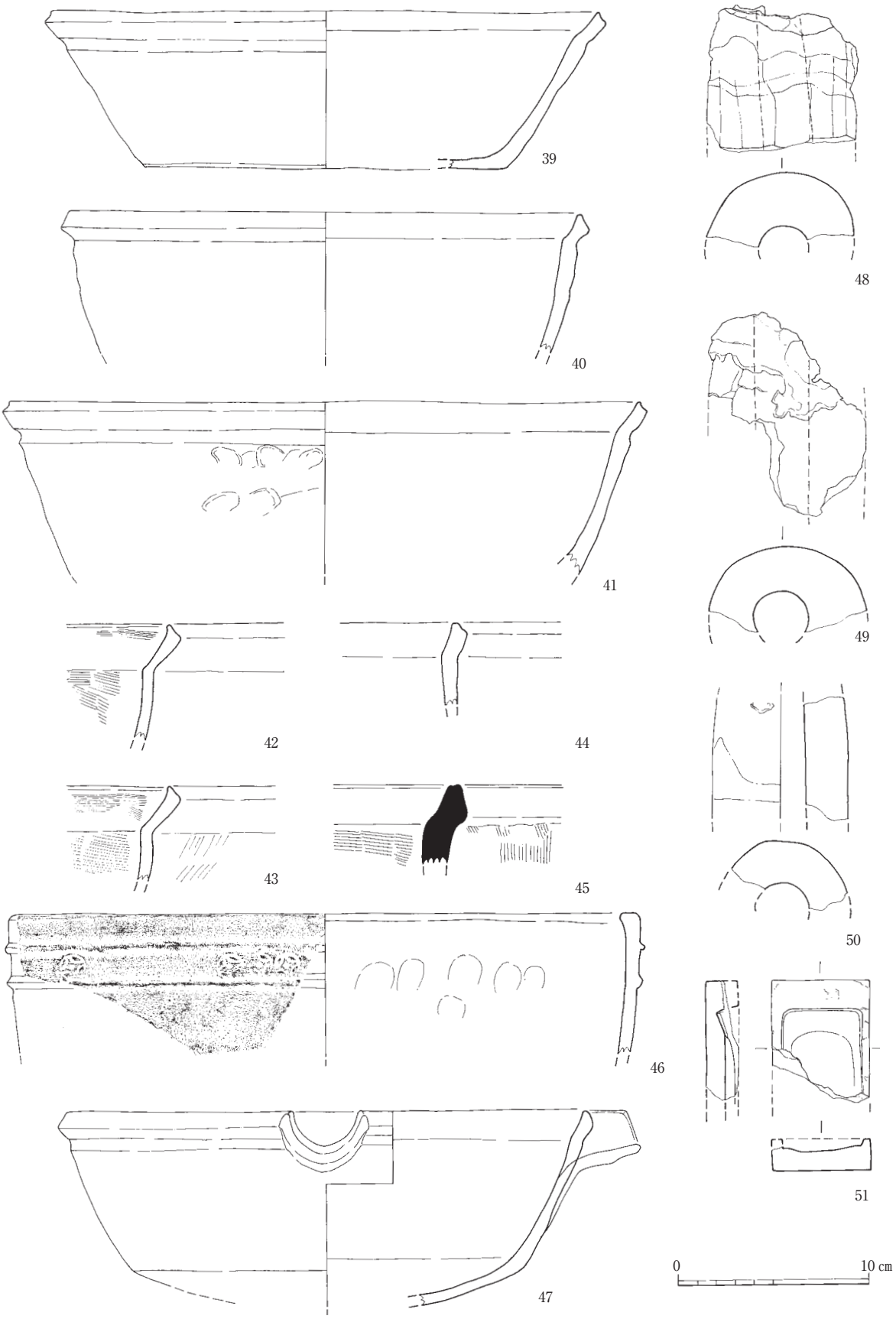
26は瓦質の壺の胴部で緩やかなナデ肩をなす。27～30は大形の甕の口縁部。27は常滑焼の口



第62図　４号溝出土遺物実測図①（１／３）



第63図　４号溝出土遺物実測図②（１／３、27～30は１／４）



第64図　４号溝出土遺物実測図③（１／３）

縁部で、二段に折り込むように成形する口縁部で、硬質に焼成され、外面肩部に自然釉がかかる。28は土師質で、焼成はやや甘い。断面は三角形に肥厚させ、端部内面は短く突出させる。29は瓦質で、断面三角形に肥厚させる。

31～38は擂鉢。瓦質が多いが、36･38は硬質で須恵質を呈する。瓦質の口縁部はシンプルに四角く収める。摺目は５本で一単位とし、刷目間は広い。焼成は甘いものが多く、摩滅が進む。33の内面は使用により摺目が減ったものとみられる。

39～45は鉢。直線的に開く体部に軽く屈曲させる口縁部が伴う。屈曲部内面は稜をなし、口縁部内面はわずかに匙状に窪ませる。39･41～43は土師質で軟質。40･44は瓦質で硬質。いずれも外面は煮炊きによるとみられる黒色への変色がみられる。45は須恵質で器壁が厚く、甕等の別器種となろうか。46は火鉢・直立する口縁部で、口縁端部は内側に肥厚させる。口縁部外面に二条の突帯を巡らせ、間に円形のスタンプ文を施す。

47は瓦質の片口。口縁部は軽く屈曲させ、内面は断面匙状とする。煮炊きにより器壁は荒れ、摩滅・剥離する。

48～50は鞴の羽口。いずれも通風孔部は径約2.8cm を測る。48･49は先端部を溶損する。

51は砂岩製の硯で、使用により中央部は大きく窪む。近世の撹乱からの混入品か。

第65図は第２次調査の出土遺物。１～５は弥生土器である。１は壺の口縁部である。頸部が大きく開き、口縁部は更に屈折して開く器形となる。口縁端部は沈線状に窪ませている。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を若干含む。２～５は甕である。２は緩やかに口縁部が外反し、端部は面をなす。口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。口径35.7cm。３は復元口径36.2cm を測るが、器形や胎土、色調から２と同一個体になると思われる。４は口縁部が短く強く開き、端部は面をなす。口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を多く含む。口径38.5cm。５は小型の甕底部片。

６は土師器高坏の脚柱部である。裾部との境の３方向に円孔を穿孔する。胎土に石英、長石の細砂を若干含み暗黄茶色に焼成される。

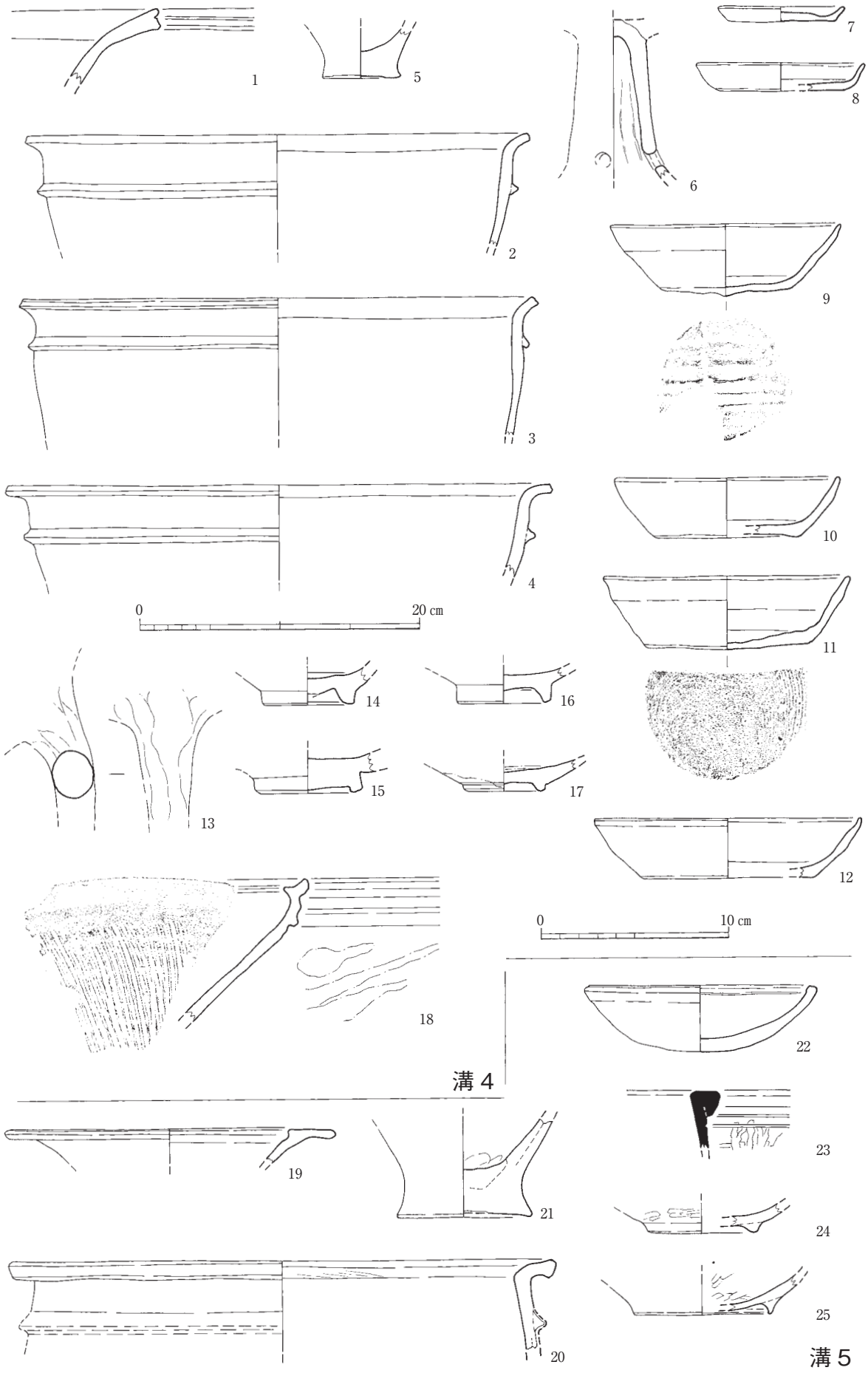
７・８は土師器小皿である。７は口径6.6cm、器高0.8cm、底径5.6cm。８は口径8.8cm、器高1.5cm、底径6.9cm。

９～12は土師器坏である。９は体部が直線的に開く器形となる。口径12.2cm、器高3.8cm、底径6.9cm。胎土に石英、長石、雲母の細砂を若干含む。底面の板状圧痕が明瞭である。10は９よりも体部が浅く、多少丸味を有して広がる器形となる。口径11.9cm、器高3.2cm、底径7.9cm。11は口径11.0cm、器高3.9cm、底径8.9cm。12は浅い器形となる。口径14.2cm、器高3.2cm、底径9.4cm。雲母の微砂を多く含む。

13は瓦質焼成の足鍋である。胎土に石英、長石の粗砂を多く含み調整の際の指ナデの稜線が明瞭に残る。

14・15は青磁碗の底部である。14は高台の外面から露胎となる。高台径4.9cm。15は高台内面のケズリ出しが少なく厚い底部となる。高台の内面から内側が露胎となる。径5.7cm。16は白磁である。高台の畳付部分だけが露胎で、他は全面施釉される。釉色は黄色がかった白色に発色し細かい貫入が入る。

17は藁灰釉の陶器である。高台は小さく低いものである。内面見込みは釉を掻き取り、外面



第65図　４・５号溝出土遺物実測図（１/ ３、１～５･19～21は１/ ４）

は高台部外面から内側にかけて露胎となる。高台径4.3cm。18は陶器擂鉢である。口縁部は厚みが少なく、内側への突帯も小さい。内面の擂目は密に施される。外面には釉を流し掛けする。

５号溝（図版31－３、32－１、第60図）

４号溝東西溝の３m 南側で、４号溝に沿って掘削された溝である。４号溝とともに二重の区画溝として内側の空間を区画している。19号土坑と重複しており、これを切って営まれる。東西方向に10m 続き、東端が南側に直角に折れて７m ほど続いている。西端は調査区外へと続いている。なお、この５号溝の南側にある小溝は近世の溝であり、この時期まで地形が継続していた事が判る。Ｊ－Ｊ' 断面土層図を見ると、幅230cm、深さ60cm を測り、南側の壁はテラス状の段を有している。このテラスまでの深さは35cm を測る。両側面とも傾斜は急で、断面は逆台形を呈す。底面はほぼ水平な面を形成し、幅は120cm を測る。覆土は上層に第１層灰色土ブロックを含んだ茶灰色土、その下層に第２層茶灰色土ブロックを含んだ灰色土が堆積しており、この２つの層は第３層灰色土を再掘削した後に堆積したものである。最下層である第３層と、花崗岩風化礫層である第７層との区別は明瞭である。

出土遺物には下記の土器の他に第73図５の金銅製品が出土した。

出土遺物（第65図）

19～21は弥生土器である。19は壺の口縁部で、長く水平に伸びた鋤先口縁となる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を含む。口径23.6cm。20・21は甕である。20は口縁部が短く強く外反し、内面に稜を有す。口縁端部は面をなし、わずかに上方につまみ上げている。口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。口径39.0cm。21は底部片である。底面はわずかに上げ底となり底部の厚さは厚い。裾部は鋭い稜をなす。胎土に石英、長石の粗砂を多く含む。

22は土師器坏である。底部は丸く、浅い体部となる。口縁部が内側に肥厚するのが特徴的である。胎土に石英、長石の粗砂を若干含み、焼成は悪く灰白色を呈す。

23は須恵質焼成の甕口縁部片である。わずかに内傾しており、端部を断面三角形に肥厚させる。上端部は水平面をなす。調整は内面と口縁部は横ナデ、外面の口縁部下はヘラミガキを行っており、その後に一条の沈線を巡らせる。

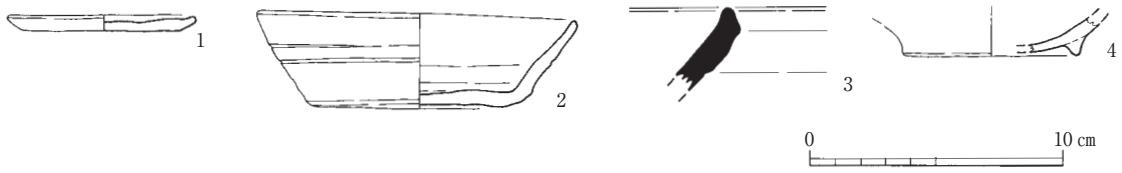
24・25は瓦器椀である。24は低平な高台となる。外面にはヘラミガキが見られる。高台径6.0cm。25は小さく薄い三角形の高台となる。内面にヘラミガキが残る。高台径7.4cm。

７号溝（第58図）

第２次調査南側調査区の中央付近で検出した溝である。直線的に伸びる溝で、長さは11.5m、方位はＮ－79°－Ｅを測る。東端は削平のため失われる。壁の立ち上がりは比較的急であり、断面は逆台形に近い。溝の幅は30cm、深さ８cm、底面の幅は25cm。覆土は暗灰褐色土である。

８号溝（第58図）

第２次調査南側調査区で検出した溝である。７号溝とほぼ並行しており、７号溝の２m 北側に位置する。平面上では二条の溝が重複したように見えるが、土層の観察では重複関係が把握できなかったため同一の溝として調査を行った。東端は削平のため失われる。長さは13.5m



第66図　８号溝出土遺物実測図（１/ ３）

を測る。N － N' 断面土層図を見ると、南側が深く北側がテラス状に浅くなっている。南側は深さ30cm、北側は深さ15cm を測る。壁の立ち上がりは急傾斜である。南側は断面逆台形を呈し、底面の幅は15cm を測る。覆土は上層に第１層暗灰褐色土、その下層に第２層黒灰褐色土、第３層灰色粘土が堆積し、最下層に第４層暗黄灰色混礫土層が堆積する。

出土遺物（図版36、第66図）

１は土師器小皿である。口径7.5cm、器高0.6cm、底径6.0cm。２は土師器坏である。体部が直線的に開く。口径12.6cm、器高3.8cm、底径8.7cm。底部糸切り。

３は須恵質の鉢口縁部である。端部は内傾する面をなす。口縁部下には自然釉が付着する。

４は瓦器椀である。断面三角形の低い高台が付く。高台径7.0cm。

９号溝（図版33－２、第29図）

４号溝と直行する溝で、４号溝による区画の南東コーナーより16m 北の地点にあたる。４号溝と底面レベルが変わらないことからも、４号溝に関連する遺構と考えてよかろう。検出面での幅約1.4m、底面幅約0.6m を測る。南側には不明瞭なテラスを有する箇所がある。４号溝の東側では幅はやや狭くなり壁の傾斜も強くなる。東端は谷へと続き、排水する機能があったかとみられる。

なお、区画内において４号溝に並行して９号溝から派生する溝が検出されたが、埋土から考えて９号溝と一連のものと判断された。深さは10cm 程度と浅い。

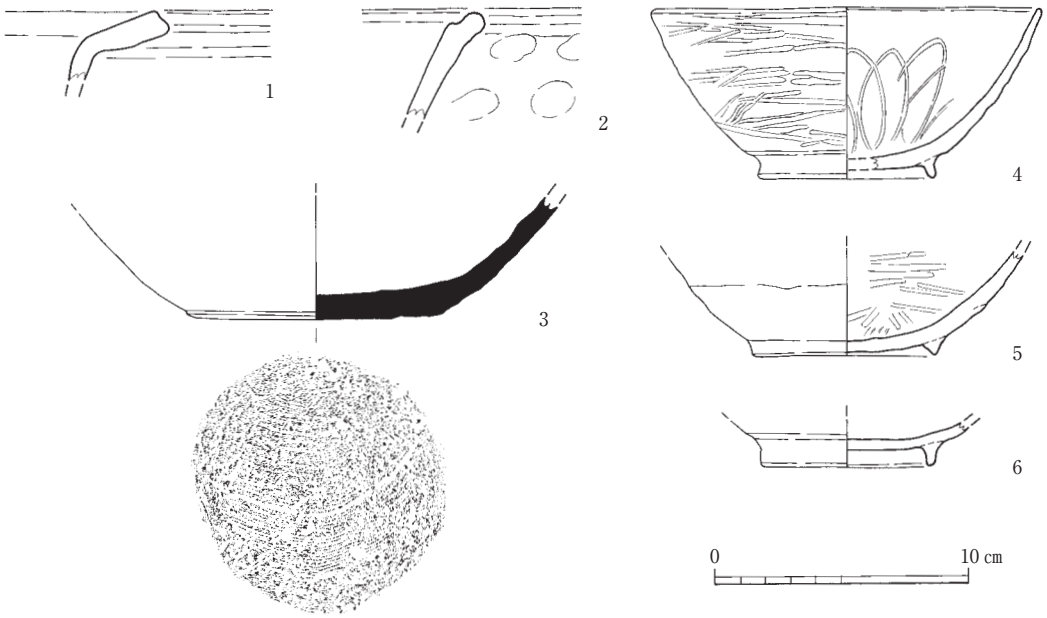
10号溝（図版33－３、第29図）

４号溝と直行する溝で、４号溝による区画の南東コーナーより12m 北にあたる。検出面での幅は約1.0m である。深さは10cm に満たず、ごく浅い。９号溝とは異なり、４号溝の東側には延びない。区画内で何らかの仕切りをおこなう機能をもつものであろう。

道路状遺構

3号溝（図版32－２・３、第67図）

形状は溝状を呈すが、溝底の痕跡から道路状遺構と判断されたためこのように報告する。北側調査区の東端で検出した遺構で、南北方向にほぼ直線的に21m にわたって検出した。北端および南端は調査区外へと続いている。４号溝の南北溝と並行しており、両者の間隔は120cm である。この３号溝も区画溝として機能したと考えると、三重の区画溝で内部を区画していたこととなる。幅は400cm、深さは50cm、底面の幅は230cm を測る。壁の立ち上がりは、東側面は比較的急傾斜、西側面は緩傾斜である。北半部は溝底のピットの数も少なく礫が集積した



第67図　３号溝出土遺物実測図（１／３）

所も見られたが、南半部は不整形のピット群が多数検出され、その形状が溝の主軸に対して直交する方向に伸びていることから、いわゆる波板状痕跡として理解し、この遺構を道路状遺構と考えるに至った。遺構の覆土は、北半部の土層であるＧ－Ｇ’断面土層図を見ると、上層に第１層黄白色土ブロックを含んだ暗茶褐色土層、その下層に第２層暗茶褐色土ブロックを含んだ黒褐色土、第３層暗茶褐色土が堆積し、その下層にある第４層はマンガン粒を含んだ灰褐色土である。第６層灰褐色土に砂粒を多く含むこと、第８層にもマンガン粒を含むことから、滞・流水による堆積と再掘削を繰り返したことが判る。第68図の南半部の土層では、第６～８層がマンガンを含んだ粘土またはシルト土であり、やはり滞・流水と掘削を重ねた事が判る。なおピット群の覆土は粘性を帯びた灰褐色土または灰色粘土であり、重複や再掘削を示すような堆積状況は見られなかった。

出土遺物（第67図）

１・２は土師質の鍋である。１は口縁部が外側に屈折し、端部はわずかに肥厚している。胎土に石英、長石、角閃石を若干含む。２は体部から口縁部にかけて直線的に開いており、口縁端部は内側を強くナデ調整を行い段状に窪ませている。調整は横ナデだが外面には指圧痕が残る。外面には黒色の炭化物が付着。胎土に石英、長石の粗砂を若干含む。

３は須恵質の鉢である。底部は糸切り。底径10.2cm。体部下半は若干丸味を帯びた器形となる。

４～６は瓦器椀である。４は体部の丸味が少なく深い器形となる。内面には螺旋状のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを行う。口径15.4cm、器高6.7cm、高台径7.0cm。５は断面三角形の低い高台となる。内面横ヘラミガキ、外面ナデ。高台径7.7cm。６は高台があまり開かない形状となる。高台径6.8cm。

第68図　３号溝実測図（１/60）

土塁状遺構

１号土塁状遺構（図版33－１、第69図）

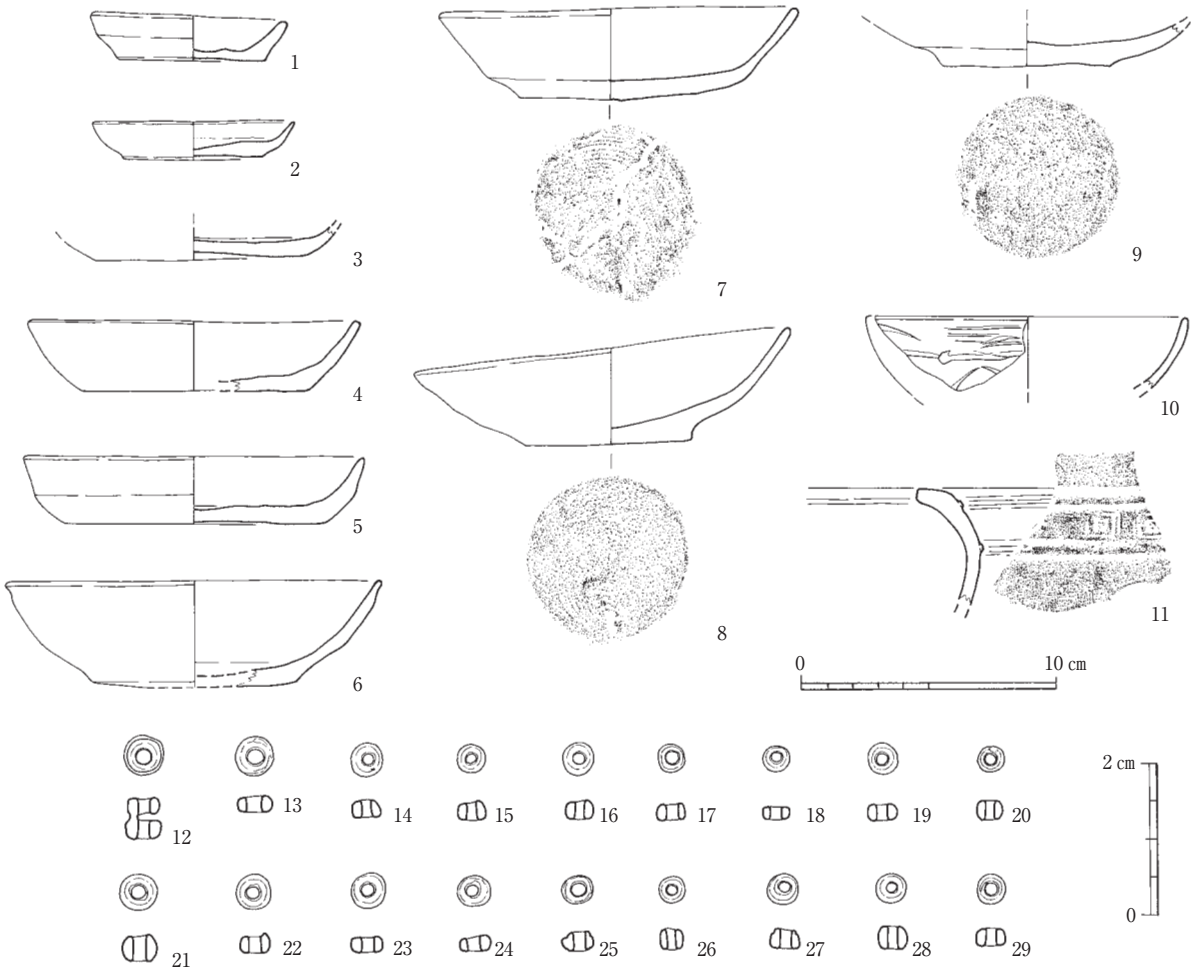
平面上の面的な確認ではなく、調査区壁面の観察によって確認した遺構である。確認した段階では既に調査区内での表土掘削は完了しており、平面上の検出は行っていない。Ｌ－Ｌ’の断面土層図を見ると、４号溝と５号溝の間の幅4.3m の間に台形の高まりが見える。これは現在でも調査区外に高まりとして認識できる。土層図のうち、第10～12層は明確な無遺物層で、４・５号溝はこの層を切って掘削されている。第９層茶褐色土の上層には第３層旧表土があり、以前はこの面が表土であった事が判る。その上層には第４層が厚く堆積し土塁状の高まりを形成するが、この第４層は４号溝の上層に堆積することから、４号溝埋没後に形成されたことが判る。また、５号溝の上層にある第３層旧表土層の上層に堆積することから、５号溝埋没後に堆積したことが判る。即ち、４・５号溝が機能していた段階には土塁状の高まりは存在していなかった事になる。造成された時期については不明だが、少なくとも４・５号溝が機能した時期以降という事になる。

第69図　４・５号溝、土塁状遺構断面土層図（１/60）

１次調査ピット出土遺物（図版36・38、第70図）

１はP124出土の土師器皿。径に比べ高く、口径7.8cm、器高1.9cm を測る。２はP87 出土の土師器皿。口径は8.0cm。底面は糸切りとみられるが、摩滅する。

３はP47出土土師器坏。４・５はP70出土土師器坏。口径はいずれも約13cm に復元される。５は底面に糸切り痕を残すが、４は摩滅して観察できない。６はP176出土土師器坏。口径は14.7cm を測り、器高は4.2cm と深い。胎土に砂粒を多く含み粗



第70図　第１次調査ピット出土遺物実測図（１／３、12～29は１／１）

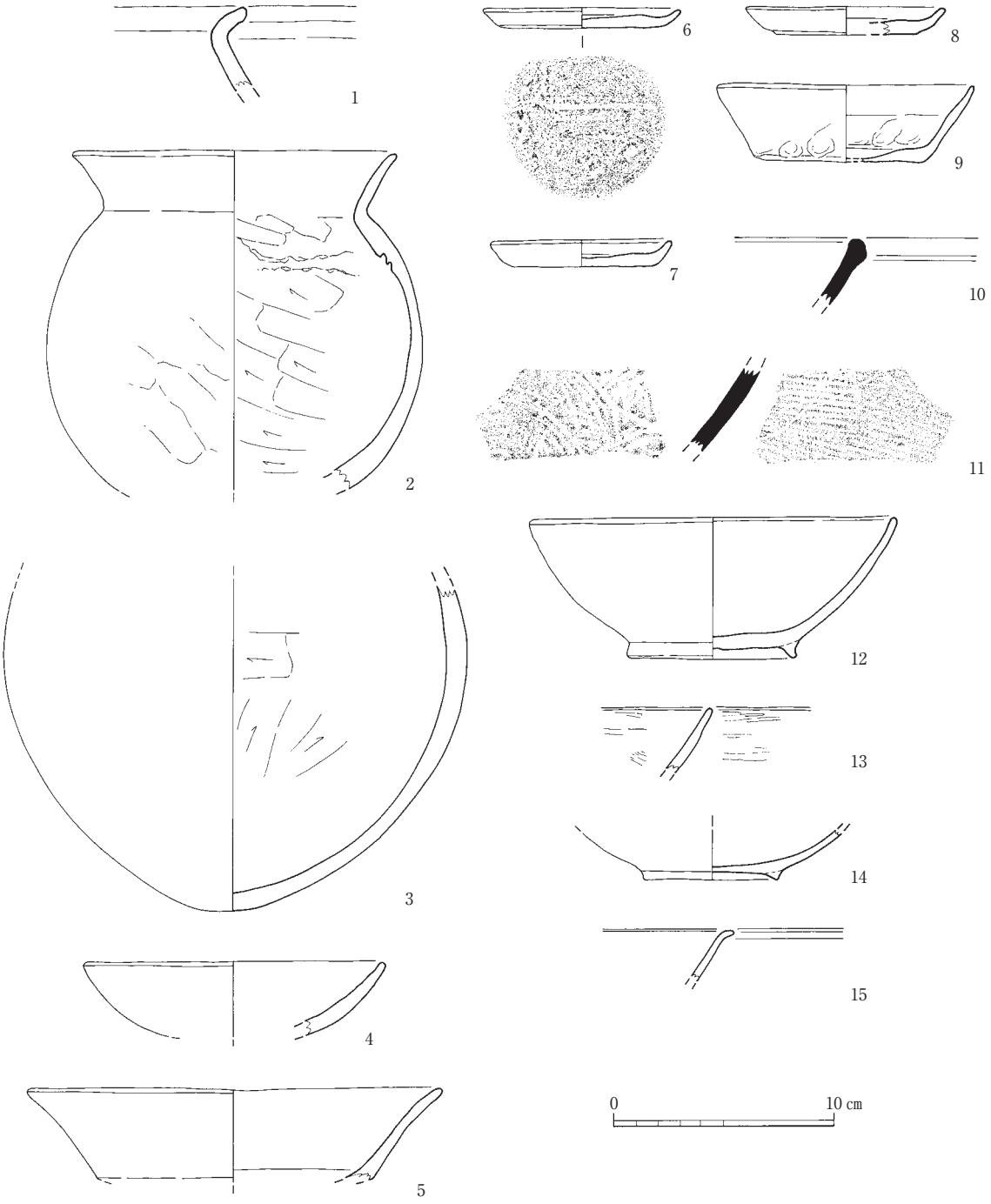
い印象を受ける。７～９はP120出土の土師器坏。口径はいずれも14cmを超える。７・８は使用に伴う灰褐色の変色や摩滅がみられる。９の底部は高台状となり体部は大きくひろがる。７～９のいずれも底面に糸切り痕を残す。

10はP77出土の青磁碗。文様を刻むようであるが、タッチが曖昧で具体的な画題は不明。11は瓦質の火鉢。強く内湾する口縁部で、外面に二条の低い突帯を巡らせ、突帯間に方形のスタンプ文を施す。

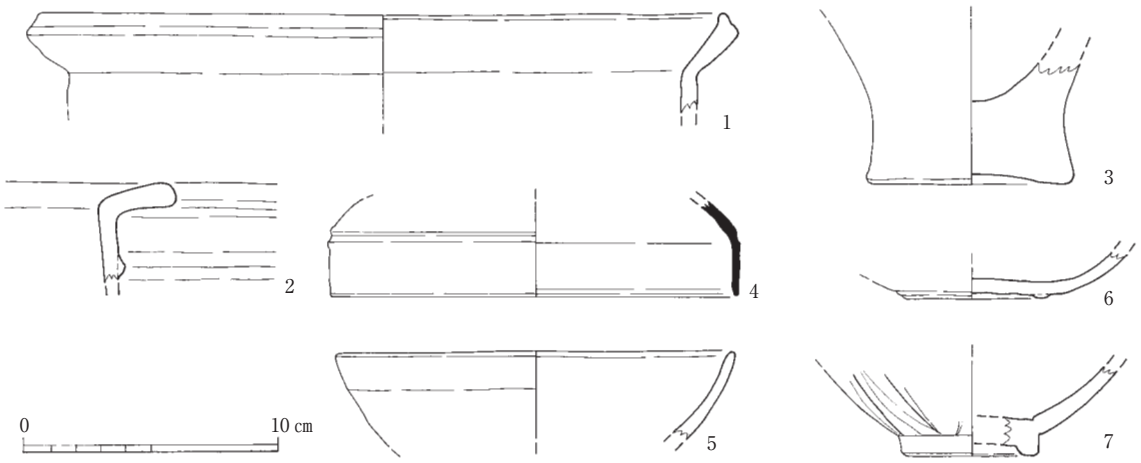
12～29はガラス小玉。Ｐ１から出土したものであるが、この遺構は調査区の中心付近に位置する径15cm、深さ20cmを測る小ピットが二つ繋がるもので、土壙墓等の性格を考え難い単純な形状のピットである。他の遺物は共伴していない。12～20は濃紺色、21～26は濃緑色を呈するが、いずれも透明度は低い。27～29は劣化がすすんでくすんだ緑色となる。12は二つの玉がわずかな接点で切断されずに繋がる特異な状況を呈する。割れずにその状況を保つことから、ほとんど使用されずに廃棄されたものと考えられる。

２次調査ピット出土遺物（図版37、第71図）

１～５は古墳時代の土師器である。１は甕の口縁部片である。丸味を帯びて短く外反する形



第71図　第２次調査ピット、包含層出土遺物実測図（１/ ３、16～19は１/ ４）



第72図　試掘調査出土遺物実測図（１／３）

状である。２は丸味を帯びた胴部から、頸部はあまり締まらず外反する口縁部へと続く。口縁端部は器壁が薄くなる。口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラケズリ、外面はナデ調整を行う。口径14.6cm。外面は二次被熱で黒変する。３は縦長の球形胴で底部は尖底気味となる。内面にはヘラケズリがわずかに認められる。４は土師器椀である。浅く丸味を帯びた器形となる。口径13.4cm。５は高坏の口縁部である。屈曲部の稜は明瞭で、口縁部はわずかに外反して伸びている。口径18.5cm。胎土に石英、長石、雲母の粗砂を多く含む。

６～８は土師器小皿である。６は口径8.8cm、器高0.9cm、底径7.7cm。７は口径8.0cm、器高1.2cm、底径6.4cm、８は口径9.0cm、器高1.3cm、底径6.4cm。

９は土師器坏である。底部は平坦で体部は直線的に開く。口径11.4cm、器高3.5cm、底径7.3cm。

10は須恵質の鉢口縁部である。端部は玉縁状に小さく肥厚する。11は軟質焼成の須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕が見られる。

12～14は瓦器椀である。12は完形に復元できる。体部の丸味は少なく高台部は小さな三角形を呈す。口径16.4cm、器高6.4cm、高台径7.6cm。13は内外面にヘラミガキが認められる。14は小さな断面三角形の高台が付く。高台径6.1cm。

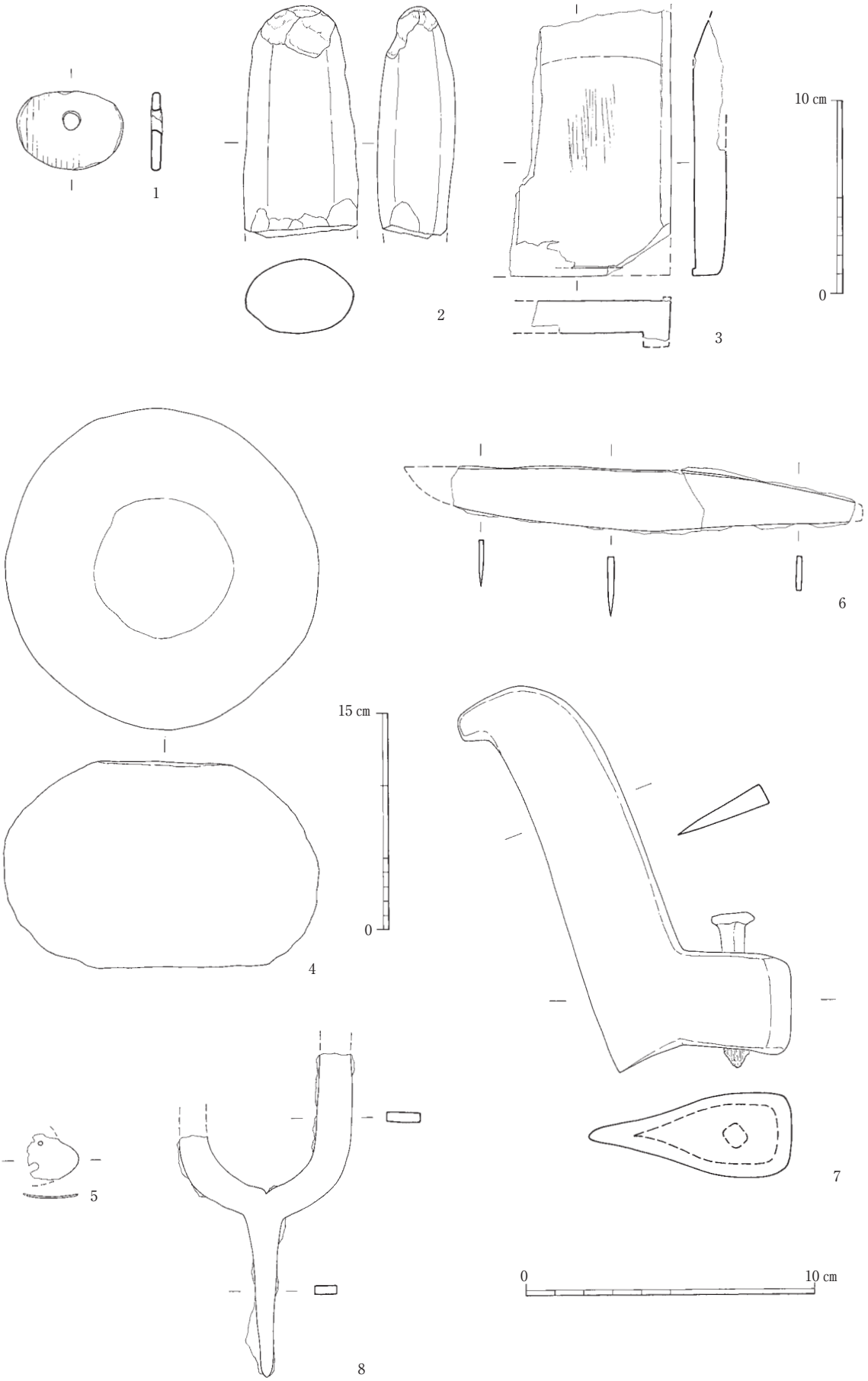
15は白磁碗の口縁部片である。口縁端部を短く外側に折り返す形状となる。

包含層出土遺物（第71図）

16～19は弥生土器である。16は肩部に無軸羽状文、単弧文を施文する壺。17は径が大きく、厚みがあまりない底部であることから壺の底部かと思われる。底径10.1cm。18も厚みが少なく壺の底部かもしれない。底径7.3cm。19は厚みがあり、甕の底部と思われる。底径9.4cm。20は染付碗である。高台部は長く直立しており、畳付部分のみ露胎。

試掘調査出土遺物（第72図）

第72図は第２次調査に向けて大藪遺跡北側斜面部に設定したトレンチから出土した遺物である。１～３は弥生土器。１はく字形に屈曲させる甕口縁部で、口縁端部は内側につまみだす。



第73図　土製品・石製品・金属製品実測図（1･5～8は1／2、2･3は1／3、4は1／4）

２は強く屈曲させる甕口縁部。口縁部下外面に断面三角形の突帯を巡らせる。３は厚底の甕底部。底面はわずかに上げ底となる。４は須恵器坏蓋。口縁端部内面は不明瞭な段をつくる。口縁部と天井部との境には沈線状をもって稜をつくる。外面には自然釉を被る。５・６は瓦器椀。６の底部は低く不明瞭な高台を伴う。７は青磁碗で、外面に蓮弁文を刻む。

土製品・石製品・鉄製品（図版38、第73図）

１は土製円板である。やや横長の形状で中心から少しずれた位置に円孔を穿孔することから懸垂して使用されたものと思われる。表面の調整は指整形に加えて一部ハケ状工具を使用する。土師質に焼成される。４号溝出土。

２は凝灰岩製磨製石斧である。刃部を欠損する。厚みがあり重量感に富む。風化が進んでおり調整等は不鮮明だが、刃部側と頂部側に整形時の剥離が見られる。長さ11.9cm、幅5.9cm、厚さ3.8cm。４号溝出土。

３はいわゆる赤間石製の硯である。海部にはかすかに擦痕が見られる。色調は暗赤褐色を呈す。長さ13.8cm、幅8.3cm、厚さ2.1cm。18号土坑出土。

４は五輪塔の水輪である。径21.9cm、高さ14.3cm。表面に鑿痕が残る。19号土坑出土。

５は金銅製垂飾品である。破片資料であり全体の形状は不明だが、平面形は扁平に丸く弧を描いた形状である。一箇所小さな円孔がある。厚さは0.5mm 程度である。５号溝出土。

６は鉄刀子である。鋒部を欠損しており、現存で長さ14.0cm を測る。刃部と基部の境が不明瞭な形状となる。刃部の幅は2.1cm、厚さは２mm。５号土壙墓副葬品。

７は鉈鎌である。楔として使用した鉄釘や柄部の木質が遺存している。４号溝出土。

８は又状鉄製品である。基部を形成しており柄に装着された事は判るが、二又部分は断面が長方形を呈しており刃部の形成は行われていない。長さ11.3cm。４号溝出土。

７）まとめ

大藪遺跡第２次調査では、主要な遺構として弥生時代の土壙墓13基、貯蔵穴３基、古墳の周溝１条、古代の竪穴建物１棟、土坑１基、中世の掘立柱建物１棟、土壙墓１基、配石墓１基、土坑７基、溝８条、道路状遺構１条、土塁状遺構１条を検出した。

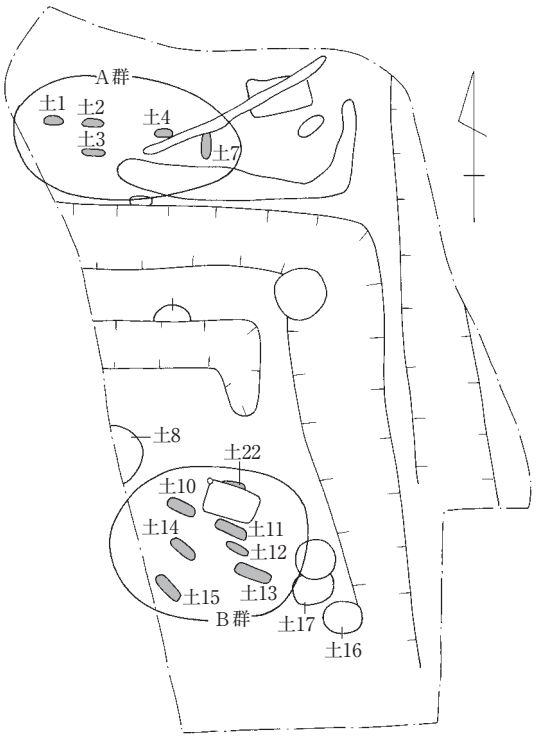
弥生時代の土壙墓は第74図のように大きくＡ群とＢ群の二つの群に分けられる。副葬品等を持たないためこれらの正確な時期は判らないが、混入した遺物や周辺の遺構の時期、或いは他遺跡の類例と比較して、弥生時代中期の土壙墓として良いだろう。Ａ群は調査区北側の斜面上で検出された一群で、１～４号土壙墓、７号土壙墓によって構成される。１号土壙墓と２号土壙墓はほぼ主軸の方向を揃えており、３号土壙墓と４号土壙墓も近い方位を向く。主軸方位に関して言えば１・２号と３・４号がそれぞれ相互に意識した上で配置されたものであり、相互に関連性を持つ、ということができる。７号土壙墓は１・２号土壙墓とちょうど直交する位置にあり、やはり意識的に配置されたものと思われ、関連性があると言える。即ち主軸方位の面では３つの小群に分類され、そのうちの１・２・７号土壙墓は関連があると言うことが出来る。また、１・２・４号土壙墓はほぼ一直線に並んでいるのに対し、３号土壙墓は２号土壙墓とちょうど並列する関係にある。１基だけではあるが列埋葬の形態をとる可能性もあり興味

深い。７号土壙墓から東側には土壙墓は検出されておらず７号土壙墓がこの群の東限であり、また群は西側の調査区外へと伸びている可能性もある。平面形は５基とも全て隅丸長方形を採用する。３・４号土壙墓については小口側が丸みを帯びる特徴的な形態となる。規模に関しては長さ120cm ～155cm と多少のばらつきはあるものの、５基の土壙墓全てが幅50～55cm の範囲内におさまり、ほぼ同規模同形態の土壙墓として良いものである。

Ｂ群は調査区南側の平坦面上で検出された一群で、10～15号土壙墓と22号土壙墓によって構成される。主軸方位を見ると、10・14・15・22号土壙墓がほぼ近い方位をとっており、相互に方位を意識した密接な関連性がうかがわれる。また11・12・13号土壙墓もほぼ同じ方位をとっており、やはり密接な関連をもつものと思われる。従ってこのＢ群では主軸方位の点で２つの小群に分類されることとなる。これらは配置の面でも西側の10・14・15・22号土壙墓と、東側にまとまる11・12・13号土壙墓とでまとまりをもって区分される。

平面形に関しては、10・11・13・15・22号土壙墓が直線的四辺による隅丸長方形であるのに対し、12・14号土壙墓は小口側が若干丸みを帯びた長方形となる。この小口側が丸味を帯びる傾向は土壙墓の幅と相関する特徴であり、Ａ群でも同様の傾向にある。規模に関しては10号と11号が長さ200cm 前後を測り、群中では大型に分類され、同様に13・14号は長さ175cm 程度で中型に分類される。150cm 以下の12・15号は小型に分類され、12号は長さ109cm、幅39cm と特に小型である。22号土壙墓は大きく削平され全容が不明なので除外するが、こうした規模による分類を先に見た主軸方位、配置状況と照らし合わせると、西側の群は大型の 10号と中型の14号、小型の15号からなる一群、東側の群は大型の11号と中型の13号、小型の12号からなる一群ということになり、どちらの群も大型・中型・小型の各土壙墓によって構成されるということになる。Ａ群は等質的な２群以上の土壙墓によって構成される群、Ｂ群は規模の点で３種類に分類される差を持つ２群によって構成される群、ということができる。残念ながら副葬品やその他の要素に恵まれなかったため、こうした構造差が時期差に起因するものなのか、それとも階層差に起因するものなのかなどといった差異の背景にまでは言及することができなかった。

弥生時代の他の遺構として、８号・16号・17号土坑がある。16号・17号土坑はどちらも４号溝・18号土坑に大きく削平されるため全体の形状はよく判らないが、８号土坑は半分以上が調査区外に伸びるとはいえ全体の形状が推察可能である。平面形は現状で直径３m 程度の円形を呈しており、壁が垂直近く立つ様相は、本来はこの地域の弥生時代中期の遺跡で類例が多い断面が袋状或いはフラスコ状になる貯蔵穴で、



第74図　弥生時代土壙墓の位置

上方が削平され下方のみ遺存したものと思われる。16号・17号土坑も出土遺物の時期や出土状態から類推して恐らく同様の貯蔵穴であろうと思われる。出土遺物はほとんどが壺である点もこの土坑が貯蔵機能を果たしていたことを裏付けるものである。

古墳時代の遺構には唯一６号溝がある。主体部は調査区外にあると思われるが、先述したように直径16m 程の円墳の周溝と見て良い。周辺には剥き出しの箱式石棺が今も残る大久保小森古墳があり、今回見つかった古墳もこの古墳とともに群の一角をなすものと考えられる。出土遺物は古墳の祭祀行為に使用されたものと思われ、壺や甕、高坏、甑の他、恐らく実用品ではないミニチュア土器も含まれる。使用後廃棄されたようで出土状態に規則性がうかがわれず、また大半が破片資料である。葬送儀礼がうかがわれる資料として貴重である。

古代の遺構として、１号竪穴建物と６号土坑がある。どちらも７世紀後半に比定される。１号竪穴建物は大きく削平されていたが3.1m 前後の方形プランが想定される。この時期の竪穴建物としては小型に属する規模である。一般的に、古代の集落遺跡では竪穴建物は群集する傾向にあるが、今回の調査区では１棟しか見つかっていない。周辺の調査区外に同時期の遺構があるのか、或いは既に削平されてしまって今回検出できた１棟しか残っていなかったのか現状では判断できない。また、この竪穴建物のカマド右側からは土器がまとまって出土したが、屋内空間の利用法をうかがい知ることが出来る事例として興味深い。６号土坑については遺物の出土状態から廃棄土坑として良いものと思われる。

中世の遺構の中で最も目をひくのが、４・５号方形区画溝である。４号溝は南北方向で直線距離にして70mを測る。正方形の区画を有していたと推定すると、第75図のように70m四方の区画として復元される。４号溝は断面逆台形で、現状での幅は４m、深さ１m を測るが、溝の上面は後世の造成等でかなり削平されているので本来はもっと深く広い幅を有していたものと思われる。５号溝はこの４号溝の内側にあって内堀として機能したようであるが、ほぼ北側にのみ掘削され東側にはわずかに伸びる程度でしかない。平野部に面する北側を防御、または威容誇示の目的で掘削されたものと思われる。３号溝については溝底の一部から波板状痕跡が確認されたために道路状遺構として報告したが、４・５号溝によって区画される空間の外側を更に区画する、区画溝としての機能も併せ持ったものと思われる。南北方向に直線的に掘られており、上記の方形区画とあわせると90m以上の長さで直線的に掘削された溝であることが判る。また、第２次調査区南側の現道部分は下部の調査こそ出来なかったが、溝状に落ち込んだ地形であることが判っており、３号溝とともに外側の区画溝として機能していたことが推察される。即ち100mに近い規模の区画を持った敷地であったこととなる。

これらの溝の時期であるが、時期的に最も遡る遺物は12世紀後半前後で、その後14世紀頃までの遺物が見つかっていることから、おおむねその間を存続時期として考えている。なお、近世以降も溝の地形は残っていたらしく溝上層からは近世以降の遺物が出土している。

このように３つの大きな区画溝によって区画された空間であるが、肝心の区画内の施設等については著しく削平されていることや大半が調査区外となることから、建物等はわずかしか確認できなかった。その中で、確認された掘立柱建物の柱穴から鉄滓や焼土塊が出土している点は、鍛冶工房の存在を示すものとして注目できる。

その他の遺構として、墓と土坑がある。遺跡内で見つかった２基の墓のうち、５号土壙墓に

第75図　方形区画想定図

ついては12世紀後半頃に比定され、一般的な集落遺跡でも散見される、屋敷墓として良いだろう。１号配石墓については一般的な墓ではなく配石を伴った火葬墓であり、墓の規模から見ても被葬者は一般レベルではなく、高い階層にあった人物、それも仏教関連者の可能性がある。９号・18号・19号の３つの土坑については出土遺物から14世紀頃のものと思われるが、機能については不明である。ただし19号土坑から出土した五輪塔の水輪からは、近隣に五輪塔を建立した墓地が存在したことが推察される。そう考えると、この区画溝によって区画された空間の性格については、現在は遺跡の西側に隣接し、その創建が室町時代以前に遡るという伝承がある万福寺の前身ではないか、という想定もされるが推測の域を出ない。この地域にとって重要な歴史的意義のある遺跡であり、今後の調査の進展に期待したい。

図　版

１．大久保向原遺跡
第１次調査区遠景
（北から）

２．大久保向原遺跡
第１次調査区遠景
（南から）

図版２

１．大久保向原遺跡
第１次調査区全景
（上空から）

２．試掘第１Tr
（北から）

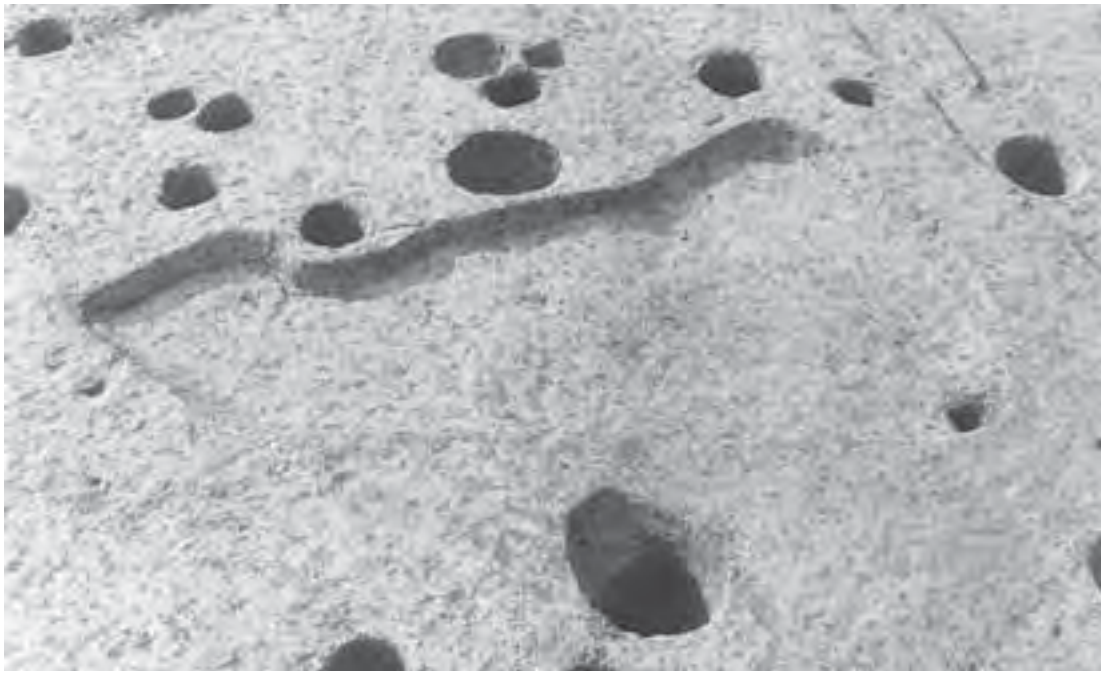
３．試掘第２Tr
（北から）

１．１号竪穴建物
（南東から）

２．１号掘立柱建物
（東から）

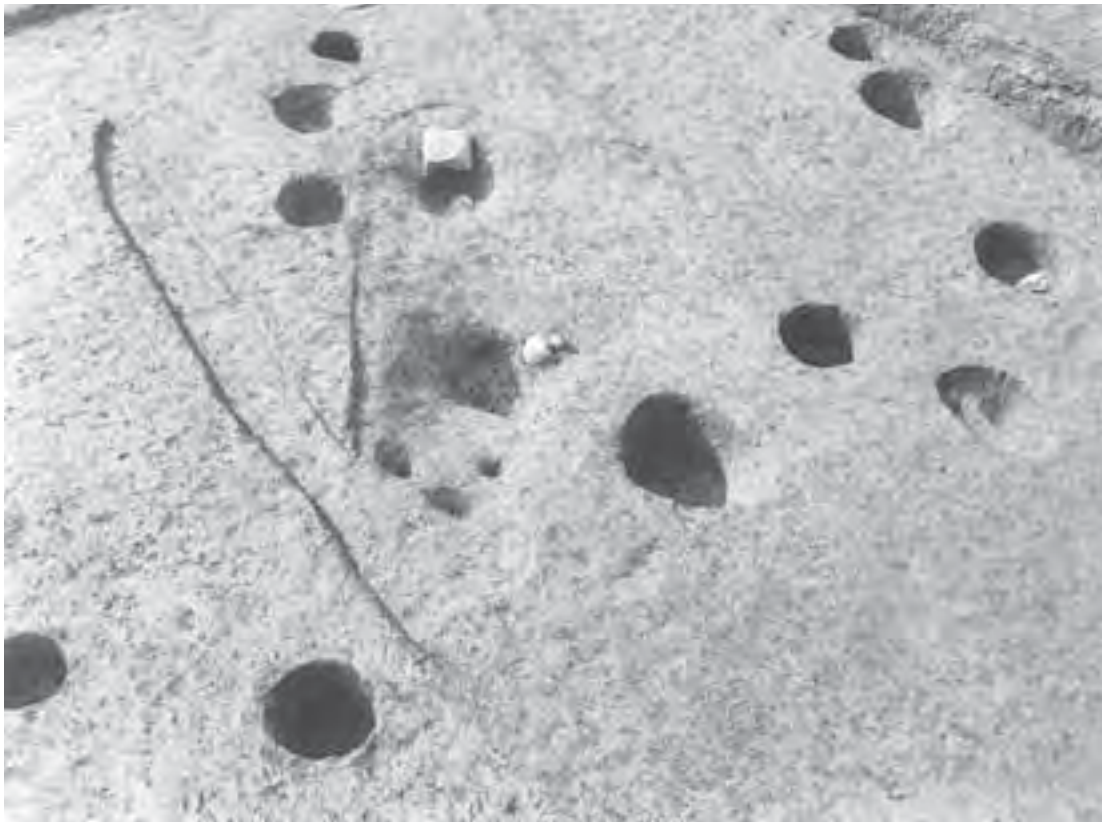
３．２号掘立柱建物
（南上空から）

図版４



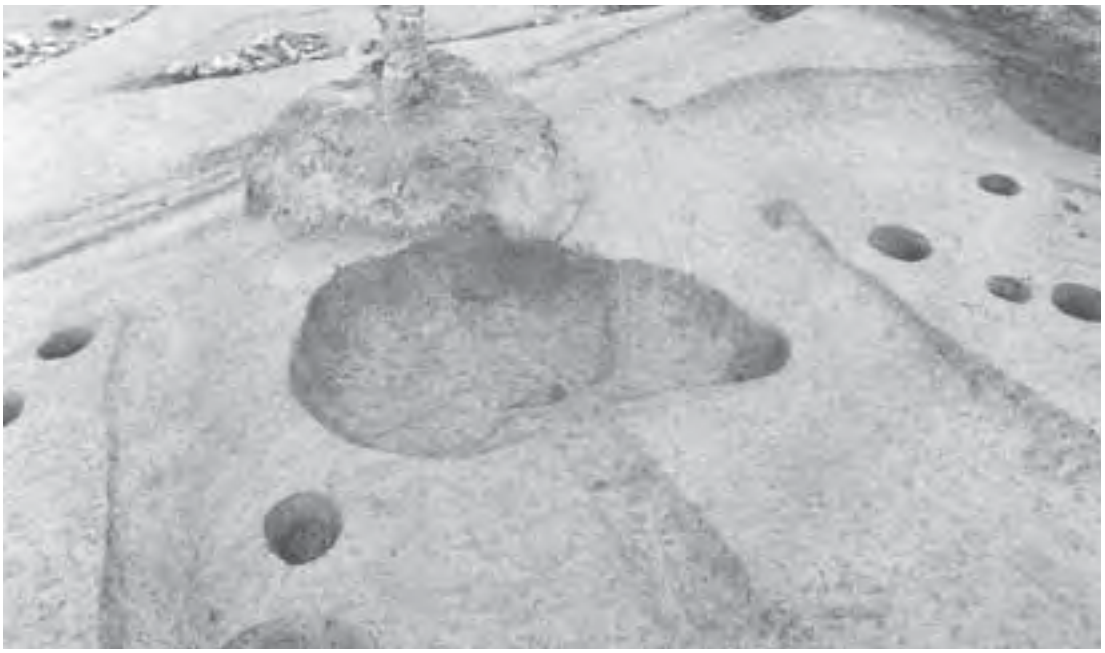
１．１号土坑
（北から）

２．２号土坑
（西から）

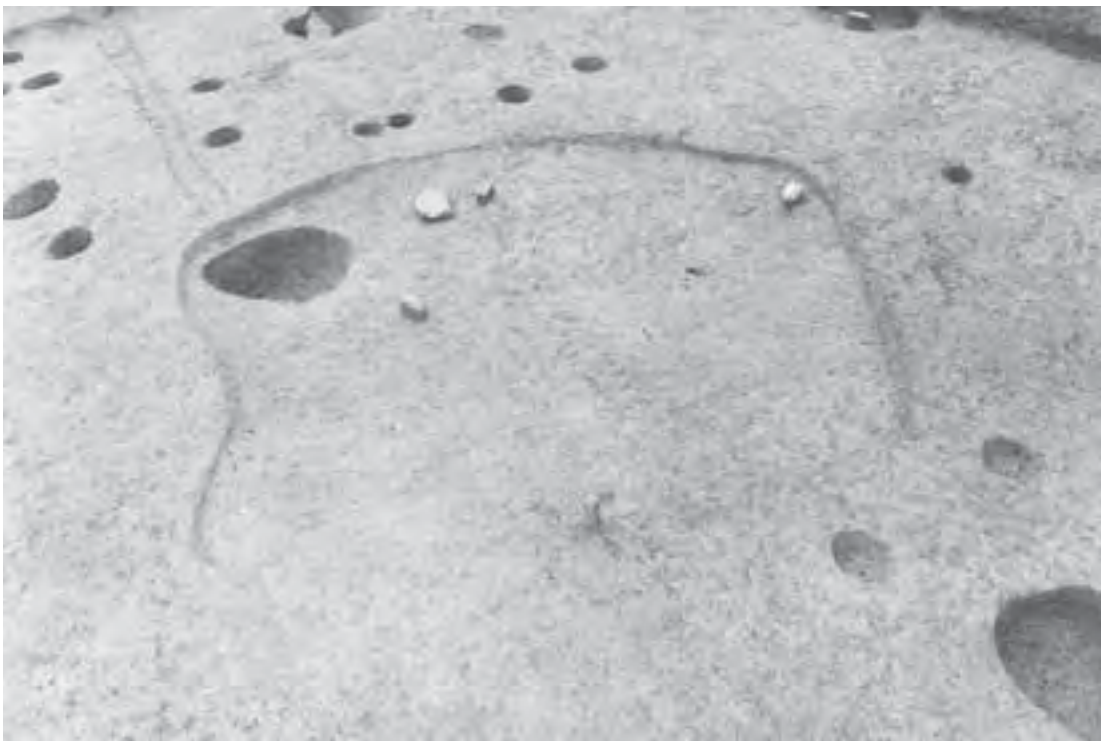


３．３号土坑
（北から）

１．４号土坑
（東から）



２．５号土坑
（南から）



３．６号土坑
（南西から）

図版６

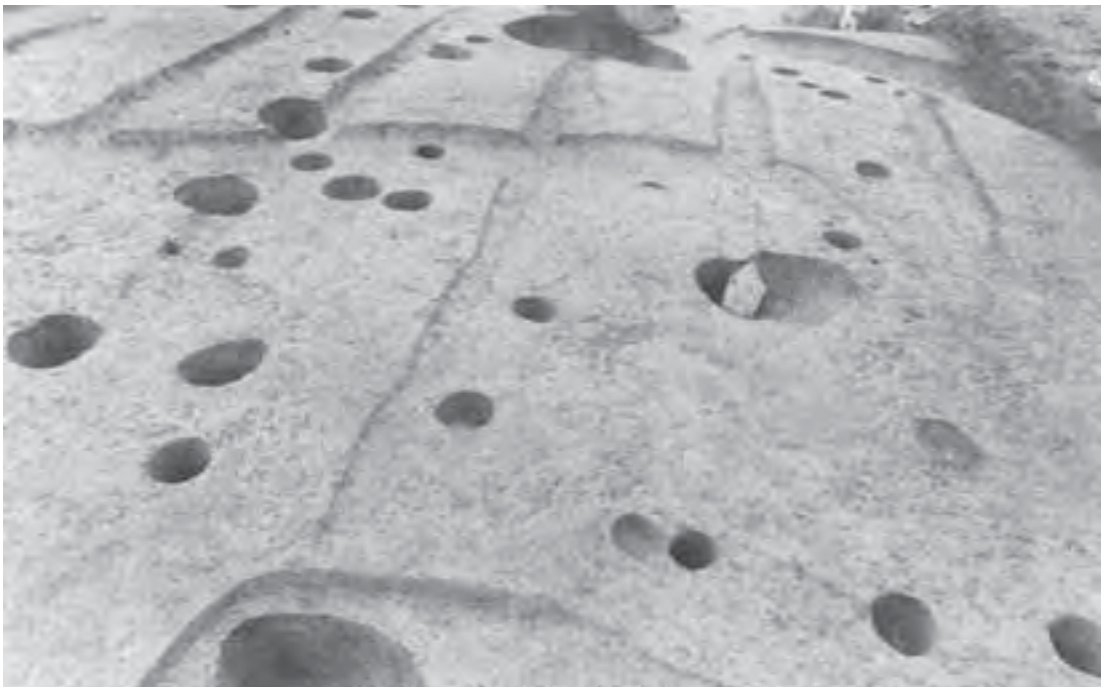
１．７号土坑(南西から)

２．１号溝（南から）

３．２号溝中央付近
（北から）

１．２号溝西側（北から）

２．２号溝南側落ち込み
（西から）



３．３号溝（南から）

１．出土遺物①（掘立柱建物・土坑出土遺物）

２．出土遺物②（溝出土遺物）

１．大久保向原遺跡
第２次調査区遠景
（北から）

２．大久保向原遺跡
第２次調査区遠景
（南東から）

図版10

1．大久保向原遺跡
第２次調査区１区全景
（上空から）

2．大久保向原遺跡
第２次調査区２区全景
（上空から）

1．１号土坑(南東から)

2．２号土坑（北から）

3．３号土坑（南から）

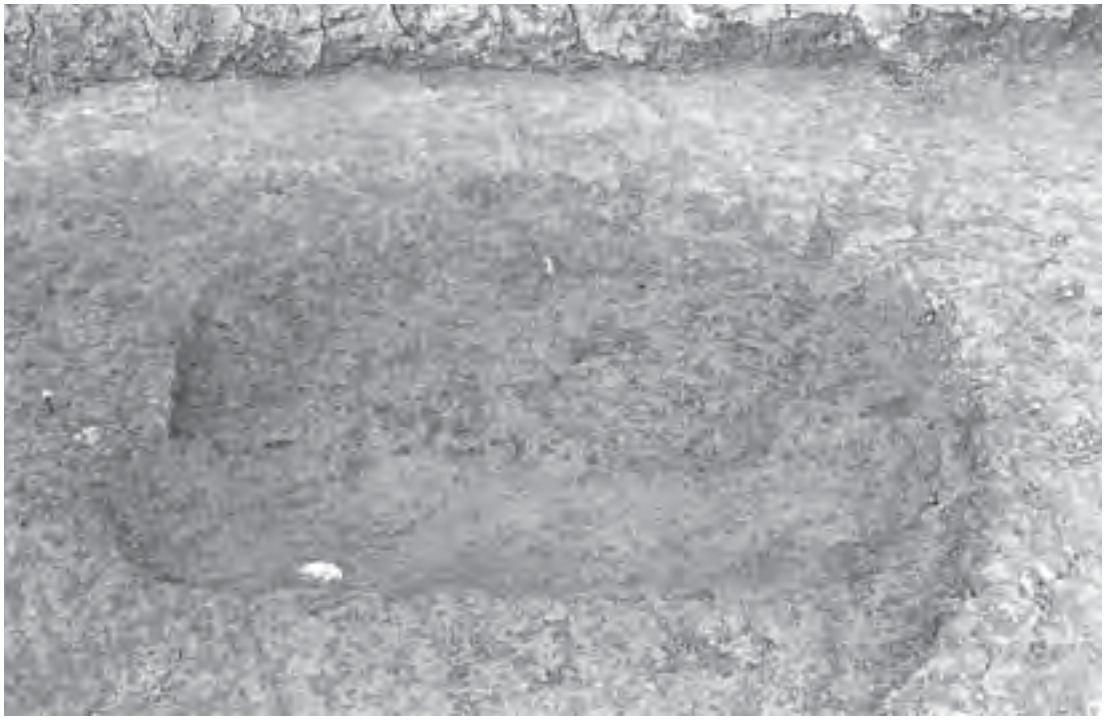
1．４号土坑堆積状況
（北西から）

2．４号土坑（西から）

3．５号土坑堆積状況
（北西から）

1．５号土坑(南西から)

2．６号土坑堆積状況
（南西から）



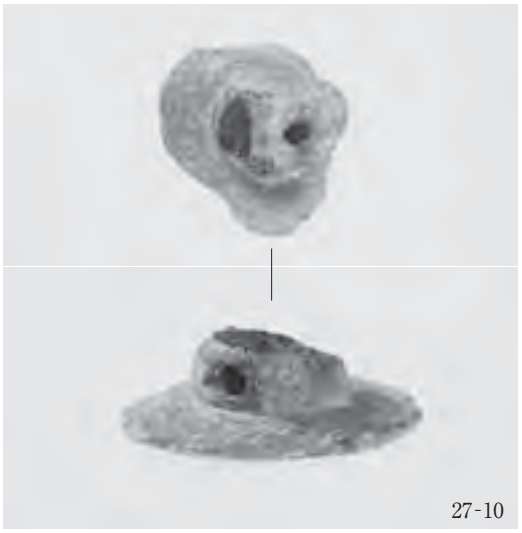
3．６号土坑（南から）

図版14

1．1・3号溝（北西から）

2．1号溝南半（北から）

1．２号溝（北から）



3．出土遺物

2．ピット瓦器椀出土状況

図版16

1．大藪遺跡第１次調査区
遠景（北上空から）

2．大藪遺跡第１次調査区
遠景（西上空から）

1．大藪遺跡第１次調査区
遠景（東上空から）

2．大藪遺跡第１次調査区
全景（上空から）

図版18

1．大藪遺跡第２次調査区
遠景（北上空から）

2．大藪遺跡第２次調査区
北半部遠景（南上空から）

1．大藪遺跡第２次調査区
北半部遠景
（東上空から）

2．大藪遺跡第２次調査区
北半部全景（上空から）

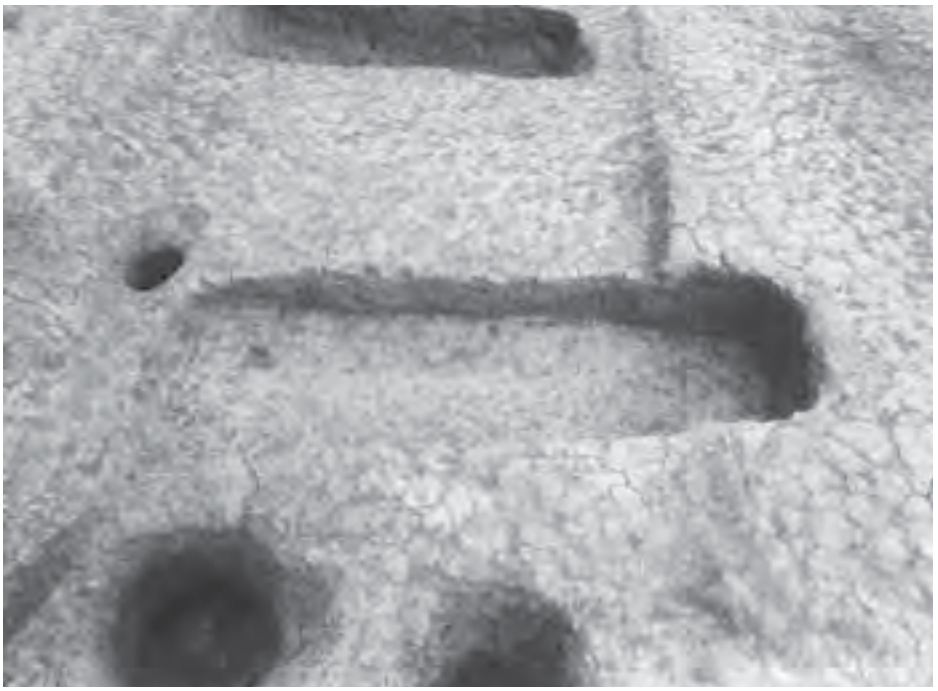
図版20

1．大藪遺跡第２次調査区
北半部中央付近
（上空から）

2．大藪遺跡第２次調査区
南半部全景（上空から）

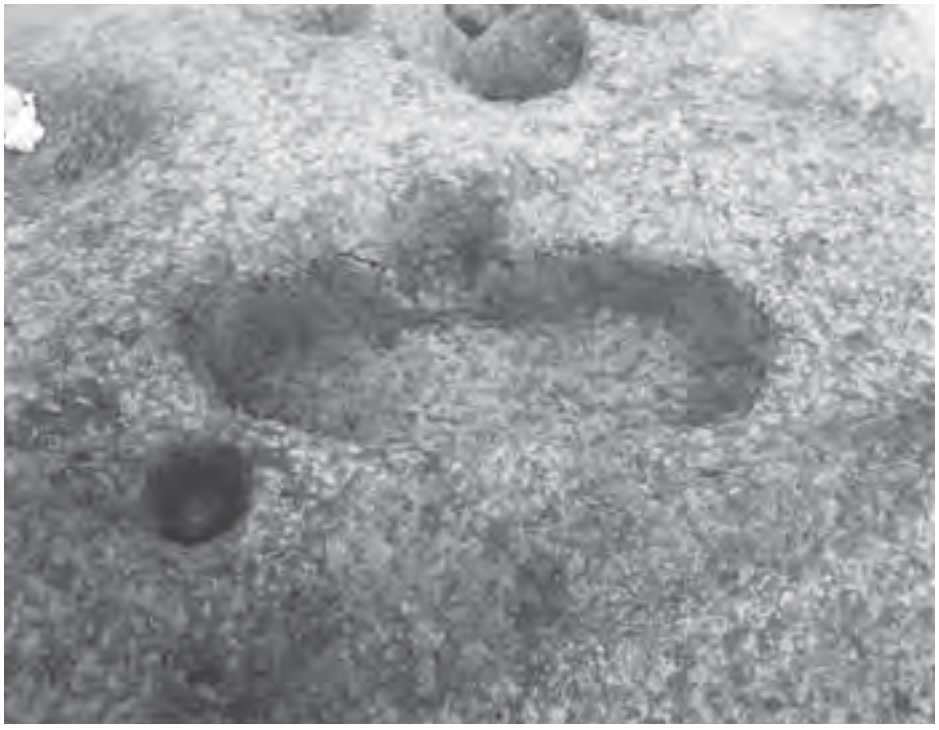
1．１号土壙墓（南から）

2．２号土壙墓（南から）



3．３号土壙墓（南から）

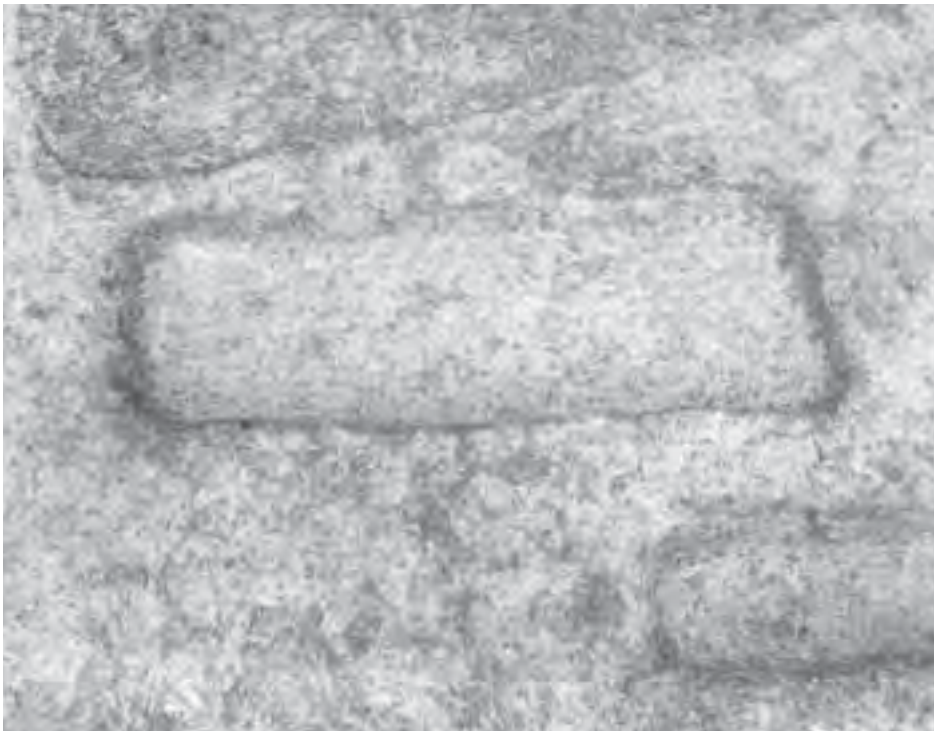
図版22



1．４号土壙墓（南から）

２．７号土壙墓（東から）

３．10号土壙墓（北から）

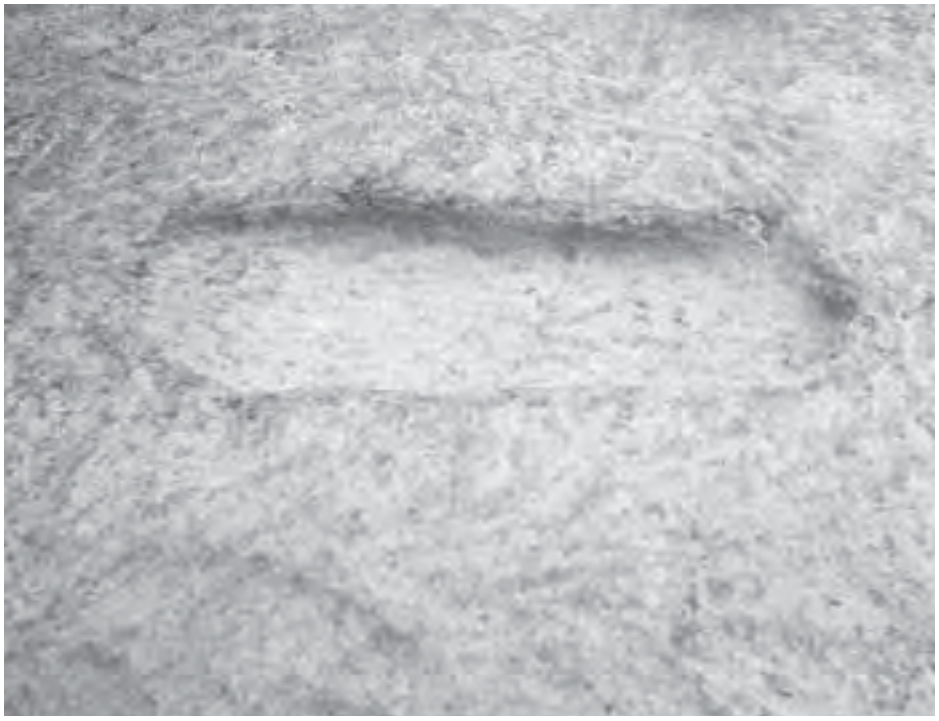


1．11号土壙墓（南から）

2．12号土壙墓（南から）

3．13号土壙墓（南から）

図版24



1．14号土壙墓（北から）

2．15号土壙墓（北から）

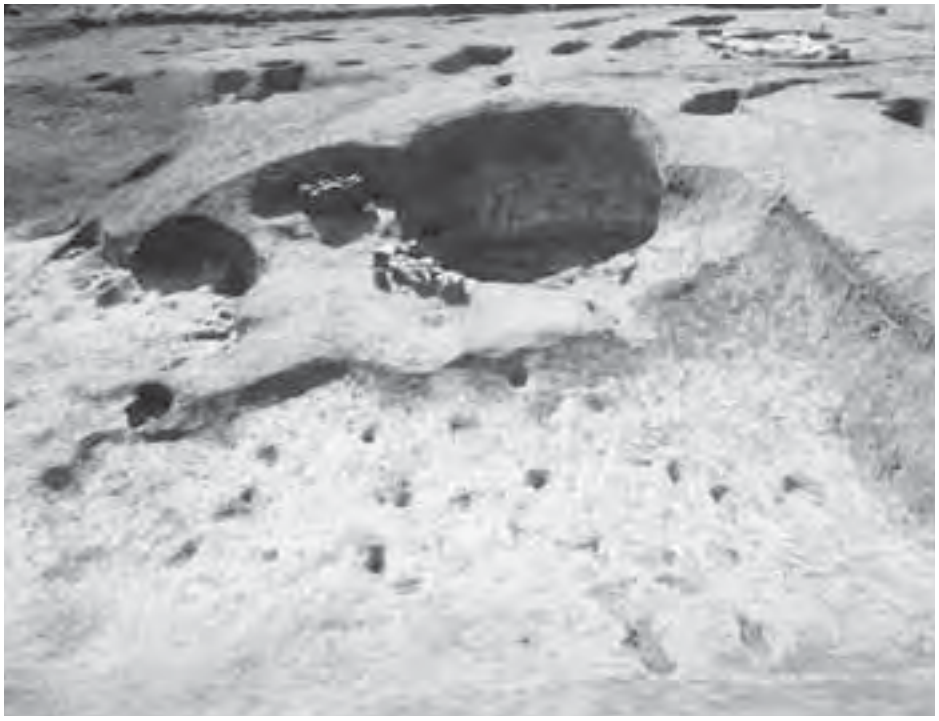
3．20号土壙墓（北から）

1．22号土壙墓（北から）

2．８号土坑（東から）

3．16号土坑（東から）

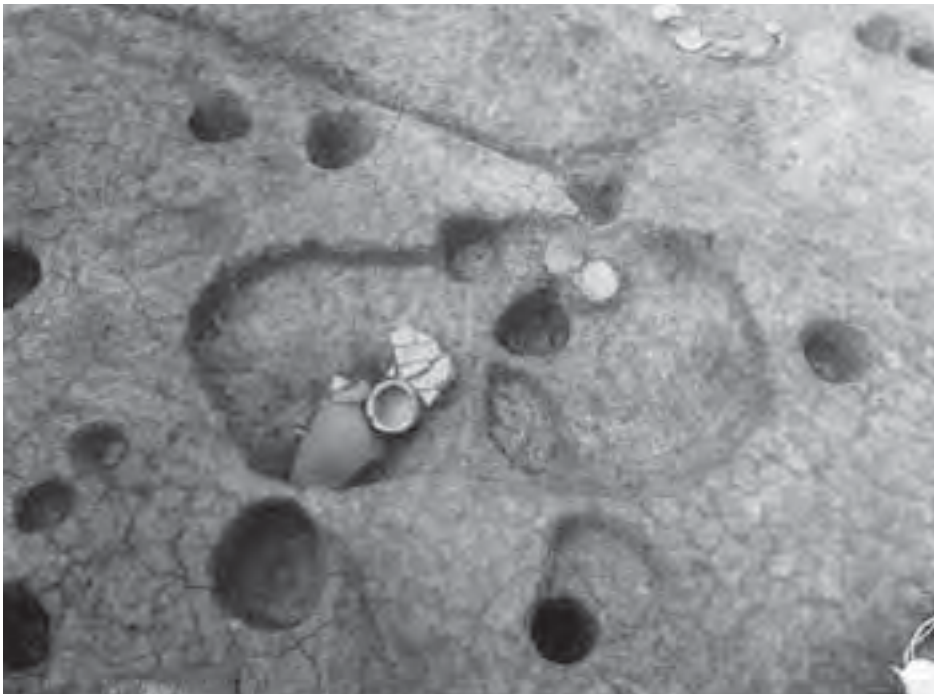
図版26



1．17号土坑（東から）

2．６号溝（東から）

3．１号竪穴建物(南から)



1．６号土坑（南から）

2．５号土壙墓（南から）

3．１号配石墓（南から）

図版28

1．９号土坑（東から）

2．18号土坑（西から）

3．19号土坑（南から）

1．21号土坑（東から）

2．23号土坑（北東から）

3．24号土坑（南東から）

図版30

1．25号土坑（東から）

2．４号溝西端土層（東から）

3．４号溝Ｈ－Ｈ’断面土層
（東から）

1．４号溝Ｉ－Ｉ’断面土層
（北から）

2．４号溝Ｏ－Ｏ’断面土層
（北東から）

3．５号溝西端土層（東から）

図版32

1．５号溝Ｋ－Ｋ’断面土層（北から）

2．３号溝Ｇ－Ｇ’断面土層（北から）

3．３号溝底面（南から）

1．１号土塁状遺構(東から)

2．９号溝（東から）

3．10号溝（東から）

32-1

37-1

37-2

37-6

37-8

37-15

41-7

44-1

44-2

44-5

46-1

46-2

出土遺物 ①

49-2

49-3

49-7

51-1

56-1

56-2

56-3

56-4

57-1

57-4

57-5

57-7

57-8

57-11

57-14

出土遺物 ②

57-15

57-16

57-18

57-22

62-2

62-8

62-19

62-24

66-2

70-1

70-7

70-8

出土遺物 ③

64-48

64-49

64-50

71-9

71-12

73-1

73-2

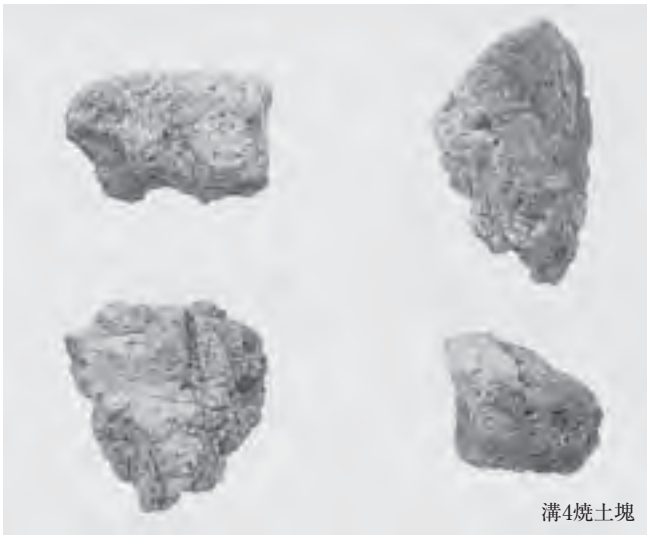
73-4

73-6

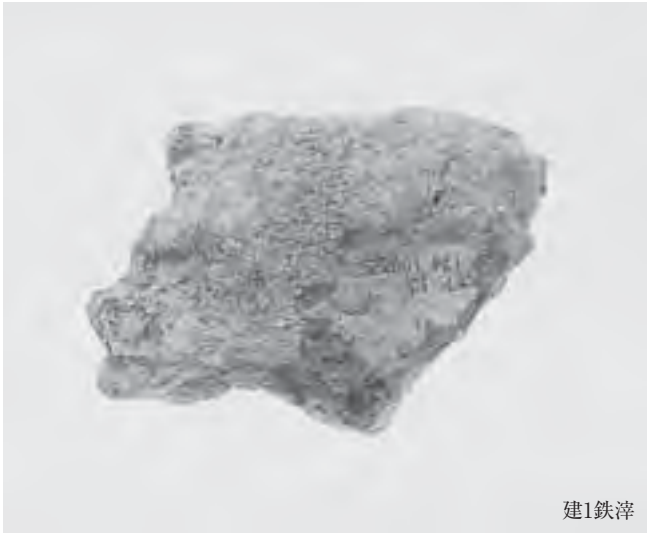
出土遺物 ④

図版38

73-8


溝4焼土塊

73-7


建1鉄滓

溝4鉄滓

建1焼土塊

溝4炭化物

70-12～29

出土遺物 ⑤

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおくぼむかいばるいせき・おおやぶいせき
書 名	大久保向原遺跡・大藪遺跡
副 書 名	県道大久保犀川線改築事業関係埋蔵文化財調査報告書２
シ リ ー ズ 名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第233集
編 著 者 名	岸本 圭（編）・吉田東明
編 集 機 関	九州歴史資料館
所 在 地	〒838－0106 福岡県小郡市三沢5208－3
発 行 年 月 日	2012年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
おおくぼむかいばるいせき 大久保向原遺跡	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 みやこまちかつやまおおくぼ みやこ町勝山大久保	40625		33° 41′ 04″	130° 55′ 02″	2004.12.13 ～2004.12.28 2009.2.26 ～2009.3.27	1,200	道路改築
おおやぶいせき 大藪遺跡	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 みやこまちかつやまおおくぼ みやこ町勝山大久保	40625	930105	33° 41′ 19″	130° 55′ 04″	2011.2.2 ～2011.3.25 2011.8.5 ～2011.9.15	1,700	道路改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大久保向原遺跡	集落	中世	土坑・溝	中世土器類	
大藪遺跡	集落・墓	弥生・古墳・中世	土壙墓・土坑・溝	弥生土器、土師器 中世土器類	居館跡

要約	大久保向原遺跡では、中世を中心とする土坑や溝が検出され、台地上に中世集落が展開することが判明した。 大藪遺跡では、中世の大溝が検出され、土塁が伴う居館跡と想定される。弥生時代の土壙墓の他、古墳の周溝が検出され、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１１７１０４
登録年度 23	登録番号 ０００７

大久保向原遺跡
大藪遺跡

福岡県文化財調査報告書第233集
平成24年３月31日

発行　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208－3

印刷　㈱富士印刷社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６-45